
アルクトテロス～異世界の守護者

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルクトテロス／異世界の守護者

【Nコード】

N7976L

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

双頭の赤竜と不思議な少女はアルクトテロスを探していた。一方なごむは、戸惑う心のままに“ここではないどこか”を望む。辿り着いた河川敷で異世界の扉が開かれたとき、運命の出会いはやってくる。異世界を舞台にしたローファンタジーです。（イラスト協力／あるぴよ様）

プロローグ

「雨だ」

鎧を纏った兵士達の誰かが、空を仰いでそう呟いた。

薄く塗ったようだった灰色の雲が陰鬱と重なり始め、静かに唸りをあげて雷雲へと変わる。湿り気が漂い始めてすぐに、真珠ほどの雨粒が天から降り注いできた。

ますます地獄絵図のようだと、その場にいる誰もが思っていた。

そこは不気味な地だった。

大地は老いたようにひび割れており、雨を吸うことすら出来ない。かつては力強く根付き青々と萌えていただろう大樹が、一枚の葉もなく枯れ、黒ずんでいる。

まるで火を放たれたあのようなそこには、巨大な穴がすっぽりと開いていた。

総勢五千人の屈強な戦士達は確かな指揮のもと、その穴を囲い、刃を向けて機を待っていた。

———それに。誰が掘ったわけでもない異質な穴にいる、それに。

不気味な地獄の大穴には、更に奇怪なものが蠢いていた。

古い血の塊。形容するならば、そんな言葉が浮かぶそれは、あまりにも大きく、あまりにもおぞましい姿を晒していた。

はらわたに似た赤黒い皮膚はぶよぶよと震えながら薄い緑色をした粘着質の体液を分泌し、肉や魚、ありとあらゆる生き物の亡きがらを寄せ集めて腐らせたような酷い臭気を放っている。

兵士達は鼻が曲がりそうな悪臭に顔を歪めながら、懸命に吐き気と、そして恐怖を押し殺していた。みな総じて、生命の危険を感じ

ていた。ここにはいてはいけなないと、彼らの中にある本能が警告していた。

彼らの生まれ住んでいる国はもう何年も争いをしていない。良き時代と良き王と良き隣国に恵まれ、命を削るような戦いに身を投じたことがない。故に兵士でありながら彼らは、死と遠かった。しかし。

今まさに、この場所で、誰もが生まれてこの方味わったことのない戦慄を覚えている。それは彼らが初めて出会う死の化身であった。

兵士達の肉体を怖気が舐めあげ、彼らの正義感が軋みをあげ、魂が逃避へ向けて高まり始める。

畏怖がせり上がり、頂点へと達しようとした、その時。
烈風が頭上を駆けあがった。

「顔をあげよ！」

凜とした声が雨と共に降り注ぎ、兵士達の肩を強かに叩いた。見上げると、そこには大きな影が翼を広げて雄々しく飛翔していた。

双頭の竜。

瞳は青い炎を巻き上げ、赤い鱗は紅玉のように艶めいては金色にも輝く。躍動する筋肉は厚く神々しく隆起していた。口を開けば獐猛な牙が、てらてらと怪しげな光を放つ。

巨軀を豪雨に晒す竜の背には、驚くことに人間が乗っていた。

強風に煽られ、さすらう髪。左右の髪で小さな三つ編みを耳の上まで結わえて残りを垂らした頭は、まるで子犬の耳を思わせ愛くるしい。後ろの髪はそのまま下げられ、肩甲骨を隠していた。その、艶やかな火焰色。

少女だった。

「兵士よ、顔をあげよ！ お前達の背後にあるのは逃避ではない。国である。神に愛され、豊饒な大地に恵まれ、親兄弟友人が時を刻

み命を燃やす、愛に満ちたお前達の母国である！ その母国を護りたくはないか！」

純白の服を着た可憐な少女。その闇色の瞳の雄々しき、猛々しさ。「私は護りたい！」

ビスクドールを思わせる整った顔立ちには似合わない荒々しさが、赤髪の乙女のその双眸にあった。

「護りたい者は、私に続け！！」

戦乙女の言葉に、兵士達は恐怖を振り払い、絶叫し答えた。士気が高まる。五千もの猛りが燃え上がる。それを少女は認めると、竜の背を蹴りあげた。

双頭の竜が咆哮と共に穴へと飛び込んでいく。

それに兵士達が続く。

無数の矢が黒い物体に向けて放たれた。放射線状に矢が落ち、続けとばかりに穴へと縄が投げられ兵士達が下りていく。

竜は滑空し、喉を鳴らすと巨大な異形に獰猛な爪をたてた。

爪はおびただしい体液を貫き、気味の悪い皮膚へ突き刺さる。竜の腕の剛力が確かに肉を掴み、引き上げ、飛翔して異形を切り裂いていく。血が噴水のように噴出し、少女の服の端を赤く染め上げる。

竜に続けと、矢の林と化した皮膚に降り立った兵士達も剣を突き刺す。

「ゆけ！ 進め！」

少女の鼓舞が響き、血しぶきがあがる。赤い雫が雨をすり抜けて舞い上がる。

その一粒が、まるで矢のように竜を追っていることに、誰も気づかなかった。

瞬間、竜の毛色の違う咆哮が木霊した。

剣を止めた兵士達は、翼や四肢を乱して暴れるように竜が落ちていくのを見て、驚愕した。

兵士の一人が剣を鞘に納めて兜をずらす。

灰色の毛並みに紫の瞳をした短毛猫。鎧を着た猫は、叫びながら落ちていく竜へと走った。

竜が落ちていく。少女が落ちていく。猫は豪雨と血の雨の中で、喉を振り絞る。

「ラシャ様あああ——ッ！」

絶望と憤怒に揺れ、統率を失った兵士達の背中に、血の矢が次々と飛んでいった。

第一話「はじまり」

> i 1 1 1 3 1 — 7 6 6 <

暗闇に灯火だけが浮かんでいる。寂しげに艶を出し、一筋の黒煙が天へと上っている。

静かに燃える、親指の爪ほどの何も照らさず誰も照らさない小さな火。それまで一定の火力を保っていた火が突然、油でも投げられたかのように勢いを高め始めた。

火は炎となり、黒煙とともに倍々と肥大していく。炎も煙も細胞増殖を思わせる不気味な動きで膨れ上がると、恐るべきことに変容し始めた。四本足の獣、まるで象のような形へと。

大きさは象よりも一回り大きい。火の粉を撒き散らし爆ぜるそれは、今にも動きだしそうな躍動感を持っている。

——否。驚愕にもそれは、動き出した。

神が何かを生むとき、このように作りだすのだろうか。火炎を掻き消して抜けだす巨大生物。脱皮を彷彿させる出現、ぬるりと炎から出でる。

四肢のひとつが地面に下ろさ、重苦しい轟音が響いた。圧巻の姿に大地が悲鳴をあげて震える。

突如出現した獣は、実に奇妙な姿をしていた。重力をも恐れぬ巨躯を灰色の長毛が覆い、銀色に輝いている。頭部と思われる部分には大人の人間ほどの黄金色の鋭い一角が伸びている。長毛から僅かに覗く目は三つで、額にもある瞳は意外にもつぶらに黒い。口は豹のようで、だが角と同じ色の牙が天に向かって二本、地に向かって二本生えていた。そして尻には尾の代わりに、黒い大蛇。チロチロと赤い舌を動かし、艶めかしく地面を這っている。

こんな生き物は、どこの動物園にもどの博物館にも辞典にも辞典にも存在しはしない。まるでそう、これは“異世界の生物”。

どこぞから太鼓の音が響いてきた。幽かな音はだんだんと己を主張し、激しく鳴動する。

太鼓の音が緊迫を誘い、緊迫が戦慄をもって最高潮に達する――。

次の瞬間、異形の巨体は一瞬で消え失せ、黒煙の中から燕尾服を着た男が跳躍した。

暗闇からの来訪者、その出現と同時に闇から歓声が湧いた。それまで暗がりにはまぎれ、我忘れ押し黙っていたのだろう人々からあがる感嘆。彼らの視線は一身に向けられる。

歳は二十代前半か。深々と被ったシルクハットで半ば隠れた顔、その唇の端は勝気に上がっていた。シルクハットに添えた右手、その中指には小さなリング。はめこまれたダイヤモンドは瞬く星のように輝いている。

男が人々に応えるように両手を掲げると人々の興奮は更に高まり、悲鳴のような歓声と豪雨のような拍手となって溢れた。

四方のライトが点灯し、暗闇に覆われていた舞台が露わになる。画面が切り替わり、舞台から観客席へと向けられた。

割れんばかりの喝采。五千人ほどの観客は総立ちし、皆々感激したように頬を紅潮させている。感動と興奮の大音声が飽和する。

燕尾服の男は会場をぐるりと見渡すと紳士よろしく一礼し、それから手で埃でも払うように燕尾服を整え、舞台の下手へと消えた。まるで何事もなく日常を終えたかのように。

そして踊る“天才マジシャン露頭・今世紀最大のマジック炎の獣”の文字――、

そこで、三分足らずの動画は終わった。

フローリングに簡素なベッド、漫画の並んだ本棚、子供向けアニメのイラストがついた学習机。ごくごく普通の子供部屋を包んでいた緊張がふっと緩む。部屋の主であるなごむが、パソコンから視線

を外して深い息を吐いた。

「やっぱり、すごいや」

少し早い呼吸を喉元に、呟く。マジックの流れを瞼に浮かべ、うつとりと夢見心地になっていると、

「なごむ、ご飯冷めるよ！ 本当いいかげんにして！」

叱責で意識を叩かれて、ぱっと現実に取り戻された。なごむはパソコンに表示された時刻を見やり、

「もうこんな時間！？」

慌てて机から立ち上がると、バラバラとランプが膝から落ちた。パソコンのマウスをいじって動画サイトを閉じ、パソコンの電源を落とす。床に散らばったランプを引っ掻くように集めて机の引き出しの中へと突っ込んで押しやる。

そこまでやってから、なごむは自室から飛び出した。

「お母さんどうしょよ！」

リビングへと走り、なごむはサッと椅子へと座った。食事の並んだテーブルを前にして、まず先ほどまで焼きたてだったろう食パンを口に頬張る。

「どうしょじゃないよ。お母さんは知りません」

リビングから覗くキッチン、そこでなごむの母親である理沙が食器を手早く洗っていた。エプロン姿の下は濃紺のスーツでかっちり決めている。

「なごむ何時に起きてたの？」

「六時」

「呆れた。お母さん今日は早いから車じゃ送れないって言ったよね？ どうするの、遅刻したいの？」

「遅刻したくありません……」

叱責にしょぼんと眉を下げると、理沙は深い溜息を吐きながら自身の腕に巻いた時計を確認した。

「三分で食べたからお母さんの車乗れますけど、どうする？」

「もう食べる！ もう食べるから！」

食パンをざっとコンソメスープで流し込み、サラダにむしゃぶりつき、空になった皿をシンクに滑り込ませる。歯ブラシを手に、寝ぐせの跳ねた黒髪を撫でつつ、なごむはリビングに置いていた鞆を握った。こんなこともあるのかと前日から用意していたあたり、用意周到というのか。

走りながら歯ブラシを済ませ口をゆすいでシンクに吐き出すと、
「準備万端！」

「準備万端じゃないの、はしたない！ 曲芸師じゃないんだから」
苦笑いしつつ、理沙もまた動きながら長い黒髪を束ねて後ろでひとつにまとめ、車のキーを掴んだ。

二人が玄関を出ると、青ざめるような空と強烈な太陽光が瞳と肌とを貫いた。夏の間に伸びた前髪に向こうにある小高い丘、そして住宅街。地平に見下ろせる海は、澄み渡っている。

その色合いに、何故か胸が疼いた。夏はもう終わりだというのに、まだ夏の匂いが残っている所為だろうか。景色に少し寂しげな暑さを感じながら、なごむはモスグリーンの軽自動車に乗り込む。

「もう九月なのに、夏っぽいね」

「そういえば、もうちよつとで誕生日ね」

運転席に坐した理沙が、唇を尖らせながらエンジンをかける。

「もうすぐ十三なんだから、もうちよつとしっかりとね」

「分かってるよ」

「そ」

理沙の手がギアを引き、アクセルが踏み込まれる。ゆっくりとモスグリーンの車体が動き出す。

アスファルトは朝の陽ざしに焼けて、空気を歪ませている。
のんびりと下りゆく通学路。

ふいに、車を運転させながら理沙がぽつんと呟いた。

「……今日ちよつと話あるから、寄り道しないで帰ってね」
「話って？」

くるんと視線を向けたなごむに、

「その時にね。急がなきゃ」

理沙は横顔で答え、アクセルを更に踏み込んだ。車が加速する。海と丘の街を滑るように走っていく。

どこかで、生まれる時期を僅かにたがえた蝉が、はかなげに鳴いていた。



「じゃあ、合唱を候補に入れまーす」

日の傾いた夕暮れ時、橙色に染まり始めた教室で少女が声をあげた。ホワイトボードの前に立っていた少年がマジックペンで“がつしょう二曲”と書く。クラスの委員長と副委員長である。

二人が司会をする姿を、なごむは後ろの席で眺めていた。頬杖をつきながら、早く終わらないかなと思う。

なごむの気持ちを億劫にさせる学級会議の議題は、文化祭で何をするか、だった。

学校では十一月に文化祭がある。舞台上上がってクラス毎に様々な出し物を発表する。発表する内容は何でも良いといわれているが、文化的で健全な学生らしい内容が基本であると定められていた。これが意外にもクラスを悩ませる。文化的で健全な学生らしい内容など、合唱か演劇と相場が決まっている。生徒も合唱か演劇で良いと思っっている。しかし、大人はそうではない。

「他に何かやりたい人いない？」

隅のパイプ椅子に腰かけていた女教師が、少々批判気味に口を尖らせた。個性を重視した教育方針に無個性にも盲目的な女教師の問いかけは、机に座っていた生徒たちをざわめかせるに十分だった。お前やれよ、嫌だよ、そんな掛け合いがあちらこちらで跳躍する。

ああ、時間がかかりそう。つまらなさを凝縮させた会議に嫌気が

さしたなごむは、時計の針を速めるべく、様々なことを思い出していた。出来事を淡々と振り返っていると、なごむの頭の端で、ふいに理沙が呟いた。

『もうすぐ十三なんだから、もうちょつとしっかりとね』

もうすぐ十三歳、もうすぐ終わりを告げる十二歳という年齢。

思えば十二歳という年齢は、なごむにとって特別なものだった。

小学校から中学にあがる区切りの年齢であつたし、心のどこかで何か新しいことが起こるような気がしていた。

なごむが小学生に上がった頃、近所に住んでいた中学生はとてつもなく大人に思えた。幼いなごむと比べて身長は高く、知識に富み頭がよく、運動能力が高く、堂々と歩く。

彼らのようになるんだろう。自然とそう思えた。

十二歳とは、自分が一際輝く人間になれるような、新しい世界へ行けるような、そんな希望を覚える年齢だった。特別な存在である自分が殻を割って羽ばたける、抽象的で確証もない、しかし妙に説得力を持った夢。しかし自分が同じ年齢になってみて、どうだろう。大人になれたらどうか。

なごむには、けして自分が思ったような大人になれたとは感じる事が出来なかった。知識はついたが賢さとは別で、体力もあるが能力とは違う。中身は何も変わっていない。変わることが出来ず、変われるような自信だけが埃を被ってしまっている。

埃を被った自信は少しずつ化石になっていく。そればかりか、自分だけして特別な人間ではないだろうという予感を覚えることの方が多くなってきた。

ふと、心が乱れた。居心地が悪く、心臓が重たく沈んでいくようだ。そのくせ、妙にふわふわとした浮遊感がある。走り出したいような、逃げ出したいような。

それが焦りだと気づいて、なごむは悲しくなった。

悲しみを塞ぐように、今度は朝に観た動画を頭で再生する。

この世には魔法はないが魔術や奇術といったものがある。カラク

りを隠し、魔術やら奇術やら表面上の奇跡を起こす者をマジシャンというが、なごむはマジシャンに憧れていた。その中でも一番の憧れは露頭という若いマジシャン。

現実とは思えない奇術を生み出す技術、高度な技術を生み出す想像力、そつなくこなしてしまいう度胸。

露頭の活動期間は八年と短かったが、彼はその八年で世界に名を残した。たった八年で、最高のマジシャンに贈られる名誉であるマジシャン・オブ・ザ・イヤーに輝いたのである。正に、天才だった。なごむの部屋には彼に焦がれて買った手品用の道具が、机の中や箆笥の中や鞆の中に仕舞われている。

授業に飽きたり、テストが早く終わったときなどに、小さくシャープペンシルを走らせては、オリジナルの手品を想像するのが好きだ。いつまでもそうしていたいと思う。手品のことを考えると、それだけで堪らなく興奮するのだった。

いつか、彼のように。

密やかな思い。胸に潜む蠟燭のような熱い気持ち。そして。

なごむがマジックに、露頭に夢中になるのは、彼が天才マジシャンであった理由ではなかった。

「ねえ。本当に他に何かないの？　うちのクラスだけよ、合唱しか出し物が無いの！」

甲高い声に、なごむはハッと顔をあげた。女教師が腰をあげて、教壇に立つ。その姿に不味いと思ったのだろう、委員長は声を張り上げた。

「他にやりたいことがありますかー？　自薦他薦問いませーん」

教室がしんと静まり返る。他人事のように皆々視線を下げる。なごむもまた同じだった。催し物など出来ない。全校生徒の前に出て、何かをするなどそんな度胸はないし、準備だつてしたくない。言葉はないが満場一致の思いである。

そんなことは教師も気付いているはずなのだが、彼女は教師とい

う立場上、それを認めようとはしない。拮抗、平衡、皆が動かない。早く終われば良いのに、合唱だけで良いと思うけど……。

興味のないことで椅子に座らされていなければならない束縛感と、他人事を決めながらも互いの腹を探り合うような緊迫感が妙に冷たい汗を流させる。早く帰りたいという苛々が募る。

それはなごむ以外も等しく。俯いていた視線を横にずらすと、皆同じように俯いていた。騒々しかった教室が嘘のように、静かに責任を押し付けあっている。

と、一人と目が合った。

小学校の頃、同じクラスだった松葉潤だった。同じ性別、男同士だったが仲は良くなかった。なごむは寡黙な性格で、彼は真逆なタイプ。良く言えば元気、悪く言えば騒がしい。そんな彼はなごむからサツと視線を外し、しかしまた戻した。茶色い猫っ毛から、黒い瞳が覗く。

それまでの無表情を思案顔に変貌させると、

「二子玉なごむ君はどうですか？」

堂々と自分の名前をあげられ、なごむは殴られたような衝撃を受けた。

「二子玉なごむ君はマジックができます！ お父さんが昔マジシャンでしたー！」

冷たく粘っこい汗が一気に噴き出る。なごむは眩暈と既視感を覚えていた。前にも同じような言葉を聞いていた。次に出てくるだろう名前は予測できた。

「露……、露頭っていう、有名な人でーす！」

教室がどよめいた。露頭というマジシャンの映像は、今でも時折テレビで取り上げられる。知名度は高く、子どもでも知っている名前だ。

「え、あの……」

心臓が早鐘のように打ち始める。教室中の視線がなごむに集中していた。

「二子玉君、マジックが出来るの？　じゃあ、お願いしちゃっても良いかしら？」

刺々しい表情をころりと変えて、女教師がなごむに微笑みかけた。柔らかな笑みであるのに、重苦しい圧力がある。なごむは脂汗をかいて、ぐちゃぐちゃに混乱した頭で現状を考える。

なんと言えば良いのか。表には出たくないのだ。絶対に嫌なのに。視線が突き刺さる。それとともに、教室の全員の声が聞こえた。やれよ、やりなさいよ、そんな声が。誰も声にしていないが、なごむには痛いほど響いてくる。先ほどのなごむと同じ、皆が他人事なのだ。

心臓が握りつぶされる、肺が凍りつく。鼻の奥まで込み上げる拒絶の痛みを飲み込んで、なごむはついに絞り出した。

「やります……」

白々しく拍手が沸く。なごむは無理やり笑みを繕いながら、震える両手を机の下に隠した。

第二話「ここではないどこかへ」

天才マジシャン露頭に憧れているなごむであったが、自分の父親が天才マジシャンだったらしいと知ったのは、他人の唇からだった。「おれの母ちゃん言ってたけどさ、お前の父ちゃんって、マジシャンなんだろう。昨日テレビでやってたぜ」

誰の言葉だったかは忘れてしまった。当時小学一年生だったなごむは、きよとんとして首を傾げた。

「お父さんはいんさつがいしゃの人だよ。ふつうのサラリーマンだったって」

そう答えたのが気に食わなかったのだろう、そのあと理不尽にも叩かれた記憶がある。泣きながら家に帰り、なごむは理沙にこの事を話した。

すると、

「うん。お母さんと結婚する前まで」

理沙があまりにもあっさりとしていたので、なんでだまされたのとなごむは猛抗議したものだ。理沙は話さなかっただけであり、決して騙してはいなかったのだが、なごむは憤慨して仏壇に馬鹿と言ったのけ尻を叩かれるはめになった。

泣きじゃくりながら仏壇に飾られた父・二子玉秀にこたましゅうの写真に謝ってみるも、穏やかに微笑むだけ。日本人離れた彫りの深い顔立ちはマネキンのようで、どこか華がある。マジシャンのようだと言われればそう見えなくもない。しかし、マジシャンだった父など、記憶のどこにもいないのだった。

僅かな父の思い出といえば、二人でよく散歩をしたことがある。肩車してもらいながら公園や土手を散策した。

「なごむ、ほら」

茜色に染まった河川敷の土手、青臭い緑の匂い、遠くで豆腐売りがラッパを鳴らしている。父が指を指す、墓標のようなビル群に沈

んでいく夕日。

「船があるぞ」

そこにはガラスで出来た船が浮かんでいた。夕日の中を悠々と佇む船は、威厳に満ちていた。まるで今から大海原に向けて航海に出る海賊船のようだった。

「すごい、どこへ行くのかなあ」

「どこかな。違う世界かもしれないな。ここではない何処かかもしれない」

思えば夢見がちな人だった。遠くに霞む高層ビルに、川の向こうのお椀型のビルが重なって船のように見えれば、船があると言い切る人だった。

不思議なところはあったが、マジシャンである素振りはなかった。もし生きていたら、マジックを覚えてくれたのだろうか。あの奇跡のような、魔法のような奇術を。そしていくつかの窮地を救ってくれたのだろうか。

父親の過去を知った翌朝、なごむは奇異の目にさらされた。なごむの父親がマジシャンだという話は学校中の噂になっていたのである。

「二子玉君ってお父さんがマジシャンなんですよ。マジックしてよ！」

「露頭っていう、有名な人なんですよ！」

同級生どころか、見知らぬ上級生にまで腕を掴まれ、なごむはマジックを求められた。

しかし、記憶の中の父がマジックを披露してくれたことはない。なごむが四歳の頃に交通事故で死んでしまったために思い出は少なく、マジックどころか初歩的な奇術の道具となるトランプをした記憶すらない。当然、なごむにマジックなどできようはずもなかった。

「できないよ。お父さん、ぼくが小さいときに死んじゃったもん」

なごむがこう答えると、今度は哀れみの目が向けられるようになった。母子家庭だということは誰にも言うておらず、知る者は少な

かった。

見ず知らずの他人にまで、

「あの子お父さんいないらしいよ」

そう指をさされて、なごむは自分が惨めだと思った。片親の家庭などそう珍しくはないというのに、まるで自分だけのような気がした。

説明すればするほど、父のことを言葉にすればするほど、哀れまれて、ついにはどうして良いのか分からず、ただ笑うことにした。何も出来ずに臍を噛み、腹立たしさを感じながらも笑って誤魔化す。もし父が生きていたならば、あんな思いはしなかったろうか。自分に少しは自信があったろうか。意思を飲み込まず誰かに伝えるようなことが出来ただろうか。

ましてや、今日のようなことなど。

太陽が沈みきり、すっかり暗くなった河川敷で、なごむは父に教わった船を眺めていた。きらきらと星屑のように輝く船は、何処へも向かうことなく漂っている。ガラスで作られた美しいそれは、重たい錨を下ろし、何処へ行くことも出来ない。なんてことはない、遠目で船に見えるだけの、ただのビルなのだから。

胸に蠢く孤独感や絶望を吐き出すように、なごむは深呼吸した。黒く冷たい感情は澱のように残ったまま、流れることなくゴロゴロと喉を鳴らしている。

マジックは、出来る。簡単なものであれば。

なごむは露頭の一件からマジックをするようになった。落ち込むなごむに、理沙が露頭のビデオを見せたのだ。最初は嫌々だったがしかし、舞台の幕が開くと、瞬間に心を奪われた。

華麗な手さばきで露頭は何もない空間から炎を出し、氷で会場を冷やし、風を巻き起こした。そしてマジックのクライマックス、彼は燃え盛る火炎から誰も視たことのない巨大な生物を生み出した。

魅了されないはずがなかった。それが実の父親であったから、尚更に。

学校での憐憫やマジックへの嫌悪感など何処へやら、なごむはすぐにマジックに夢中になった。奇跡の正体を知りたかった。そしてそれを、自分の手で操りたかった。

——あの生き物に、実際に会ってみたい。

なごむがひっそりとマジックの道具を集め始めるのに、時間はかからなかった。

そう、マジックは出来るのだ。

しかしそれは、求められる内容ではない。マッチ箱からコインを消したり、人が引いたランプを言い当てたりといった、ごく簡単な手順とカラクリで誰にでも出来るマジック。天才マジシャン露頭が披露し世界を熱狂させたそれとはあまりにも隔たりがある。

だからこそ、マジックをやっていることは誰にも言わなかった。口を閉ざし、マジックのマの字も言わず、素知らぬ顔をしてきた。秘密の趣味だったのである。

なごむを推薦した松葉は、冗談半分だなごむを推したのだろう。帰りたくて帰りたくて、女教師の重圧に罅を入れるため適当になごむの名前を出したのだ。父親が死んでいるなどという事情も忘れてしまっているかもしれない。ただ、なごむの顔を観て、記憶の奥底からマジックという単語をひねり出しただけに違いなかった。

なごむが承諾したのは、松葉にとって想定外のことだったろう。なごむ自身、自分が信じられない。何故こんなにも押しに弱いのか。歳を重ねるごとに、断るということがどんどん苦手になっていくように思う。

が、もしもマジックを少し齧っているという事実がなければ。：事：の成り行きは、違う結果となつたろう。小さな秘め事が心に後ろめたい歪みとなって、首を縦に振らせてしまったのだ。

「馬鹿正直って、こういうの言うんだろうな」

誰も助けてはくれない。すべては自分が招いた面倒事だ。そうは分かっているのに、どこか不条理に思える。苛立ちを覚える。

なごむはそんな自分が好きになれない。嫌いともできないが。

……嫌になる。



家に帰ると、理沙はまだ戻っていなかった。時計の針は六時すぎを刺している。理沙の仕事が終わるのは五時。携帯電話には残業のメールは入っていないので、そろそろ戻ってくる頃だと思われた。なごむは家の電気を付けて回る。最後に仏壇のある座敷に足を伸ばして、お線香をたてた。最悪の気分の中で手を合わせ、安らかにお眠り下さい、とだけ囁く。

学校でのことは考えないようにした。あの世とやらが本当にあるとして、なごむの悩みが伝わるのは、嫌だった。

「ただいま」

玄関から理沙の声がして、なごむは立ち上がった。

「おかえりなさい」

「疲れた疲れた。なごむ、鍋しよう。すき焼きしよ」

「すき焼き？」

玄関に出ると、理沙がヒールを脱ぎながら食材の詰まったエコバックを床に下ろしていた。理沙の背後に、

「なごむ君、こんばんは」

「あ。克明さん」

片手をあげる中年の男。ふっくらとした顔にでっぷりとした腹を付きだす姿は、狸に似ていた。寒川克明は、理沙と今は亡き露頭の古い友人だ。

「どうしたの？」

「秀しゅうと話があって」

なごむは目をしばたいた。

克明は月に一度は家に来て一緒に食事をする。大抵は仕事が早く

終わったからとか、お土産があるからとか、独り身だから寂しくてだとか、そんな些細な理由だった。露頭が口実に出るのは命日くらいだが、今日は命日というわけではない。

「珍しいね」

「珍しい話をするからね。なごむ君にも後でいうね」

のほほんとした笑みで克明は家に上がると、真っ先に座敷へと向かった。仏壇を最初に拝むのは彼の常だった。律儀にも十分ほど、手を合わせるのだ。

「珍しい話って何だろ」

「ん、後でね。すき焼き作るの手伝って。材料切る係！」

「はいはい」

親子で協力して料理を作るのが二子玉家の習慣である。なごむ達は手際よく準備し、克明が座敷から戻ってくる頃には、既に食卓ですき焼きがグツグツと煮えていた。砂糖と醤油で出来た割り下が濃厚な匂いを放ち、鼻腔をくすぐる。

「ごめんね、手伝わなくて。……それにしても美味しそうだね。唾液が出て口の中が痛いよ」

ごくりと唾液を飲み込む克明を、なごむは椅子に案内する。

「早く食べよ、我慢できないもん」

三人が食卓に集まったところで、なごむは叩くように手をあわせた。

「いただきますっ」

すき焼きは鍋の中で揺れながら食欲を誘う。

なごむは箸を伸ばし、溶き卵に熱々の食材を潜らせた。湯気を立たせるそれにしゃぶりつくつと、絶妙な甘辛さが舌に広がった。炊きたての白米も進む。

夢中になると早いもので、あっという間に鍋は空になった。

「締めにうどん入れようよ、うどん」

そう言うのと、なごむは腰をあげて冷蔵庫をへと向かった。

「あー……。なごむ君」

振り向くと、克明が箸を静かに下ろしていた。

「うどん買ってなかったっけ？」

「いや、そうじゃなくてね。本当はごはんの前に話したかったんだけど」

ふいに部屋の空気が変わったのを、なごむは感じた。克明がいつになく真剣な表情をしている。そればかりか、理沙も同じように、緊張の色を浮かべていた。

普段は見せない二人の顔。まるでドラマの中のシリアスなシーンみたいだと、なごむは思った。

——珍しい話をするからね。

克明が先程言った言葉が通り、なごむはうどんを取らずに椅子へと戻った。

「なごむ、あのね……」

言葉を丁寧な舌で選ぶようにして理沙が次いだ。躊躇いがちに切り出されたのは、

「お母さんがもし再婚したら、どう思う？」

予想だにしていなかった内容に、思わず目をひんむく。

今まで色恋や親戚や友人以外の異性の話など理沙の口から出てきたことはない。そういう匂いを感じたことがなかった。

なごむにとって理沙は母親だ。あくまでお母さんという固有題名詩的な存在であり、それ以上もそれ以下もなくカテゴライズされている。理沙は母親という枠にはまっており、誰かの恋人や妻である、あるいはそれらになりうるという意識をなごむは持ったことがなかった。そして、それで問題はなかった。

「突然、なに」

「どう思う？」

「どうって……」

現実感がない。無数の感情が喉に詰まる。心臓が忙しくなく、体のありとあらゆるところがうろたえる。肌も、肉も、骨も、ふわふわとして落ち着きを失っている。そのくせ、頭はやけに冷たく冷え切

っていて、機械的に物事を整理しようとしていた。

理沙が出す緊迫感。目くばせする克明。言葉の意味、今までのこと、これからのこと。家庭のこと、世間体のこと、学校のこと、父親のこと。パズルのように散らばっていた様々な要素が少しずつ纏まる。克明は父の古い友人、理沙とも古い友人、ずっと関係が続けてきたら。

三人の古い友人のひとつが消えて、残された二人がまだ若い男女だったら。小学五年生の時の保健体育。コンビニの棚の端のところ。夏休みにリビングでふいに観てしまう馬鹿馬鹿しい作弄的な昼のドラマ。

無数の感情が固まり、ひとつとなる。滲み出てきたのは、吐き気に似た嫌悪感だった。

「そういうこと？」

「……」

なごむの問いに理沙が押し黙る。どう切り出すか考えあぐねているような。克明もまた同じ。そんな二人の機略を思わせる態度に触れ、ふわふわした体が勃然と変質し、泥になる。黒く、錆びついた、重苦しい泥に。

——何で今日なんだろう。

なごむの頭の隅で転がる疑問。

——よりによって、何で今日なんだろう。

納得するには、理解するには、あまりにも時が悪かった。なごむはそれほど幼いわけではない。理沙と克明の関係がそうなれば良いのにと願ったことも、少しはあるのだ。克明は格好の良い男ではない。仕事の話を聞く限り、人を嫌いになれず人に嘘もつけない、世渡りの不得意な性格。だが、それ故に誠実で優しく、人を癒すことができる数少ない大人であった。

理沙がもし再婚を望むのならば、克明が良い。

ほんの少しではあるが、そういった可能性を望んだことは、あった。

けれどその些細な思いを、学校でろくでもない痛みを背負ってしまった今日だけは、現実を感じるわけにはいかなかった。亡き父への憧れが少しでも汚されるようなことを、呑みこむわけにはいかなかった。

ふざけんな、やめてよ、今日こんなことがあったんだよ、お母さんはそれでいいの、克明さんはお父さんになんていうの、友達だったんじゃないの。

断るにはどうすればいいの、傷つかず傷つけない方法はないの、どうすればいいの、どういえばいいの、なんていつてほしいの、なにをしてほしいの、いったとしてそれがなんになるの。

もう決まっている、選択の余地のない未来。

それは、嫌なんだよ。

嫌悪感が分散し、感情の濁流となってなごむを責める。喚き、叫び、嘆き、籠る。閉じる。遠ざかる。遠ざかっていく。

呆然となって漸く零れた言葉は、小さかった。

「……分かんないよ」

重心を失ったように後じさる体。一度動いてしまうと、あとは止まらなかった。ふらつくのを足でなんとか支えて、リビングを去ろうと腕を動かす。リビングから玄関へと向かい、玄関前の階段から自分の部屋へ行けば。

「なごむ」

理沙が椅子から立ち上がり、前に出る。理沙の目に足が逃げる。キッチンから回りこんで廊下に出る。ああ、こっちの廊下じゃ駄目だ、部屋に行けない。こっちは理沙の部屋しかない。

克明も立ち上がる。

「なごむ君」

無意識に両手が耳を塞ぐ。堰き立てられた水のように、なごむは理沙の部屋の扉を開け、しっかりと鍵をかけた。

「なごむ！」

理沙がよく使うローズ系の香水の芳香がする。普段は安堵を感じ

るその匂いに、眼球が熱くなり、視界が歪んだ。ぐにぐにと揺れる理沙の部屋。本棚、キャビネット、ベッドが目にとまり、背ける。ここにはいたくない。ここではない、どこか。どこかへ行きたい。

迷うなごむの視界で、きらりと何かが光った。化粧台の上に、銀のリングが乗っている。手に取ってみると、それは母親が左の薬指にいつも付けている指輪だった。簡素な輪に埋め込まれた小さなダイヤモンドは、結婚のときに父から送られたはずのもの。思えば、外していることの方が最近が多かった。

「なごむ、お願い。お母さんの話を聞いて」

扉を叩かれ、なごむは動揺した。鍵はかけてあるが、非常時はコインを使えば外からも開けられるタイプのものだった。開けようと思えば簡単に開けることが出来る。

「ちゃんと話そう」

理沙の訴えに我慢できなくなり、なごむは扉から背を向けた。理沙の部屋は一階。窓枠へと、なごむは手を伸ばした。

あとは、無我夢中だった。

理沙の部屋から庭へ飛び出し、サンダルを足に引っ掛けて家から飛び出した。右のわき腹が痛み、肺が激しく収縮し、熱い血液がめまぐるしく回る。酸素が足りなくなり、眼前が朦朧とし、膝が笑う。滴る汗が目に入って沁みたが、構わず走った。

夜の帳が下りた住宅街を過ぎ、丘を下って商店街を横切り、父との思い出がある河川敷まで下ったところで、足が縛れた。舗装されたコンクリートから躓いて、土手の脇に生えた草はらに肩からぶつかる。ごろごろと、土手を僅かに転がって、なごむは背中を打ちつけた。

ぜいぜいと懸命に呼吸する。喉がずきずきと痛んだ。気道は燃えるようだ。呼気と汗と緑の匂いに咳き込みながら、気付けば泣きじやくっていた。恥ずかしく、情けなく、腹立たしく、悲しく、なにより空しかった。こんな思いを抱き抱えねばならないことが、割り

切れない。そして口に出来ない自分の小ささが堪らなく寂しい。

幾重もの感情が虚無をこまねいて、乱れる。孤独と寂寞がなごむを苛む。

いっそ、この世界から消えてなくなることが出来ればと、思う。死ぬのではなく消え去りたい。まるでなごむなどいかなかったかのように世界が回れば良い。消え去って、どこか遠く、この世界にはいたくない。

ちらりと横目に、父が教えてくれた船があった。父の中で、異なる世界を目指しているかもしれないガラスの船。手にはリングがある。父が母に送ったリング。かつて父がマジックの舞台で、指に光らせていたリング。

奇跡が起これば良い。かつて父が起こした奇跡のような。あの不思議な生き物のように、炎に包まれて消えるのだ。消えてなくなる。全てがなかったことになる。

そして何処かへ。ここではない、何処かへ。

心を唇へと、なごむが絞り出す。

「……だれか。だれか助けて」

その瞬間だった。唐突に全身が燃え上がったのは。

めらめらと炎が皮膚に立ち上がり四肢を舐める。なごむは悲鳴をあげ炎を振り払おうとし、止めた。熱さを全く感じない。不可思議な事態に驚愕しながら、なごむは呻いた。あまりの眩しさに目を瞑ると、視界だけでなく音まで消えた。風の音も、川のせせらぎも、遠くを走る車の音も。

ついに触感まで無くなって、そこでなごむの意識も吹っ飛んだ。

第三話「異世界」

目覚めると、少女は自身が覚えのある場所にいることを知った。

そこは彼女の寝室だった。黒く長い睫毛の先にある見知った天井をぼんやりと見つめてから、自分が滂沱と汗をかいていることに気付いた。それから、自身の身に起こったはずの出来事を思い出し、彼女はベッドから飛び上がった。

途端に、眩暈を覚えるほどの疲労が彼女を襲った。筋肉どころか骨まで石のように重いことに呻き、弱弱しく寝具に身を沈めると、傍らに佇む人物が顔をあげた。金髪を肩まで流した軍服姿の青年だった。

「……なんで、いる」

戦慄く舌を動かして、赤髪の少女は問う。

「どうして、こんなところに、いる」

少女の問いかけに答えることなく青年は立ち上がると、机に置かれた呼び鈴を激しく鳴らした。鈴の音に、寝室の向こう側が俄かにざわめき始める。

「答えろ、ジャलगボールグ！」

「黙って寝てろ」

青年の叱責に正面からぶつかり、少女が大きな漆黒の目を丸める。まるで可憐な、人形のように。

「……みんなは？」

少女は寝具を握りしめて呟いた。

「みんなは、どうなったの？」

青年は唇をきつく締めて、少女を見つめ返した。その瞳は冷たく、冷めきっていた。表情の意図が少女の小さな胸を貫き、心臓を抉る。

「私のせいだ。私が計画に従ったから……私の……」

途中で擦れて虚空へ消失していく。小さく震えた、嗚咽を嚙み殺した唇で、少女は伏せた。額も、頬も、蒼白だった。指の先まで悲

壮で染まり、血の気を失っていた。

悲観にくれる少女の細い肩に、青年は手を伸ばした。

「お前のせいじゃない。大丈夫だ。まだ手はあるって。沢山、なあ……」

しかし青年の手が少女の肩に触れることはなかった。青年は寸でのところで手を止めた。彼女の放つ思いが、異なると気づいて。

「……探す」

少女の眉間には深い皺が寄っている。黒い瞳には涙の膜が浮かんでいる。しかしその眉根の、なんと鋭いことか。その口元の、凛々しいことか。

「……………私が彼らを、見つけて見せる」



暗闇に炎だけが浮かんでいる。親指の爪ほどの、何も照らさず誰も照らさない小さな炎が静かに燃えている。一筋の黒煙を天へと上る。

朦朧としながらなごむは炎を見た。炎もまた、なごむを見つめているようだった。

『なごむ……』

不思議と人を落ち着かせるような低い声が暗闇に響いた。年老いた男性のようであり、その一方で若い青年の声にも思える。

声はなごむを呼んでいた。囁くようになごむの名前を何度も呼んで、それから。

『……君が望むのならば』

そう言って、途絶えた。炎まで消えていた。

暗闇に一人だけになり、なごむは怯えた。朦朧としていた頭が恐

怖に冷えていく。

次第に、感覚が戻ってきた。背中と尻に固いものがある。壁と、地面だ。やけに冷たい。自身が触れているものを理解すると、嗅覚や聴覚も目覚めてきた。靄が晴れていくようにすべてが鮮明になってくると、自分が土手にはいないことになごむは気付いた。どこから聞こえる、お経のような音。くぐもっている。

トンネル、という場所が頭に浮かんだ。

身震いしながら、ゆっくりと瞼を開ける。視覚も、穏やかだが開けてきた。

炎に巻かれたことを思い出し、はっと両手を伸ばすと、まっさらな皮膚が目映った。焼け焦げた跡はひとつもない。

身体に問題がないことを知って、なごむは頭をもたげた。

トンネルではない。なごむが目覚めた場所、そこは洞窟だった。

「え、なんで……」

信じられず、疑問を口にする。

「ここどこ……」

目を擦り、再び三百六十五度、確認する。土手ではない、そればかりか来たことも見たこともない場所だった。湿った空気が舌に、苔と黴の匂いが鼻腔に乗る。なごむがいるのは洞窟、そして立っているのは、

「王座？」

耳慣れない単語が浮かぶ。降りてから、まじまじと凝視する。石で出来た椅子に、囲むように墓石の様なものが置かれていた。祭壇のようにもみえる。脇に石でできた鉢が置かれており、中には紫色の果物の様なものが詰められている。あけびのようだが、皮が割れて覗く身の部分は緑色だった。

地面にはところどころ、火のついた蠟燭が置かれている。それが幽かな明かりとなって、なんとか洞窟の中が見渡せるが、誰もいな

いし何もない。祭壇の他には、ぽっかりと、入り口なのか出口なのか穴があいているのみだ。

お経のように鷹揚のなく讃美歌のように厳かな音が静かに反響している。聞いたことのない、恐怖を掻き立てるような……歌だろうか。歌は、穴から木霊している。

怖い。不気味だ。何もかも気味が悪い。

ぶるりと震える。肌寒さも手伝って、腕を抱えた。パーカーの下にはTシャツと七分丈のジーンズ、それにサンダルだ。備えらしいものは何もない。そういえば、ポケットに携帯電話があったかもしれない。

ジーンズのポケットを探ると、携帯電話があった。鮮やかな黄色に安堵を感じながら画面を見やると、圏外だった。恐ろしくて足が竦む。焦りと心細さがふつふつと泡をたてる。自分はどうしてこんな場所にいるのか、全く分からなかった。

炎に包まれて、それからどうしたのだろう。ここではない何処か。

「まさか、違う星とか、違う世界とか？」

認めたくはないが、それならば説明がついた。自分はゲームのような世界に迷い込んでしまったのかもしれない。

喜ぶべきところなのだろうか。しかしとてもではないが、おどろおどろしい光景に嬉々とは出来なかった。

青ざめていると、ふいに歌が止んだ。代わりに、ざわめきが聞こえる。人がいるようだった。口々に様々なことを言っている。しかし、海外の言葉ではなかった。ひそひそとした、だが理解の出来る単語の数々。その中に、

「おかあさん……」

どうやら幼い女の子がいるようだ。安心に心が和らいで、なごむはほっと肩の力を抜いた。

宗教団体の施設か何かだろうか。自分は浚われてしまったのだろうか。

「でも、掴まってないんだよ、ね……」

恐る恐る、なごむは穴へと向かった。1メートルくらいだろうか、くぐれば通れそうな大きさのそこから、顔だけ覗かせる。

と、目が合った。フードを被った顔が、眼前に合った。掘りの深い皺だらけの顔に、瞳は緑色だった。白人の老女の出現に、なごむは悲鳴をあげそうになる。

「お、おお……おお！」

体をひっこめる前に、なごむは腕を掴まれた。老女とは思えない力で引きよせられたかと思うと、老女は腕をなごむの足に絡めでそのまま平伏した。

「カケラが、我々のもとにティマトのカケラが生まれた！」

そのまま老女はむせび泣く。狼狽し老女の頭をあげようとしたなごむだったが、硬直し叶わなかった。周囲に老女だけではなく多くの人間がいることに気付いたからだった。

百人いるだろうか。老若男女、皆同じようにフードを被っていた。色は白く、まるでゲームに出てくる白魔道師のようだ。共通していることと言えば、白人に見えること。そして栄養状態が悪いのだろうか、皆頬がこけやせ衰えている。口々にカケラよ、カケラよ、そう叫びながら、地に額をつける人々。訳の分からない、カルトのようだったが、なごむを傷つける意思はないようだ。

「あの……ここはどこですか？」

なごむの質問に人々はざわめき、

「聖ア王国は黒狼山脈の麓にあります、ジグにございます。私は村の長のジグシグアと申します」

伏し拝む老女の説明に、なごむは耳を疑った。膝をつき、頭を傾げる。

「え？」

日本語のはずなのに、聞いたことのない地名と名。カルトではないのだろうか、これは一体、どういうことなのだろう。

「まさか……」

異なった世界。異世界。

自分は、異世界に来てしまったのだろうか。

「あの」

「はい」

「この、世界は、なんていうんですか？」

「世界の、名と……。なんと深いお言葉でしょう。この世界の名を知りたいと。ティマトのカケラよ、しかしながら無知な私をお許しください。私に、世界は世界でございます。アレプとタウがワイミールを殺し、その血肉で世界と作り上げ、ティマトが封じられてしまっただけから、なにひとつ世界は変わりませぬ。ああ、望むべき答えでなければ、私を食べてくださっても構いません」

「いや、あの、その……。ありがとうございます。あ、食べるという意味ではなくて、その……」

なごむは困窮した。どうやら世界の理が異なっているようだ。老女の話から推測するに、自分はティマトのカケラというもので、老女たちにとって神のような存在のようだった。

魔法か何か、使えるようになっていたのだろうか。思いついて、なごむは手のひらを天にかざしてみた。

「め、メラ……」

ぼそりと、ヒットを繰り返すゲームで使われている炎の呪文を唱えてみる。が、何も起こらない。恥ずかしさがこみあげ、耳まで真っ赤にしながら俯くと、期待の眼差しが突き刺さった。

「メラ、と。それはどのようなものでしょうか」

「メラ……めらめらと燃えるような、その……」

まるで趣向を凝らしすぎて伝わらなかったネタの、笑いのポイントを説明するお笑い芸人のような気分になり、なごむは口を閉ざした。穴があったら隠れたいというのはこのことだ。羞恥にもだえていると、老女がああ、と思いついたように目をパチパチとさせた。

「いまお待ちします。……これ、ロンチャーを」

静々と一人の男が石の腕を持ってきた。片膝をつきながら、ずいとなごむに差し出す。

「どうぞ、お召し上がりください」

手渡された腕を両手に持つ。ずしりと重いそれには、なみなみと何かが注がれていた。黒っぽい、重油に似た液体だった。嗅いでみると、錆びのような悪臭が鼻をついた。嗅いだことがある匂い。記憶を探って、怖気が走る。血の匂いだと、ピンと来た。

「これは、なに、なんの血ですか」

「何をと申されても。贄のロンチャーでございます」

老女が指をさす。その指の先に、横たわる山羊がいた。いや、山羊ではない。毛がシマウマでのような縞、しかもピンクとライムの色の縞だった。ロンチャーという生き物は、首の部分がすっぱりと斬られていた。そこから鮮やかな血が流れている。舌をべろりと出し、泡をふいてロンチャーは死んでいた。

思わず力が抜け、腕を落とした。転がり、中身が飛び散る。なごむの足元にかかり、

「わあ！」

飛び退いたが遅かった。ロンチャーの血はべったりとなごむの足にかかり、つんとした匂いに異液がせり上がった。吐き気を飲み込みながら懸命に耐えていると、

「ティマトのカケラ……？」

人々の表情が翳る。疑うような色に変わる。なごむの慌てようが

彼らの意にそぐわなかったのは確かのようにだった。

不信の瞳にさらされ、なごむは浮足立つ。なんとかこの場を上手く切りぬけるにはどうしたらいいのか、息を詰めていると、突然老女がその場に倒れこんだ。足に老女の重みがかかり、なごむはその場に尻をついた。

「いたっ」

目の前を何かが掠っていく。隣にいた男もまた、ばたりと倒れた。驚いて上半身を起こすと、老女の体に棒が生えていた。隣の男にもひゅん、ひゅんと何かが風を切るような音がした。途端に、次々と人々が倒れていく。地面に平伏し、呻く。何人かの人倒れて、ようやくなごむにその正体が分かった。

手のひらに温かい液体が滴る。赤い、錆びついた匂い。

人々に突き刺さる木で出来た、

———矢だ。

「神兵だあああー！！！」

絶叫が洞窟を四散した。人々が悲鳴をあげながら逃げていく。人が波のように押し寄せ、ぶつかってくる。血しぶきが飛んで、人々が躓いたように倒れていく。人垣が碎ける。赤ん坊が泣いている。女性が甲高く絶叫し、息を止める。男の大柄な体がなごむに被さってくる。なごむは押しやられ、つぶされた。

なごむの意識は鋭敏だった。ぐったりとした男の体におしつぶされながらも、阿鼻叫喚の中、人々が次々と倒れていくのを感じた。悲鳴がどんどんとその音を減らしていく。

震撼する。おぞましい事態に心臓が警鐘を鳴らしているが、這うことも出来ずなごむは震えた。歯がかちかちと鳴り、汗が滂沱と噴き出す。

「ティマト……」

ふいに、老婆の呻いた。生きていたのだ。しかし姿は将棋倒しになった人々のせいで分からない。地に腹をつけながら、なごむは耳をすませた。

「ティマトのカケラが助けて下さる……助けて、くださ……ル……」
老婆の呻きは細糸が切れるかのように、ぷつんと途絶えた。侵食する死の恐怖に、なごむは絶叫した。死にたくなかった、あまりにも無慈悲な現実、なごむは抵抗する。男の体を手で押し、蹴りあげる。重たくてビクともしない。パニックに陥り、動転し、号泣する。

嗚咽が喉に絡んで、すすり泣くことしか出来なくなったなごむの体が、ふいに軽くなった。

「おい、生き残りだ」

顔をあげると、皮鎧を纏った屈強な中年男がにたと笑っていた。既に死体となった男を片手に持ちあげ、もう片方には血まみれの短剣を握りしめている。血が滴り、なごむの頬に落ちた。

「この邪教徒、服が変だぞ。顔も、なんだろうな……」

中年男が眉をあげた。同じように皮鎧を着た男達がなごむを覗きこむ。その中の一人に首を掴まれて、なごむは引きづりあげられた。力なく虚空を見上げる人々が目の端に映る。白かったローブは真っ赤に染まっていた。

「まさか。ティマトのカケラじゃないか？」

「おいおい。本当か。まだ子供だ、これなら殺せるぞ。殺すか」

「いや。まず上に指示を仰ごう。じゃなきゃ、俺らが邪教徒扱いだ」
神兵と呼ばれた皮鎧の男達は哄笑しながら、茫然自失のなごむを皮のロープで縛り上げた。あまりにきつく縛られ呻くと、腹を蹴り上げられた。我慢できず、吐瀉物を吐き出す。

「きたねえな！」

神兵の一人にかかったらしい。怒声を上げながら、神兵が短剣の

鞘を振り上げた。鞘が落とされ、強かになごむを打ちつけんとした刹那、

『なごむ、目を瞑って、丸まって』

言われたとおりに目を閉じ体を前屈させると、鞘がなごむの体をかすった。地面が揺れたのだ。

驚いて瞳目すると石畳の床が割れ、轟音と共に炎が噴き上がり、なごむを包む。

突風が巻き起こった。雷撃が走り、なごむを避けて周囲に弾ける。驚いた神兵達が群れを解いて蟻のように逃げ出した。逃げ遅れた神兵が数人、よろめいたかと思うと、足を風に絡みとられ枯れ葉のように吹き飛ばされる。

『目を瞑って。なごむ。お願い』

謎の声。なごむはあまりのことに啞然と開いていた瞼をぎゅっと閉じ、頭を抱え込んだ。まるでなごむがそうするのを待ち構えていたように、突風と雷撃の力が増した。

巨大な獣が噛み砕くようにありとあらゆるものがひしゃげる。圧倒的破壊が繰り返される。

洞窟の床や壁どころか人間までも、暴れる混沌の被害者となった。老女も、神兵達も、女も、子どもも、塊は砕かれた。瓦礫と血と肉と骨の乱舞。塵と化し、霧と化し、あたりに飛散し舞い上がる。

悲劇も悲惨も残酷も冷酷も超えた惨劇、いや殺戮。おぞましき光景を、だが炎の庇護を受け空を漂うなごむは見えていない。

『なごむ。……大丈夫』

なごむを包む炎がひととき強く輝き始めた。白にすべてが覆われる。

炎は高まりマグマのように天へと噴き上がると、ふっと消えてしまった。

粉々になった洞窟には瓦礫だけが残され、なごむの姿もまた、ど

こにもなかつた。

第四話「スニフォンの町」

月の浮かぶ夜空は、賢者のように厳かだ。しかし浮かび流される雲は忙しなく、風は怯えるように吹き荒れている。

少女は崖の上に立ち、ざわめく夜を感じていた。

艶やかな火焰色の長髪が舞う。纏う服は純白。簡素な作りで彼女の肩から膝上までを隠しているが、月光を弾く衣の質は高く、金糸で所々に施された薔薇の刺繍は気品を感じさせる。

可憐な服装であったが、不釣り合いなことに胸から腰までは黒色の皮で覆われていた。一見、コルセットのように思えるそれは、皮鎧であった。

更に、腰や手首などの急所を覆う帯状の装飾品は、漆黒の石を組み立てて作られていた。強固だが軽い素材で出来ており、彼女を彩りながらも守る、見事な装備だった。纏う全てが、高貴且つ合理的な品である。

ただならぬ身分と一目で分かる出で立ちの、麗しい少女。しかしその瞳は、戦士のそれであった。

「……感じる」

睫毛が深紅の蝶のように瞬く。

「間違いなくこれは、叔父様のエン・リーテ。そして従順なる誇り高きアルケア」

少女は鍾乳洞のように白く小鹿のように細い腕を虚空へ伸ばした。「邂逅の時は近いようだ……。ジャルグボールグ！」

飛び出すは巨大な影。少女の背後より猛然と浮上した姿を月光が写し出す。

それは翼をもった双頭の竜だった。少女は赤竜が空へと身を躍らせるのを認めると、大地を蹴り崖から飛び降りた。赤竜が滑空し、背中に少女の小さな体を受ける。

「国境を越よう！」

少女の命に赤竜は地が割れるような雄叫びで応じると、翼と四肢を折り畳んだ。巨大な玉となり岸壁を滑空する。
そして真夏の太陽のように、燃え上がった――。



深海に沈んだように重い。意識がうつろいで上手く纏まらない。途切れ途切れに、映像だけが浮かんでは消えていく。誰もいない教室、闇に浸かった土手、薄暗い洞窟、そして。
老婆。

「うわあッ！」

弾けるように目覚めた。鈍く重苦しい痛み贯穿、再び倒れこむ。背中を打ち付けるかと思いきや存外な柔らかさが背中を押して、なごむは息をのんだ。

白い天井、光差す窓、全身を包む布。恐る恐る辺りに目を配り、なごむは見知らぬ寝室のベッドに横たわっていることを知った。

あの悲劇は夢だったのだろうか。ここは何処なのだろう。

自身に掛けてある布をはいで、なごむは目を剥いた。痣だらけの白く華奢な体は、あろうことか裸だった。

「起きましたか」

ぎょっとして布を掻き抱く。首を向けると、これまた見知らぬ男性が立っていた。目鼻立ちが濃く、青い眼をしている。歳は三十かそこらか。深い紫色のローブを着込んでいた。

「驚かずとも。私の名前はロンカ。スニフォンロンカです。神に仕える者です。ここはスニフォンの町の、教会なのですよ」

「神に、仕える……」

「覚えていませんか。あなたは森で倒れていたのです」

そんなはずはなかった。なごむは確かに洞窟にいたのである、そして。

思い出して、吐き気を覚えて両手で口を塞いだ。吐くものもない空っぽの胃が痛む。

「落ち着いて。よほど恐ろしい目にあったのですね。安心なさい。ここは安全です」

ロンカは穏やかな口調で言う、なごむの傍に座り背中を撫でた。その掌の暖かさと、安全という言葉に自然と涙が溢れた。安堵が胸に広がって、心が軽くなる。

「差し支えなければ、名前を聞かせて下さいませんか。どこから来たのかも」

優しく尋ねられ、

「二子玉なごむ。来たのは……」

日本と答えそうになって、それでは通じないだろうと思い至る。あの老婆は、何と言っていたか。

なるべく惨劇を思い出さないようにして思考し、

「確か……黒狼山脈の……ジグ？」

なごむの言葉にロンカが呻く。

「なんと……」

はっとして、なごむは後悔に血を凍らせた。警戒を解きすぎたろうか。

「ジグから、命からがら逃げてきたのですね！」

ロンカの瞳は憐れみに染まっていた。彼は顔を紅潮させると、なごむを掻き抱き涙声を張った。

「ナゴムよ。ジグの村の者を許してほしい。彼らは貧しさのあまり邪教に手を染めたのだ。同じ国の者として、心から謝ろう！」

はらはらと涙するロンカに抱き締められながら、なごむは考えた。分からないことだらけだ。

「あの……ロンカさん」

「何だね？」

「ティマトのカケラって何なの？」

ロンカは涙を拭うと、深く頷いた。

「なるほど。ジグの者はティマトのカケラを作り、この国に反旗を翻すつもりだったのか」

ふむふむと納得したように首を上下に振ると、ロンカはついとなごむの顎を指で引き上げた。

「ニコタマと言ったね、ナゴム。この顔形は……北国にも近いし、こちらにも見えるが……君のご両親は旅商人か何かかね。ニコタマという土地はどこにあるんだい？ 君の着ていた服も、あれは民族衣装かな？」

ロンカの思案ぎみな様子に、なごむは情報を整理する。老女のことやロンカのことを思い出すに、なごむの顔立ちは珍しいのだろう。そして名前とロンカの口ぶりから推測するに、この世界の人々は土地を名前に含めている。話は合わせた方が無難かもしれない。

「はい、旅の者で。ジグの村で色々あって。父はニコタマという、ずっとずっと北にある村の出身で。母はこっちの生まれなんです」

「なるほど。やはり混血なのだね。どおりで」

得心がいったのか、ロンカはにこりと微笑むと腰をあげた。

「今は休めるときです。服を持ってきましょう。あなたの服はボロボロでしたので洗っています。食事もご用意しますからね」

ロンカはきびきびと部屋を出ると、ほんの少しの間を置いて戻ってきた。

「私が小さい頃に着ていたものです。それと、この黄色い塊もあなたのものですね」

麻のような固い質感の、灰色のシャツとパンツ。木と布で出来たブーツのような靴。ポケットに入っていた携帯電話は、触れると何ともいえない安心が滲んで、わずかに心が癒される。

しかしその一方で、心に引っかかるものがまだいくつも残ってい

た。

「着替えたら出てきてください。食事がありますから」

「あの」

なごむは足りないものに気付いて、外に出ようとドアノブに手をかけたロンカを呼びとめた。

「指輪……ポケットに入っていないませんでしたか？」

家を出る前に、つつい手に握りしめ持ち出してしまった指輪がない。

ロンカが、はたと首を傾げて視線を宙へ泳がせる。しばらくそうしていたが確信を得たように、頷き、首を振った。

「いいえ。あなたがもっていたのはそれだけでしたよ。指輪をお持ちだったのですか」

あれは死んだ父親が理沙に送った唯一無二の結婚指輪だ。最悪の答えになごむは青ざめる。無くすわけにはいかないものを無くしてしまった。

「大丈夫ですか」

血の気を失い震えるなごむに、ロンカが心配そうに眉を下げる。
なごむは唇を噛んでから、

「……あ、はい。あの、もしかしたら落としたのかもしれないです」
思えば異世界に来てからリングの所在を確かめていなかった。心臓が次第にテンポを早めていく。

「逃げてくる途中で落としたとすると、探すのは難しいでしょうね」
洞窟での騒動、そしていつの間にかやら森で倒れていたというロンカの発言から考える。あっちの世界なのかこっちの世界なのか、落とした場所の見当が全くつかない。絶望的だった。

「大切なものですか？」

冷や汗をかいて狼狽しきるなごむの手に、そっと手を重ねるロンカ。その熱には押し付けがましくない素朴な温かさがある。

少しだけ気持ちが落ち着き、目を閉じる。

リングはなごむのものではない。父からの愛の誓い、母であり妻でもある理沙のもの。かつて理沙は、肌身離さず大切にしていた。

だが今はどうだろうか。理沙は最近、指輪をしていなかった。それがいつしか当たり前となっており、たまに指輪をしていない理沙を目にしても、なごむは疑問に感じたりはしなかった。

心臓が重くなる。

三人で鍋を囲んだ夜、化粧台の上で置き去りに指輪。思い出のものには違いない。しかし大切かどうかと問われると。

「……分らないです」

正直に答えた。きょんとするロンカに、

「えと、探していたただかなくて大丈夫です。……着替えます」

「そうですか、では」

ロンカが立ち去ったのを目で追ってから、なごむはベッドから出た。

指輪のことはあとで考えよう。

頭を切り替え、次に携帯電話を開くとやはり圏外だった。時刻は不思議なことに夜八時で止まっている。ちょうど、なごむが家を飛び出した時刻だ。カメラ機能を起こして、一度だけシャッターを切る。映像がしっかりと残っている。つまり通話や時計の機能は望めないが、カメラなどは使えるということだ。なごむは携帯電話の電源を切った。

用意された服を着る。少しチクチクした。靴は少し歩くと靴づれが起こりそうだが、贅沢はいわない。ロンカの好意が嬉しくて、なごむの心は少しだけ軽くなった。

亡くしてしまった指輪のことや、自分がこれからどうなるかということについて、不安がないわけではない。しかし理沙や克明、そして老婆達を思えば、異世界の教会という場所にいることは幸福に感じられた。なごむを悩ませるものは、ここにはない。

……そういえば。

服についたポケットへ携帯電話を滑り込ませながら、なごむは声のことをふと思いついて出した。土手から異世界に来る前と、洞窟で訳も分からず襲われた時、誰かの声を聞いた。心をそっと包んで安寧を生む、男声。しかしその姿はなかった。まるで、視えないものに守られているようだ。

「守護霊みたいなの……」

少考してから、

「あの、誰か、いるんですか？」

もう一度、

「いるんですよ。僕を守ってくれたんですよ」

空しい閃きとなってしまった。受け取る者のない問いが何もない空間に消える。聞こえるのは窓の外で戯れる鳥の歌だけ。

ばつが悪くなって、なごむは衣を整えると、ロンカの元へと向かった。

廊下を渡り案内された部屋に入ると、食卓に料理が並んでいた。

「やあ、早く食べないと冷めてしまうよ」

パンをつぶしたような塊が乗ったバスケット、鮮やかな色合いの野菜を混ぜたサラダ、切って白いシチューのようなスープ。とても簡素だが、ほかほかとたつ湯気には食欲をそそる匂いが含まれ、胃をきゅっと刺激する。存外に空腹だったらしく、痛いほど唾液が出た。

「おかわりして良いからね」

にこりとするロンカに会釈しつつ席につく。木でできたフォークが置かれている。食器はなごむの世界と変わらないようだが、肝心の食事はどうだろう。異世界の食べ物とは当然ながら初めてだった。食感、味は、体には悪くないだろうかという不安が頭を過る。

小さな頃、黄泉の食べ物を食べてしまったために生き返ることが出来なかった人間の話を絵本で読んだことがある。異世界の食べ物を口にする事で予想だになかったことが起こるかもしれない、だが。

胃が拡大と収縮を繰り返す。空腹感は強く、吐き気も段々と出てきた。

「どうしたんだい？」

訝しげなロンカ。このままでは怪しまれる。

腹をくくって、なごむはフォークを手にすると、まずサラダに刺した。串刺しになった野菜を、恐る恐る口に運ぶ。

青菜に、これはカブだろうか。赤もあれば青も黄もある。しゃくりと、瑞々しい感触が歯に嬉しい。味付けは少し酸味がある。

食欲のスイッチが入って、なごむはあっという間にサラダを食べ、パンのような塊を噛んだ。ぱんというより、甘くないクッキーのようだ。美味しいというに味がそっけるぎる感のある食べ物である。が、今のなごむにとって空腹が最高の調味料。次々と口に運ぶ。

「これは何ですか？」

「何って、手作りのスクだよ。スクルの実を砕いて、窯で焼いただけ」

冗談のような質問だったのだろう、ロンカが目じりを下げた。その表情に、スクとはパンと同じように親しまれた食べ物なのだと知る。

スープを手にとって、軽くフォークでかき混ぜた。甘い匂い。乳が入っているのだろうか。白い豆がころころと踊る。

「これは？」

「毛長牛の乳と、百夜虫の幼虫だよ」

ようちゅう、という言葉に手が止まった。ということは、豆ではなく虫なのか。

「百夜虫ってあの、虫の？」

「うん、虫の」

急に石像のようになってしまったなごむにロンカは、

「珍しいね。百夜虫は苦手かい？ 百夜虫が嫌いな子は初めてだよ」

カルチャーショックとはこのことだった。一匹をフォークでさらい凝視すると、確かにそれは虫だった。白くぷにぷにとした体、八本の小さな足、黒い頭。カブトムシの幼虫に似ている。

「その、……に、ニコタマでは虫を食べないんです」

「まさか、虫を食べないって？ 何を食べてるんだい？」

「どうやらこの国では、虫を食べるのは一般的なようだ。」

「野菜とか、魚とか、家畜の肉とか……」

ロンカもまた、目を丸めた。

「天候が悪いときはどうするんだい。家畜だって、祭りじゃあるまいし。不作の時は？」

「不作？ えっと。少しだけ、高くなりますよね。お値段が」

なごむの発言に、ロンカは度肝を抜かれたようだった。眉間を寄せてしばらく思案顔になった後、なるほど、と小さく呟く。

「分かった、君のご両親は大商人なんだね」

そして残念そうに、スープ皿を端に寄せる。その動作に、
「待って！」

なごむはスープ皿に両手を添えた。

見ず知らずのなごむを拾い、優しくしてくれている恩人の手料理。無碍にしたいくないと、自然と体が動いてしまった。

「食べてみるかい？」

「……………」

沈黙しながら、じっとスープを凝視する。沢山の幼虫たちが、はいコンニチワと見つめ返す。食べたくはないが、好意を考えると食

べないなど言えない。ロンカには悪気がないのだ。

郷に入っては郷に従え、従うんだと念じる。ゆっくりと、ゆっくりとスープを口に近付けて……。

「君は良い子だね！」

可笑しくて仕方ないという風に噴き出すロンカ。目じりに涙を浮かべ笑いつつ、ひよいとスープ皿を持ちあげた。

「大商人のご子息に、普段食べないようなものを食べないものを食べさせるわけにもいかないよ。でも、これで君の身元が分かりそうだ」

そう言うのと、堪らなくなったのか、今度は腹を抱えるのだった。

なごむの身元捜しに妙案が浮かんだらしく、ロンカは教会になごむを残して何処かへ行ってしまった。留守を頼まれたなごむは一人、絵本でも見て暇をつぶすといい、そう案内された書庫にいた。

さほど広くない書庫の中には、まるで迷路のように本棚が置かれている。全部で千冊ほどだろうか、分厚い本が並べられ、あるいは重なっている。古いものから新しそうなものまで様々だ。小さな窓から注ぐ光が埃を浮かばせる。あまり使われていないのだろう。

「何を読んだらいいかな」

読めと言われても、食事さえも異なる世界。文字は当然、分らないだろう。絵を見れば、この世界の何かが分かるかもしれない。書庫をぐるりと見回って、なごむはいくつかの絵本を手にとった。暗闇に光が漂う絵の彫りこまれた版画が表紙になった一冊を、開く。

「えーと……」

一ページ目の見開きは真っ暗で、右端に二行の文章。案の定、見たことのない記号のようで、

「わかんない……い？」

見たことのない記号の文章が、ふいにふわりと浮かびあがった。

まるで立体映像だ。浮かび上がった記号はぼんやりと靄がかかったように蠢く、と。

『最初にくらやみ色の、ひとつのワイミールだけがあつた……』

ふっと、頭に言葉が浮かんだ。頭の中のなごむが自然と喋り出す。まるで、文章を読むかのように。

「読める……？」

なごむは愕然とした。見たことのない記号の羅列であることは確かだった。しかし、驚いたことに読める。リングを見てリングだと考えずとも分かるように、文章の意味がすらすらと頭に入ってくるではないか。

気味が悪い。

だが、それ以上に興味深かった。

読み進めると、それが世界の創世記だと分かった。なごむは真剣な眼差しで絵本のページを捲る。

『――ワイミールは耳障りな声でわめき、叫んでいた。

赤ん坊の体に老人の顔。とてもとてもみにくく、汚らしいその姿、その声。

ワイミールという混沌は、やがて小さな粒をふたつ吐き出した。

きらきらと光り輝くそれらは、アレプとタウの美しき双子だった。

次にワイミールは、自分の指を噛み切って、更に泣いた。指はティマトとなって、ワイミールを愛した。』

「ティマト……ティマトって、ティマトのカケラのこと？」

きらきらと輝く双子の傍らで窮屈に身を丸める黒い泥人形のような物体、ティマト。なごむは更に、読み進めた。

『双子は生まれながら静寂を好み、ワイミールを憎んだ。双子はワイミールを殺した。

ワイミールはやつぎきになった。

切り刻まれた肉は大地になり、血は海になり、骨は樹と動物を作った。

そして魂は、無数の意思となってエン・リーテと呼ばれた。

エン・リーテはありとあらゆるものの魂となった。

嘆き悲しんだティマトは悪意となって、双子に毒を盛ったが、清い双子の舌の上で毒は水となった。

ティマトは双子に殺され、同じように刻まれてカケラになり、大地に埋められた。

双子はエン・リーテを操る動物をアルクトテロスと名付け、ティマトのカケラを封じるように命じると、天に昇り太陽になった。

世界はこうして創られた』

最後のページ。ふたつの太陽が天に昇り終わったのを見やってから、なごむは静かに目を閉じた。

静かに体を打つ驚き、不思議な感動が雨のように注ぐ。

文字が読めるという事実は、まるで自分がこの異世界において他人ではないという証明のように感じられた。異世界の中心人物となるべく、そう、選ばれたような。

小さな感激は優越と変わってなごむの不安を拭い、満たした。誇らしい感覚に背筋が伸び、頭がクリアになる。腹の底から快哉を叫びたくなる。

来て、良かったんだ。僕は守られている。そして、変わるんだ。なごむはぎゅうっと、絵本をかき抱いた。

どれくらい書庫で没頭していたのだろう。文字が読みづらいついて顔を上げると、周囲が薄暗くなっていた。窓から外を伺うと、庭が橙色に沈んでいる。太陽が傾き、夜へと変わろうとしているのだろう。

ロンカはまだ戻らないのだろうか。心寂しさがゆっくりと増え始めたとき、

「いま戻りましたよー」

間延びした声に、なごむは書庫を出た。足を玄関先に向けると、ロンカの他に一人の中年男が佇んでいた。

紫色の長外套に同色のローブには、金色の紋様が縫い付けてある。教科書のあるページが頭に浮かぶ。中世の時代、免罪符を掲げて男が叫んでいるイラスト。

なるほど、ルターに似ているんだ。そう思いながら凝視していると、中年男が咳き込んだ。

「役人を見るのは初めてかね」

「すみません」

なごむの視線で気を悪くさせてしまったようだった。素早く頭を下げると、

「まあまあ……」

ロンカが片手をあげながらなごむの脇に立つ。

「彼がニコタマナゴム君です。ジグから逃げてきたという」

腕を組み、薄目になる役人。今まで生きていて取られたことのない蔑みを帯びた冷たい視線だ。

なごむは寒気を覚えつつも平静を装い、微笑んだ。

「よろしい。ご両親が搜索願いを出していないか確認を取ろう。外に出なさい」

嫌な汗が背中を伝った。ロンカが出掛けたのは、そういう理由だったのか。生まれがそれなりにしっかりしているのなら早い段階で役所が動いているだろうと、ロンカは考えたのだ。

——どうしよう。

激しい動悸がした。心臓が勢いで破裂しそうだ。すぐにでも逃げ出したい衝動を飲み込んで、ロンカに背中を押されつつ、なごむは

歩を進める。

出やると、役人の肩越しに鎧を着た戦士を認めた。どっしりとした体は、なごむの何倍だろうか。まるで熊のようだ。背後に男達を控えさせ、冷たい視線を落とす。

なごむの体を激震が貫いた。その皮鎧に覚えがあったためである。

——神兵^{しんべい}。

「なごむ？」

膝が震え、ぐらりと揺れる。ロンカに支えられ、そのまま身を預ける。体が縮み上がり、足を動かすことができなかった。

「……邪教徒か？」

なごむの反応に覚えがあったのか、神兵は躊躇いなく剣を抜くと、その切っ先を向けてきた。

驚いて反射的に後じさると、両肩を掴まれた。はっとして仰ぐと、ロンカが口を真一文字にしてなごむを見下ろしていた。

ロンカならば助けてくれるに違いない。なごむがすぐるように瞳を潤ませると、彼はまるで何事もないというかのようにふっくらと微笑んだ。

「……あ」

胸に温かさ広がり、期待が目頭を熱くさせた瞬間。

なごむは背中を押された。唐突すぎて手で衝撃を受けるも出来ず、膝を打ち付け前のめりに倒れ込む。

「え……？」

平伏しながら、なごむは首だけをもたげてロンカを見上げた。彼はべっとりとした無表情を投げ掛けたかと思うと、

「この邪教徒め！」

唐突に激昂し、侮蔑を露にした。

頭を殴られたかのような戦慄。それまでの優しい彼からは想像す

ら出来ない態度に、なごむの心臓が凍りつく。

「ロンカ、さん……？」

額を青ざめさせながらロンカの足元へと手を伸ばすと、彼はさつと身を引いてますます嫌悪を示した。

信じられない、これは現実なのか。

絶望のあまり身を震わせるなごむから視線を外すと、ロンカは飴細工のように眉ねと口とを曲げた。そしてその場に膝まづきいたかと思うと、

「どうかお許しを！ 私は騙されていたのです。こいつは嘘をつき、私に取り入り、逃れようとしていたのです。なんとおぞましいことかっ！ ああ高貴なる魂を持つ神兵さま。まんまと卑劣な騙りに転がされた愚かなこの私に、どうかご加護を！」

被害者を装い泣き崩れた。

ロンカ、その手のひらを返すような裏切り。

受け入れがたい現実を脳は拒む。思考能力が低下していく中で、身体だけが希望の無い未来を予見する。痛いほど縮みあがる鼻腔。激しく肋骨を打ち付ける肺。がらんどうになった骨盤。痺れて乱れた指先。

なごむは呆然としてただただ目が潤せた。慈悲を乞うロンカが涙で歪む。一筋の涙が頬を濡らして落ちる。

「なんだ。今さら罪を悔いているのか」

にじりよる神兵の気配。顎下を感じる冷たさ。

気付くと刃を向けられていた。切っ先に顎を持ち上げられ、自然と汗が吹き出す。

「……隊長」

後ろの隊列から一人、前に出て剣を向ける神兵に耳打ちをする。

神兵はぴくんと眉根を寄せると、

「先の戦いで前線に立っていた者がこう言っている。……ティマト

のカケラ、お前を見たとな！」

神兵の件から暗赤色な物質が放たれ、なごむの首に絡んだ。

蛸の足にも汚泥にも見える触手。なめくじが這うようなおぞましい感覚が舐めたかと思うと、触れた皮膚から痺れて頭が朦朧とし始めた。

五感の全てを不気味な何かに掌握され、なごむは呻いた。

「力が出まい。お前を聖都まで引きずってやる。お前は大神官様に懺悔するのだ、生まれたことをな！」

神兵、兵の群れ、役人、ロンカ。みなの高笑い。

耳を塞げたらどれほど楽か。身動きを取れないなごむの鼓膜を引き裂かんばかりの哄笑、ぐるぐるとなごむを掻き回す絶望。それらが境地に達し、なごむの中の何かが今正に壊れんとした、その時。神兵が忽然と消え、途端になごむを捕らえていた不気味なものがどろりと蕩けた。

「助けてくれッ！」

頭上からの悲鳴。見上げると、空に神兵が浮かび上がっていた。四肢をばたつかせ、必死に足掻いている。纏う鎧が齒軋りをする。まるで吹き荒れる嵐のただ中にいるように。

なごむは思った。ああ、あの声の主だ、と。今起きていることと起こしている者。なごむには分かる。やはりいたのだ、そして守ってくれていた。正体不明の守護者が。

「助け……」

神兵が喘ぎながら首根を抑えた。次第に苦悶の表情へと変わっていく。

驚いてなごむは口を開いた。このままでは死んでしまうに違いない、だが。

あの人が死んだら、助かるかもしれない？

頭をかすった迷いが、出かった制止の言葉を喉で堰き止める。
言うべきか言わざるべきか、思いあぐねるうちに、神兵の鎧から覗く皮膚の部分がみるみるうちに赤く染まっていき、唇から蟹のように泡が溢れ始めた。瞼を剥き、白目になり、右往左往する四肢が弱まっていき――、

『ロト伯父様！』

打ちすえるような高音の叱咤。どこからか突然に烈風が疾駆し、なごむの足を絡めとった。

「わっ！」

なごむの体が強風に攫われる。バランスを崩す。砂が目に入り、瞼を瞋る。視界は閉ざされたが、自分が空中へと投げ出されたのをなごむは感じた。ひゅつと内臓が重力に逆らって浮かんで冷える。体を丸めて、なごむは衝撃に備えた。

が、なごむが地面に叩きつけられることはなかった。思いのほか優しい感覚で腰が持ち上げられたかと思うと、すんと軽やかに足がついた。

「……へ？」

目に入った砂が涙で零れ落ちて、なごむはゆっくりと瞼を開いた。そこに神兵はいなかった。そればかりか、役人もロンカもない。街の中でもない。景色が全く違う。

崩れた玉子のような夕日が二つ、茜の空に浮かんでいる。山に落ちかかり、山稜が黄金色の境界線を描いていた。そして夕焼け色に染めされた広い草原を背後に、目の前に佇む人物が二人。

少女と、一人の男だった。

第五話「出会い」

少女と、長身の男。

赤い髪を靡かせ、大きな漆黒の瞳になごむを映す、齡十二かそこらの少女。そして後方に控える長身の男は、深紅の服を着ていた。歴史の教科書の最後辺りに出てきそうな軍服だ、となごむは思う。赤という共通のカラーを持つ二人であったが、受ける印象は二分していた。少女は美しい容姿をながらも生まれてこのかた笑ったことがないような仏頂面で、男はというと肩までの柔らかそうな金髪を豪快に掻きながらニヤニヤとしている。軍服を着るべきは逆だろうと思わせる組み合わせだ。

少女がワンピースのような純白の服をはためかせながら、

「全く。聖アの神兵を殺すおつもりですか。どこぞで身が知れて国際問題にでもなったらどうするおつもりですか？」

呆れたような口振りに、なごむは首を傾げた。

「……どなたですか？」

「どなた？」

ぴくんと、少女が眉根を寄せる。

「そりゃそーだ」

男が噴きだすのを冷たい視線で遮ると、

「お初にお目にかかります。私の名はラシャ・ギブリット・ユグリート。ゼフィ・ギブリット・ユグリーの次女にあたります。ロト伯父様、以後お見知りおきを」

凛々しく自信たっぷりで紹介されるも、名前に覚えはなかった。

父の秀は親戚がいない。二子玉家の長女である理沙の兄弟は、みな日本人と結婚していていて、子どもはなごむより小さい。なごむの姪など、ありえない。そもそも、なごむはロトという名前ではな

い。

少女ラシャの言うところが全く理解できず、なごむはポカンと口を開けた。

「……………はあ」

なごむの態度に、ラシャの眉根がますます狭まり、男の膨らんだ頬が勢いよく萎む。

「さすがだよ、ロト！　しばらく見ない間に笑いのセンスを磨いたね！」

男が爆笑する、その沸点も分からず、

「……………はあ」

「え。何それ。何その反応」

なごむのさっぱりな表情に、

「ジャलगボールグですけどっ。俺の顔忘れたわけ？」

どんと胸板に拳を入れつつ尋ねる男。まじまじと凝視するも、やはり覚えはなかった。

首を傾げてみると、

「伯父さま、噂通りですね。分かりました。せめて変身を解いて頂けますと助かるのですが」

ラシャが顔を顰めながら請う。しかしその願いすら、意味が分かっていなかった。

「どうされましたか」

ごくりと生唾を飲む。緊張のため極端にか細くなった声帯で、
「恐れ入りますが、その、変身って、何のことでしょうか？　それに、人違いだと思います。僕の名前は二子玉なごむです。ロトという人では、ないと思います……」

最後には肺に空気がなく、語尾が薄くなってしまった。一息ついてから、ごめんなさいと頭を下げるなごむに、ラシャは血を抜かれたように蒼白となった。

「……何を言って」

拳を握り、唇を噛んで押し黙る。灼熱の憤怒を露わにして震えるシャ。

予期せぬ怒りになごむ怯えた。初対面の人間にこれほどまでの敵意をむき出しにされるのは、波風立たせぬように目立たず生活してきたなごむにとって初めてのことだった。

蛇と蛙のような二人に、ジャलगボールグは思案し薄目になる。それから思いついたように、ラシャを引っ張り後ろに退けさせた。なごむの眼前に立ち、

「カラドホルグ！」

ジャलगボールグは地に響きわたるような大声で叫ぶと、

「出てきなよ。感動の再会にしようじゃない。じゃなきゃ……」

腰に下げていた細身の剣、サーベルであろうか。その切っ先を天に掲げると、一気に振り下ろした。

なごむの華奢な首に刃が深々と刺さらんとした寸前、弾けた。サーベルが円弧を描いて宙を切り、地面に突き刺さる。

「うおう、やっぱり君には敵わないなあ」

軽口を叩くジャलगボールグの傍らに、

「……なごむに手を出すな」

見知らぬ大男が佇んでいた。

その場にいる誰よりも背が高く、がっしりとした体つきをしている。そればかりか、これほどに大柄な男をなごむは見たことがない。なごむの二倍はあるだろうか、まるで動物園にいる白熊のよう。灰色の髪は鳥の巣のようにボサボサで、肩まで伸び、男の表情を裕に隠す。ちらりと伺える瞳は漆を思わせるほど黒く澄んでいる。

浅黒い肌を覆う服はまっさらな白いTシャツだった。見ると、“

EAT ME”というユニークなゴシック体の黒い文字がプリントされた簡素なデザイン。なごむの世界のものだ。

そして、雨に濡れた庭のような匂い。苔むした巖にうつすら浮かぶ朝もやの匂い。生き物が放つことのできない匂いを持っている。

実に奇妙な大男である。彼は丸太のような腕を水平にし、大きな手のひらでジャルグボールグの頭を包んでいた。いつでも砕けるぞ、そう脅すかのように。

粗暴な印象を与える巨軀、それなのに、なごむの心は穏やかだった。懐かしいような切ないような、日だまりに似た感覚が胸を締め付ける。姿に覚えはない。だが、声を知っていた。なごむを落ち着かせる穏やかな声。庇護の決意が滲む言葉。

——カラドホルグ。この人が。

緊張しきって凍りついたはずの体が、ゆるゆると融点に達し、更に熱を帯びる。感情がわっと噴きだし皮膚にぶつかって渦となる。鼻腔が、唇が、胸が、痛いほど温かいものに痺れる。

——この人が。

なごむの頬を、ついと涙が伝った。

静まり返った場で、

「なごむ？ ロト伯父さまではない？」

最初に言葉をついたのは、ラシャだった。

なごむは片手で誤魔化すように涙を拭ってから顔をあげる。

狼狽するラシャが瞳に映った。酷く衝撃を受けたらしい彼女に、

「大丈夫？」

「黙れ！」

なごむの呼びかけを乱暴に跳ねのけて、サシャはそのまま俯き押し黙った。

不安げにラシャを心配するなごむの服の袖を、優しくカラドホル

グが摘まんだ。膝を折って大地に付けても尚、カラドホルグの目線はなごむよりも上にあった。

「ごめんなさい、なごむ。君を巻き込むつもりはなかった」

「あのっ、そのっ」

声の主、カラドホルグ。なごむを異世界に導き、そして見守る存在。

「貴方は……、その……。ごめんなさい、僕、全然分からなくて、その……」

なごむもまた、口を噤んだ。訳の分からないことばかりだ。とても知りたいことばかり。しかし、言葉にしようとする喉に詰まってしまう。大量の疑問が出てくる歪な形となって氣道をふさごうとする。息苦しくなる。

「うん。もう、隠すことは出来ないよね。今から話すこと、今まであまり聞いたことのない話だと思う。なごむの世界でいうならば、おとぎ話やゲームのような、現実に存在しない話。あり得ない話。その話を、今からしよう。その前に、言ってほしいことがある」

「え？」

藁のような髪に僅かに隠された瞳が、線になる。柔和に微笑んでいるのだ。なごむを恐がらせまいという配慮が伝わってくる。彼の髪が吐息で揺れて、薄い唇が露わになる。

「カラドホルグ、と、言って」
静かに反芻する。

「カラドホルグ……」

なごむが言葉にした瞬間、カラドホルグが小さく微笑んだ。ぎゅっと拳を握りしめたかと思うと、ドンと自身の胸を叩く。そうして

から、

「……じゃあ、何から話そうか」

彼は穏やかに語り始めた。

「僕の名前はカラドホルグ。なごむも読んだろう、この世界にはエン・リーテというものがある。それはありとあらゆる、森羅万象の中に混在して、いろんなものを生かしているんだ。そしてその塊をアルケアという。アルケアは周囲のエン・リーテに影響を与えることが出来る。僕はね、アルケアなんだ」

「ある、けあ……」

「なごむがこの世界の言葉を理解し、この世界の文字を読めたのも、アルケアが傍にいるからなんだ。……僕は君のアルケア。アルケアは重なるように、繋がっているから……なごむの世界でいうところの、守護霊みたいだね」

「アルケア……僕の？」

「そう」

そこで一呼吸置いてから、

「エン・リーテを生まれながら或いは勉強をして操れるようになった人をアルクトテロスという。君のお父さんのもうひとつの名前はロト。この世界でアルクトテロスだった」

「え？」

思わず耳を疑う。想像だにしていなかった告白に、咄然とする。ラシャもジャルグボールグも同じく、表情を驚愕の色に染めていた。

「つまり、この子は……」

口を開こうとしたジャルグボールグを、カラドホルグは片手で制止した。話はまだ終わってない、そう怒りを露わにするように。

「なごむ……、君のお父さんは地球の人間じゃない。異世界の、こ

の世界の住人なんだよ」

頭を殴られたようだった。しかしその一方で、納得がいくことでもあった。天才的なマジックの才能を持っていた露頭と、どこか夢見がちなことを言う父親とが、なごむの中で初めて結びついた。

そしてその事実が本当ならば、なごむは、

「お母さんは？」

カラドホルグは首を左右に振った。

「このことを知らない。君のお父さんと結婚する時に、この世界のすべてを捨てることを決めたんだ」

なごむには異世界の住人の血が半分ながれているのだ。そのことを知り、なごむは驚きながらも、どこか他人事のように聞いていた。なごむはこれまで、自分と他人とがそこまで違うと感じたことはなかった。

いつも穏和で、自分の意志を伝えることが苦手。勉強やスポーツはそれなりに出来るが、誰かより秀でたことはない。

友達といえる交友関係も少ない。それなりに親しかった友人もクラスや学年が変わるごとに交流が絶えてしまうことが殆どで、今のクラスに到ってはいじめはないが孤立している状態に近い。だがそれは、違いには入らないだろう。なごむのような人間はクラスに一人や二人はいるものだ。

特別なことなど、一度も――。

そう思い、はたと到った。

「もしかして、マジックって……？」

なごむの呟きに、今度は頷くカラドホルグ。

「お父さんのマジックは、エン・リーテの力のお陰だよ。彼はマジシャンじゃなくて、アルクトテロスなんだ」

なんということだろう。誰にも思いつかないだろう斬新な露頭の

マジックの数々はすべて、種も仕掛けもない、ということになごむは再び衝撃を受けた。なるほど、そうであれば父親との思い出にマジックが一切ないのは当たり前のことだった。彼はマジシャンではなかったのだ。

憧れが思いもよらない形で否定され、頭が白くなる。体の力が抜けかかり、ふらりとしたところで、カラドホルグに手を握られた。無骨だが温かい手。その熱が伝わってきて、なごむはぐっと膝に力を込めた。

なごむとカラドホルグの対話。そこに、俯いて話を聞いていたラシャが、声を震わせて割り込んだ。

「ロト伯父様ではない？ アルケアとアルクトテロスは一心同体。どちらかが死ぬまで離れることはない……。ロト伯父様は、亡くなられたのか？」

カラドホルグが腰を伸ばし、ラシャを睥睨しながら頷く。ラシャは衝撃を受けて大きくカッと目を見開いた後、

「何故だ！ アルケアがいて、何故？ 殺されたのか？」

「事故だ。事故で死んだ。どうしようもなかったんだ」

カラドホルグはサラリと告げると、

「もう良いかな。つまりもう……関係がないのだから」

なごむの服をまた摘まみ、ゆっくり踵を返すカラドホルグ。

「ちょい待ちーの！」

立ち去ろうとするその行く手を、ジャルグボールグが両手を広げ阻んだ。

「こつちの話を聞いてよ。何で君とロトを探していたのかを。エン・リーテがアルケアのせいで大変なんだよ。あのね、エン・リーテの穴を北方のアルケアの屍が塞いで、発見が遅すぎて……俺たちだけじゃ対処できない。君の力が必要なんだ」

訳を語る瞳は真剣そのものだった。しかしそんなジャルグボールグに、冷たく言い放つ。

「関係がないよ」

「関係がない？ 関係がないだと！」

そっけないカラドホルグの返答に獣のように噛みついたのは、ラシャだった。赤い髪を逆立て、瞳を猛々しく燃やし、絶叫する。

「ロトはユグリート王国の元王位継承者、現ユグリート王の実の兄。関係がないはずがないだろう！ そしてお前はロトのアルケアであつたろう。関係がないなど、どの口で言う！」

王位継承者という言葉に、度肝を抜かれてなごむは足を止めた。ラシャは怒りに任せて続ける。

「そもそもお前は、アルケアとして古からユグリートを護ってきたはずだ。そのユグリートが、滅びようとしているというのに！」

少女の必死の訴え。しかしカラドホルグは歯牙にかけない。無表情で歩を進めようとする。ついに怒りが頂点に達し、少女が腰に下げた剣に手を掛けたところで、

「すみません！」

頑ななカラドホルグを留めたのは、ラシャでもジャルグボールグでもなく、なごむだった。

「……えっと、あの……」

待ったをかけてみたものの、その後が出てこない。そんななごむにカラドホルグは、

「なごむ。君には関係のない話だ。君は考えなくて良い。大丈夫だ」至極優しい口ぶりである。心が僅かに緩んで、今度こそしっかりとなごむは唇で紡いだ。

「でも、お父さんと、関係があるんですよね……」

一拍置いて、

「ラシャさんが伯父さんということは、ロト……お父さんの姪に当たる」

なごむの迷いを好機とばかりに、素早く話に入りこむ。

「そうだ。先ほども話したが、私の名はラシャ・ギブリット・ユグリート。ユグリートの第二王女だ。現ユグリート王であり私の父でもあるゼフィ・ギブリット・ユグリート、その兄弟であるロト・ギブリット・ユグリートの姪だ」

そこまで言って、彼女は唇を噛んだ。ほんの僅かに視線を地に向けて、

「もしカラドホルグの言葉が真実だとすれば、私とお前は従兄弟のようだ」

覚悟をそのまま固めたような黒の虹彩に射抜かれ、なごむは躊躇いがちに零す。

「従兄弟……」

言葉を失いかける。異世界のこと、守護者のこと、神兵のこと、様々な異常事態が立て続けになごむを襲ってきた。そして今度は、父が異世界の王族であり、目の前にいるのは従兄弟だという。困窮するのは当たり前の話であった。

なごむはしどろもどろになりながらも、

「なんか、うまく……頭に入ってこない、です。現実じゃないみたいで、でも」

言いきった。

「親戚だったら、他人事じゃないと思います。だから、お手伝いした方が良いんじゃないかって、そう思うんです」

ぎゅっと瞼を瞑るなごむ。冷や汗をかきながら懸命に告いだ言葉にカラドホルグは、

「分かった」

静かに膝を折った。

「君が望むなら」

澄んだ眼差しで、緊張に体を強張らせるなごむに囁く。それまでの冷徹な態度を嘘のように氷解させ、カラドホルグは頭を垂れた。
「僕はなごむのアルケア。君を護ることが使命。それだけのこと」

結ばれた合意。ピリピリとした緊迫が次第に落ち着き、途切れた。
ラシャは剣に触れた手を下ろし、ジャルグボールグが安堵に弛緩する。

「よし！ 交渉成立ってやつだな、うん」

ジャルグボールグは恐る恐る瞼を開いたなごむにサッと手を伸ばした。

「さあ、仲直り、仲直り。ありがとう、なごむ少年！」

「あ、はい」

流れのままに手を握る。ジャルグボールグの手は不思議とごわごわとしていた。なんだか鮫の皮のようだ。

「そうと決まれば、早速ユグリート城に行こうじゃないか。うん、思い立ったがなんとやらだよ！」

ニコニコ顔でジャルグボールグが自身の懐を探る。襟の内側から乾いた音をたてて紙切れが落ちた。

「おっと。まあいいや。このまま見ちゃおう。はい、注目ー、俺に注目ー」

紙切れは折りたたまれた羊皮紙であった。薄茶色に汚れたそれを手早く開く。意外にも大きく、畳み半畳ほどになった。

それは地図だった。左側に鼻を向けた象のような大陸が横たわる。中央には山脈の絵が描かれていた。意気揚々と山脈より西を指さし、
「こっちが聖アね」

東へとずらして山脈を越える。

「こっちが我らがユグリート王国です。黒狼山脈を越えてちよつと

のところ。俺に乗れば一日もかかないね」

「俺に、乗る？」

不可思議で謎めいた発言に、なごむは面食らう。

「そうよ。俺が変身すつから……ん？」

訝しげに顔を歪ませるなごむに、ジャルグボールグはピンと思いつく。

「ははーん。少年、さては俺を知らないな」

今日のはじめて会います、という言葉を飲み込んで、なごむは屈伸運動を始めた金髪の男を見守る。ジャルグボールグは肩をそびやし鼻息を荒くしながら、

「見ててよ！ 一瞬よ、一瞬！」

大きく体を沈めると、後方転回した。空中でしなやかに膝を丸め、地へ足をつけると思いきや——、驚くことに赤い球体となった。

非現実な光景に唖然とするなごむを尻目に、球体となったジャルグボールグは宙へと浮遊すると燃え上がる。まるで鬼火のように炎上し、膨らみ始める。炎の細胞分裂。瞬く間に大きく、巨大になり、やがて形を球体から獣のようなものに変えていく。日本の長い首に、四本の四肢に、天を遮るふたつの翼。

——次の瞬間現れたのは、巨大な双頭の赤竜であった。

「「じゃじゃーん、びっくりした！？」」

気楽そうなあの声が獰猛そうなふたつの竜の顔から同時に落ちてきて、なごむは後頭部を殆ど首根にくっつけながら唖然と仰視した。驚愕で目が飛び出そうだ。竜を観るなど初めてで、しかもその竜はなごむを縦に四、五人並べてもお足りないほどの巨軀である。

鰐のように鋭い歯が無数に並んだ口から、生温かい吐息が肌にかかる。

「「びっくりさせすぎた？」」

「あ……はい」

「「ごめんよ」」

ぶんと振り下ろされた頭で旋風が巻く。ふらついたなごむの背中を、そっとカラドホルグが支えた。

軟弱な態度のなごむを横目に、赤髪の少女は垂れた竜の首に足を掛けると、手慣れた動作でするすると竜の背中に乗った。

「時間がない」

素気ないラシャに、なごむは勇気を振り絞って、竜の皮膚に触れた。堅く、宝石のような手触りだ。どう昇ろうか迷っていると、ふっと体が浮かんた。慌ててみると、カラドホルグがなごむを持ちあげたようだった。そのままストンと、ラシャの背後に座る。

「ありがとうございます」

尻をしっかりと背中に乗せ、なごむがカラドホルグに礼を言おうとすると、

「あれ？」

カラドホルグの姿はどこにもなかった。

『指にいる』

声が頭に直接響いてきて、なごむは指を眼前に翳した。左手の中指に、金色の指輪が一際まばゆい。カラドホルグは指輪に姿を変えたのだとなごむは理解した。それと共に、その指輪に覚えがあつて、なごむは息をつめた。

それは落としたと思われた理沙の指輪であつた。

かつて父が理沙に結婚指輪として贈り、理沙の部屋に置かれていた指輪。なごむが思わず握りしめ、持ってきてしまった指輪。

カラドホルグだったんだ。

思えば、露頭のマジックで輝いていたあの指輪に似ている。いや、ふたつはひとつだったのだと結びつく。

———お父さんのマジックは、エン・リーテの力のお陰だよ。

彼はマジシャンじゃなくて、アルクトテロスなんだ。

なごむは想像すらしていなかった事実には驚嘆し、しかし納得してもいた。

——結婚する時に、この世界のすべてを捨てることを決めたんだ。

異世界の不思議な力をマジックをしていた露頭。彼は理沙の世界で生きると決め、カラドホルグという大切な存在を普通の指輪に変えることを選び、なごむの父親になったのだ。

それほどのものが、部屋の化粧台の上に寂しく影を作っていた。

『なごむ』

いつの間にか震えていた。心を乱すなごむに、カラドホルグは静かに言った。

『大丈夫』

その言葉は、なごむの燦る心を柔らかな繭で包む。守護者の優しさに落ち着きを取り戻し、なごむは頷いた。

「うん……」

理沙の事は良い。ここは異世界なのだ。理沙はここに来れないはずなのだから。

「よし、いいか」

時を見て、ラシャがなごむに声をかけた。

「そのままでは落ちるぞ。私の腹に手を回すんだ」

「え……」

ラシャは厳しそうな性格であるが、女の子だ。女の子の体に触れるなど初めてのなごむは、指示に目を丸くした。

「早くしろ！」

「はい！」

叱咤され、言われるままにラシャへと手を回し、腹の所で組む。

「よろしい」

女の子だけど……どきどきよりも、どきまぎする。なごむは戦争映画に出てくる鬼教官を思い出しつつ、体を硬直させた。

「「じゃあ、用意はいいね。さて……」」

ジャルグボールグは声高々に、翼を伸ばした。虚空へと首を伸ばし、大地を蹴りあげる。疾風が四散し、草原が悲鳴をあげる。双頭の赤竜の巨軀は沈みゆく夕陽を背にすると、悠然と浮かび上がった。「「しゅっぱーっ！！」」

第五話「出会い」(後書き)

> i 1 1 1 2 7 — 7 6 6 <

イラスト・あるぴよ様

初期ラシャデザイン

第六話「甲殻乱走」

黒狼山脈は国と国とを隔てるほどに高く屹立した山々だった。麓は緑に溢れて温暖である地域が殆どであるのに対し、山頂に向かうにつれてどんどん気候は厳しくなる。その頂きに到っては年中凍てつく寒さで、溶けることを忘れた雪が覆う。

そんな黒狼山脈を、ジャルグボールグは悠々と越えてゆく。雪化粧で色づいた山を眼下にして、しかしなごむは寒さを感じていなかった。そればかりか、巨体がバランスを崩さずにいられる飛行速度であるにも関わらず、風による抵抗すらない。なごむ達を薄い桃色の結界のようなものが囲っており、それが防御壁になっているようだった。もしかしたら翼で飛んでいるのではないのかもしれないと思う。

とはいえ、高い位置で飛んでいるという感覚は内臓の縮むようなものがあつた。浮わつてて定位置を失った心臓や胃やらが、妙に気になる。恐れはないが、お世辞にも居心地は良いと言えなかった。

「もうちょつとかな。山脈を越えるのは。昼ぐらいには目的地周辺ですつ、なんてねえ」

ジャルグボールグが高揚したように笑う。彼の軽口に、相変わらず時おり伺えるラシャの横顔は堅い。笑顔という表情を子宮に忘れてきたような彼女。内臓不振も加わって、なごむは語る言葉を失っていた。

早く着かないかな、その思いは念じるに等しかった。心の中で数字を数えたり、羊を転がしてみたり、童謡を歌ってクマとこんにちわを何十回と繰り返していると、

『あれは……あの方向は、国境の街オルクトか？』

カラドホルグが声を響かせ、ラシヤが視線をある一点に落とした。

「何？」

なごむもまた二人に倣い、ラシヤの肩越しに眼下に広がる風景のある一か所を認める。黒狼山脈を越え、平原が広がり始めたその麓。ちょうど国境の端に当たるだろう場所で、無数の螢火が明滅していた。

どうやら、街のようだった。近づくにつれ肥大化する街は、大量の光を散り散りにしながら、もうもうと煙を吐き出していた。

「襲撃されている……」

ラシヤの言葉に耳を疑い、目を凝らした。夜ゆえにぼんやりとしているが、街を囲う外壁、東側に火が集中している。外壁では、黒っぽい何かが蠢いていた。

色素を混ぜているのだろう、赤い狼煙が立ち昇っている。

「どうするの、ラシヤ。守護隊への狼煙はもう上がっているようだけれど」

「下降する」

「了解」

ラシヤの指示を受け、ジャルグボールグが体を傾ける。猛烈な勢いで一気に下降すると、現状が更に詳しく目に飛び込んできた。街の外壁を、蟻のようなフォルムの生物が襲っているのだ。目を橙色に光らせた暗赤色の巨大な虫たち。人の一回りも二回りありそうなそれらが、何十匹も集まり、がりがりとした街の外壁を噛み砕いているのだ。

「甲殻乱走か……。もう夏も終わりだというのに」
ラシヤが舌打ちをした。

外壁の上では、人々が喚き叫びながら矢や岩を放っている。しかし強固な甲殻虫はそれらをはじき返し、石で組み立てられた外壁に

齒を立て続けていた。

「油を注げー！」

人々から怒声が沸いた。風呂釜ほどの大鍋がひっくり返され、煮えたぎった油が鍋から虫たちの頭上へと注がれる。更に投げられた松明が油に着火し、灼熱の火炎が黒煙と共に高々と上がった。さすがの虫たちも、これは効いたようだった。焼け死んだ仲間を盾に一度後退し、群れを乱した。しかしすぐさま体勢を立て直すと、再び壁に激突した。

激震に足場が割れ、何人かが犇めく虫の群れの中へと無惨にも落下する。骨と肉のの咀嚼が辺りに響く。

映画でしか見たことのないような光景に、なごむは戦慄した。視線を逸らし、体を伏せる。

激戦は勢いを増す。虫の体当たりに、歴戦を耐えてきたであろう外壁もヒビが目立ち始めた。人々と虫との熾烈な戦い、勝敗は今、虫に下ろうとしていた。

「これでは守護隊が間に合わないな。オルクトは外壁が強靱だから、局所的に崩されると虫には弱い。内からやられたら逃げ場を失うね。どうする？」

ジャルグボールグが喉を鳴らすと、

「……時間はまだある。決まっているだろう。なごむ、カラドホルグ！」

「はい！」

「少し寄り道をする、いいな？」

「あ、はい！」

ラシャの問いかけは、有無を言わせぬ気迫のあるものだった。なごむが素直に従ったのを横目にとると、ラシャはジャルグボールグの体を強かに蹴りあげた。

「ひゃっほう！」

ジャルグボールグが一気に下降する。滑空しながら二つの頭を掲げると、大きく息を吸い込んで、一気に虫たちへと吐き出す。

するとどうだろう。ジャルグボールグの唇の先から、驚くべきことに火焰の玉が噴出し始めた。双頭の竜から放たれた幾つかの火球は虫たちを包み込み爆裂する。

火柱が次々とあがる最中、隙間を縫うようにジャルグボールグは器用に飛ぶ。その動きは華麗だった。まるで甲殻乱走を楽しむ、妖艶なる舞踏のように。

———こうがい 蝗害という災害がある。

蝗害とは、大量群生したバッタなどの虫が地域のありとあらゆる草木を食べつくしてしまう災害のことである。その害の後には、水は汚れ切り、草木一つも残らない。必然的に、その土地に住む人間や生き物は飢えに苦しむこととなる。

ラシャ達の世界には甲殻乱走という災害が存在した。大量の虫が襲うという点で蝗害と似たこの災害。しかし、蝗害とは一線を画したおぞましい特徴があった。

それは、雑食の虫が草木だけでなくありとあらゆるものを食べてしまうという特徴であった。草木どころか家畜も、建物も、人さえも食べてしまう。

加えて、甲殻乱走を起こす虫たちは蝗害同じで、孤独相という普段の体から群生相へと変貌を遂げる。群生相とは、移動に適した体に自身を作りかえること。そうすることによって、虫たちは恐るべき速さで移動し、何でも貪欲に喰らった。そして何より、普段よりも巨大で強固な甲殻を纏った。

例年よりも暑い日が続く涸れた夏の年。突然雨が降ったその翌日起きる甲殻乱走は、人々にとって正に恐怖そのものであった。

「守護隊か!？」

頭上から突如飛来した双頭の竜に、人々はどよめき、歓喜の声をあげた。

「違う……あれは、ラシヤ様だ! 深紅の姫騎士が救済に来たぞ!」
ラシヤの姿に覚えがあったのだろう、戦いに疲れを感じ始めていた兵士たちが表情を変えた。疲労に侵食された体を奮い立たせ、虫たちへの攻撃の手を強める。

一氣に高まった士氣。それを背後に、ラシヤがジャルグボールグの背に屹立する。

「火に耐性のある奴が何匹かいるな……」

ラシヤの言葉通り、虫の中には火にもろともしないモノがいた。甲殻の表面がぬらりと照る。粘着質な体液を分泌し、甲殻に絡ませているのだ。そうすることにより、炎から耐えているようだった。

討ち取る手は、ひとつ。

意を決すると、ラシヤは低空飛行の状態を見計らい、ジャルグボールグから飛び降りた。

「カラドホルグ。そいつを守っている!」

『当たり前だ』

ラシヤにカラドホルグが答える。

距離を置いて、ジャルグボールグが地に足をつけ、なごむを下ろした。

「出来るだけ遠くへ走って。ちょっと待っててね」

そう言うと、ジャルグボールグは体を低くし、口を大きく開けて無数の鋭い牙を晒しながら、一氣に虫たちに突っ込んだ。

轟音があたりに飛び散る。ジャルグボールグの捕食、双頭でバリバリと虫たちの頭を噛み砕く。弱肉強食の摂理に下された虫たちは、突然の襲来に群れを崩すしかなかった。

「一氣にカタをつけようじゃないか!」

猛然と走り出すラシャ。その細い体のどこに、勇ましさを隠していたのか。彼女は一切の恐怖を見せずに虫たちと対峙した。

「ジャलगボールグ！」

ラシャの絶叫が木霊する。途端に、虫たちに牙を向けていたジャलगボールグが喉を鳴らしながら猛々しく雄たけびをあげた。するとどうだろう、ジャलगボールグの体が見るうちに溶け、凝集し塊り、ひとつのルビー色の球体となったではないか。

ジャलगボールグの変化はそれだけで終わらない。球体となったジャलगボールグは軽々と飛び跳ねると、ラシャの体をぱくりと丸々飲み込んだ。

「ラシャさん!？」

なごむの悲鳴に気付いて、虫たちの気が逸れる。集中が外壁から途切れ、簡単に腹を満たせそうななごむへと寄せられた。虫達のような瞳を感じて、なごむは一步後じさる。

それが刺激となってしまった。虫達はざわりと産毛を逆立てさせると、なごむへと突進してきた。

「うわぁ!」

反射的にしゃがみこんだなごむの足を虫たちの歯が砕かんとした瞬間、鉄が弾けるような音と共に歯が飛散した。

虫の巨軀が浮かび上がり、その胴体が専断される。黄緑色の体液がばしゃりと地面に降り、空中で二分された胴体がなごむを横切った。砂をまきあげて落下する。

「ごほ……」

土煙を吸い込んで、なごむは咳き込んだ。口の中に土の味が広がる。顔をあげると、砂に霞んだ視界を深紅の物体が遮っていた。

「下がっている」

ラシャの声に、なごむは括目した。だが目の前にいるのはラシャ

ではなかった。確かにラシャの高く可憐な声色である。しかし、そこにいるのは二本の角を持った赤い鎧の騎士。中に豪傑な戦士を隠すかのような重厚さに、深紅色の鋼がまるでマグマのように鮮やかな色合いを浮かべている。隙など見当たらない、何処から刃を打とうとも跳ね返すだろう強さを称えた騎士がそこにいた。

その手には墨を塗りたくったような漆黒の大剣。何者でも容易に両断しそうな業物が鈍く輝いていた。

赤い騎士は確かにラシャの声で高々と虫たちに面す。

「お前たちの敵は、この私だ！」

バッファローを彷彿させる二本の角を生やし、厳めしい外貌を闇に晒す騎士。身の丈は三メートル近くあり、装備しているのは巨人だと言われた方がよほどしっくりくる。

ラシャなのだろう緋色の騎士は、群れに躊躇いなく入りこんだ。隙を突いて大剣を振り、頑丈な甲殻をいとも簡単に両断する。

重苦しい装備であるのに素早い。加えて、動きに無駄がない。

研ぎ澄ませた五感で暗闇を迷わず疾駆し跳躍し、一振り一振りで確実に敵を薙ぐ。鍛錬を組んで編み出されているのだろう剣さばきは鋭い。

残酷であり不快であるはずの殺陣になごむは目を奪われた。ラシャの戦う姿に、優雅ささえ感じられたからだった。

外壁を喰らうほどの牙をもち、炎に全身を焼かれても戦闘を止めなかった巨大な虫たちが、地を揺らしながら腹の中身を露にする。巖も砕く虫の突進を刃で流し、首を刎ねる。飛び上がる首は虫たちに入らぶつかり、隊列をますます乱した。ガラ空きになった虫の脇腹に入り込むと、刃を突き付け斬り伏せる。

まるで粘土細工だ。虫たちはひしゃげ、騎士の猛攻に次々と屈服した。

瞬く間に数十匹が十数匹になり、十数匹が数匹になる。

そして残された最後の二匹。二匹は武装したラシヤに対して、後退し尻を仲間たちの骸につけ、力なく頭部を下げていた。触角を互いに絡め合っている。

「戦意を失ったか……」

ラシヤは一步後退した。二匹は彼女の慈悲に牙をカチカチと鳴らし威嚇すると、一定の距離を保ったまま外壁に背を向け、そのまま森の方へと逃げ出した。

完全に二匹が去ったのを認めてから、

「ジャルグボールグ！」

「はいはい」

再び球体となり、二分した。いつものラシヤと、人型のジャルグボールグに。

「もう良いぞ」

ラシヤがなごむの方を振り返った。なごむはそれを合図に歩み寄ると、ラシヤの頭からつま先を注視した。

「さっきの赤い騎士は……、ラシヤさんとジャルグボールグさんが合体？　したのですか？」

「合体、なのかなあ。俺が重装甲の鎧になって、ラシヤがその中に入り込んでる。……子供と合体する趣味はなかったはずなんだけどねえ」

ジャルグボールグが唇の端を二ミリ上げる。

「下品な」

眉間に皺を寄せたラシヤ。

どこからどうみてもラシヤは少女の体つきだ。細い体躯のどこに、先ほどの鎧を纏う力があるのだろうか。いやなによりも、あの俊敏な戦闘をする能力が。一切の迷いもなく剣を振るう勇気が。

ジャルグボールグとだからこそ出来る技なのか。

「興味あるのか」

「えっ」

気付くとカラドホルグが傍らにいた。

「えっと、すごいなって」

「戦いに憧れるのは、あまり勧めない。なごむは戦いのない国の人間だから……」

表情こそ分らないが、カラドホルグは真剣になごむを心配している。素朴な声から滲む愛情に、なごむは戸惑う。

この人は何でそこまで、そう考えていると、

「開門！」

閉じられていた街の鉄扉が重たい音を軋ませて開き始めた。ややあつて、扉から出てきたのは数人の戦士と理智的な雰囲気のある青年だった。

青年は茶色い短髪を乱しながら駆け寄る。ラシヤを前にすると物腰柔らかく歩を進め、

「ラシヤ様……！」

頭を垂れて膝まづいた。

「久方ぶりだ」

感激したように青年は顔をあげると、

「お久しゅうございます。お恥ずかしい、覚えておられましたか。

三年前の建国記念祭以来でございますね」

「ご苦労だった。お父上から領地の管理を任されてから初の災難とあったところか。統率がとれた良い戦いであった」

「有難いお言葉。しかしながら、ラシヤ様がいなければ今ごろ外壁か門か……破壊され、街の者が骸となっていたことでしょう。誠に、街を代表し、心から感謝の念を。ありがとうございます……」

街の政を任されているのだろう青年は再び秋の稲穂のように深々

と頭を垂らした。

ラシヤは被害状況の確認のために松明によって照らされた外壁に視線を向けると、

「復旧には時間がかかりそうだな。守護隊がもうすぐで来るだろうから、復旧の間は守護隊の三分の一を街の外に置き、防御を維持しよう。甲殻乱走がまた起こらないとは限らない」

淀みなく発言を続ける。

「今回は人口密度の高い街が襲われたが、防壁も外掘も持たない周辺の村々が襲われる可能性がある。領地内の村々の女子どもに一時的な街への避難を伝達するように。避難が難しいようならば、死骸から抜いた体液を分けるように。体液が虫たちに危険を知らせてくれるから、甲殻乱走を防ぐことが出来るかもしれない」

青年は不安げに眉を下げた。思うところがあるのだろう。何かを言いたげに顎を動かす。

その所作に青年の考えていることを汲んだラシヤは、静かに言った。

「甲殻乱走は冬眠する冬には起こらないから、そう期間は長くないだろうが、その間は減税と食糧資金の援助を行う。私から王へ直接話をしよう。心配しなくて良い。……近隣の村への避難勧告および近隣領地への伝達、被害状況をまとめ国への申し送りを……頼んでも良いか」

さらさらと可憐な唇から出てきた提案と指示に、青年は瞠目する。みるみる内に青年は瞳を潤ませ、紅潮する頬を地につけた。

「……ええ、勿論でございます！ 真心あるご配慮、ありがとうございます。街の者もこの日を忘れることないでしょう」

ラシャと青年が更に具体的な対応と対策を語り合う。なごむは二人の様子に茫然とする。

「なんだ。ラシャに熱視線なんか送って。まあ笑いに必要な筋肉は少ないけど顔だけは可愛いもんね」

ジャルグボールグに小突かれつつ、

「……え、や、すごいなって」

「そう？」

なごむは頷いた。胸に残っているのは青年より強い感嘆である。

「あんな風に考えて、あんなこと言えて……僕と同じくらいなのに」

「なごむ幾つ？」

「十二歳です」

「じゃあラシャと同じ年だ」

「本当に!？」

「あ、来月十三か」

年齢が同じであったことになごむは度肝を抜かれ、再びラシャを凝視した。表情こそ大人顔負けに凛々しいが、そこにいるのは背丈が少しなごむより高いくらいの赤い髪の少女だ。

「本当に、本当に、すごい……」

感激して熱っぽく眩くなごむ。そんななごむの様子にジャルグボールグは、

「そうならざるえないっていうのもあるのさ……」

「え？」

ジャルグボールグの笑みが消えたような気がして見上げると、どすんと背中を叩かれた。

「色々あるって話だよ、なごむ少年!」

ゲラゲラと笑い声が夜空に響いた。

第七話「ユグリート城」

国境の街オルクトを離れ、なごむ達は更に東へと飛翔していた。暗闇は穏やかに拭われ、黄金色のふたつの太陽が世界を鮮やかに綾なす。次第になごむは空の旅路に慣れ、景色を楽しめるようになってきた。

ユグリートは広大だった。煉瓦で緻密に作られた大きい街もあれば、藁屋を組んだ数軒だけの集落もある。生活水準は各々差があるようであったが、共通して水が多く緑豊かだ。

季節は夏の終わり、なごむの世界と同じく収穫の時期らしい。早朝の爽やかな日差しの中、人々は農作具を手にはり田畑に出ていた。薄紅色の絨毯のような田畑に体を埋める人々。家族ぐるみ、集落ぐるみでしているのだろう。みな笑顔で和気あいあいと語らいながら、稲穂に鋤を入れている。

昔の日本も、こんな感じだったんだろうな。なごむは思い、なんだか日向にさらした石を抱くような、温かい気持ちになった。

小さな子どもが天を指差す。人々が手を振る。人々の上空で翼を広げ、双頭の竜は優美に飛行する。

「気持ちいいですね。みんないきいきしています」

朗らかな心地で緊張が少し緩み、なごむはラシヤに話しかけた。

「今年は稀にみる豊作の年だ……このまま続けばな」

しかしなごむとは対照的に、ラシヤは苦虫を噛んだようだ。

「どういことですか？」

「お前は異世界の住人だからな。どこから話せばよいか……」

ジャルグボールグの「国が滅びる」という物騒な言葉を思い出す。「エン・リーテの穴を北方のアルケアの屍が塞いで、発見が遅すぎ

て……でしたよね」

「ああ。覚えていたか。……エン・リーテは分かるのか？」

聖ア王国の教会で手に取った本で、少し学んでいる。

「えっと、ワイミールの魂で、意思？」

「……双聖教そふせいきょうにおいてはそうだな。エン・リーテは世界の血液のよ
うなものと考えていい。エン・リーテは全ての命の源で、どんな動
植物にも共通して宿り、循環している。エン・リーテには力がある。
火を起こし、風を巻き、大地を育み……すべてにエン・リーテが関
係しているな」

「世界の血液……」

上手く想像できず、なごむは首を傾げた。元素のようなものだろ
うか、と。

ラシヤはなごむを一瞥すると、手のひらを虚空へ翳した。五指が
緩やかに舞う。まるで何もない空を攪拌するように。

「お前も視えるだろう、この無数に点在し舞いゆく光の粒が……」
きよとんと目を丸めると、ラシヤは顔を歪めた。

「視えないのか、エン・リーテが」

ラシヤの口ぶりから察するに、水か砂のように視るものらしい。
しかし、なごむには幾ら目を細めても開いても、エン・リーテが視
えない。

諦めて、首肯する。

「はい」

「カラドホルグが契約をしているはずなのか。お前はアルクトテ
ロスじゃないのか？」

ラシヤの詰問に、どぎまぎする。

「アルクトテロスじゃなくて、中学一年生です」

「チューガクイチネンセイ……一年生？ 学生か」

なごむの回答にラシヤは目線を宙へ泳がせると、

「なるほど。契約というより、ただ守護されているだけか」
納得したらしく、閑話を収めた。

「続きを話そう。エン・リーテを多く蓄え力となし、古から生きるモノが存在する。それがアルケアだ。私のジャルグボールグ、お前のカラドホルグ。アルケアとアルクトテロスは互いの命を強く結び付け、契約する。一度契約するとどちらが死ぬまで契約を解くことはできない。が、契約することによって、力を高めあうことが出来るのだ」

ラシヤはジャルグボールグを撫でた。くすぐったーい、と双頭の竜がふたつの首をくねらせる。

「……しかし中には、契約までに至らないアルケアも存在する。契約するための知能がもともとなないのだ。ユグリートの北にはイノシシに似たアルケア・エルマチアンと土蜘蛛に似たアルケア・ネクアラがいる。このアルケアは、契約する知能がなく、獣と同じように生きていた。普段は互いの領域を侵さないのだが、昨年の秋の実りが少なかった所為もあるんだろうな。珍しく争ったようだ。ネクアラは深手を負ったらしい。まあこれはあくまで、学者たちの推測なのだが」

一呼吸置いてから、

「エン・リーテは全ての命の源だ。アルケアはエン・リーテを大量に浴びることで、どのような致命傷でも癒すことができる。エン・リーテを大量に噴き出す場所は聖域といって、大抵は穴だな。それが我が国にはひとつある。その聖域、エン・リーテの穴ヘネクアラは移動し、エン・リーテに浸った。しかし、そこで力尽きてしまったのだ」

忌々しげにラシヤは俯いた。

「ネクアラが地下を潜って向かったために、監視をしている兵士たちはネクアラの屍に気付かなかった。周囲の草木が枯れ始めたことで異常が判明したが、全ては遅かった。屍は噴出して土地を潤すエソ・リーテを塞ぎ止め吸って膨らんだ。挙げ句、憎しみだけの塊となってしまっていたのだ。土地は少しずつ恵みを減らしていくだろう。動物たちは強い憎しみを感じて不穏になり凶暴化している。私はジャルグボールグとともにネクアラの屍と戦ったが……」

「ぶっちゃけ三回くらい死んだよね。目を覚ましたらベッドの上でした、そんな三カ月」

「黙れ」

間に入ったジャルグボールグの軽口を氷の舌で一蹴して、ラシヤはため息をついた。

「情けない話だ。首都守護隊の実に四分の一が死傷し、我々は同盟国である聖アやソラングールに助けを求めた。アルケアの力を貸してほしいと。しかし、断られたよ。……もともと期待はしていなかった。アルケアは貴重な戦力。その手の内を明かし、ましてや危険を冒させるわけにはいかない、というところだろう。我国がアルケア退治に疲れ弱体化するのは福音だろうし」

人差し指と中指の二指を伸ばす。人差し指を揺らしながら、

「残った手はふたつだけ。ひとつ、アルケアを使わない総力戦。対ネクアラに全守護隊を送る。国防能力はゼロに等しくなる。勝利が観測されているが、戦力の回復には時間がかかる。他国に侵略される危険が極めて高い、正に最後の方法だ。もうひとつは」

人差し指を折り、中指を突き出すラシヤ。

「国内のアルケアを複数合わせて戦わせる。契約能力のないアルケアを無理やり引っ張るのは無理だ。……行方をくらませたアルクトテロスとアルケアを探すしかない。生きているかも分からない者たちを」

ラシヤは静かに目を閉じた。瞑想するような横顔。まるで自身の中に湧きあがった怒りを諫めるように長く息を吐いてから、

「残された期間は二カ月だった。一カ月国中を探し、国外探索を各国へ依頼しようとした矢先、……お前たちを感じたのだ。カラドホルグ、そしてロト伯父様のエン・リーテを。それが……」

ラシヤの視線がなごむにぶつかる。長い睫毛の下の黒い瞳から、鬼気迫るものが覗く。猛々しい感情が少女の中に渦巻いていることを悟り、なごむは畏怖を感じた。冷たい汗が脇腹を伝う。

「話はもう、いいか」

「あ。はい」

「本当に協力をしてくれるんだろうな」

「……それは……」

疑いを隠さない問いに、なごむは思わず口を閉ざした。

迷いが体を駆け巡る。ラシヤが対峙してかなわなかった強敵に、対峙させられることが想像できない。

カラドホルグの力は強大だ。異世界へと瞬間移動をする、大きな風を巻き起こして洞窟のありとあらゆるものを吹き飛ばす、兵士の首を絞める。……カラドホルグがいれば、なんとかなる問題なのだろう、とは思う。

なごむの困惑を感じ取ったのだろう。それまで沈黙に徹していたカラドホルグが、

『僕はなごむの意思に全てを任せる』

そしてはつきりとした口調で言い切った。

『必ず守る』

カラドホルグの言葉に安堵する。カラドホルグは絶対に自分を守ってくれるだろう。彼は完全無欠の守護者なのだ。

「……うん」

少しの心の乱れを内に、なごむは顔を下げた。

空の旅路は牧歌的に過ぎていく。

やがてふたつの太陽が天中に登り、ジャルグボールグの影が最も小さくなった真昼。次第に建物と人の数が増えていき、畦道や獣道ばかりだった大地に、轍が刻まれ始めた。石畳の舗装された道も、目立つようになってきた。

ロンチャー（ヤギに似た縞々の毛並みの生き物）や、毛の長い牛によく似た動物が、大きな布張りの荷車を引いている。何台も並んでおり、脇を人々が囲っている。

「あれは、隊商ですか？」

「ああ。首都には国内最大の市場があるから……」

なごむの質問にカラドホルグが答えた。

「もう首都が視えるよ、ほら！」

意気揚々と、ジャルグボールグが翼を動かす。地平線に、きらりと銀色に輝く棒状のものがあつた。

「あれは……」

赤ん坊の腹のようになだらかな丘を越えると、大地に巨大な剣が突き刺さっていた。まるで大樹のようなそれを中心に、白を基調とした背の高い塔が身を寄せる。全体を眺めるとちょうど円錐の形をした――、城だった。

城の周囲には放射線状に建設された街。計算に計算を重ね石を組み作り上げたのだろう、均整のとれた円形をしていた。中心に聳える城と合間って、生クリームでたっぷりコーティングしたワンホールケーキのようだ。

道路は向日葵のような放射線を描く。天から落ちてきた巨大な剣が生んだ美しい罅の跡に、丁寧の家々を立てたようにも思える。

また、首都の北側には首都とほぼ同じ大きさの湖畔があり、蒼い宝石のように光を踊らせている。

「ユグリート城だよ、なごむ」

ジャルグボールグの嬉しそうな声色。なごむは静かに、感嘆した。
綺麗だ——。

蒼穹の袂に佇む、解けだした白雪のような都市。ユグリオの首都は、見るものの心を簡単に奪う筆舌に尽くしがたい壮麗さを持つて照り映えていた。

「やっと着いたー、さあ寝るぞー」

ジャルグボールグはふにゃふにゃと欠伸をすると、翼を畳んで着地に備える。滑るように下降しながら、なごむたちを乗せた双頭の赤竜は、城へと爪を反らせた。

中央に屹立する剣の真横には、空中庭園を広げた塔があった。ジャルグボールグは滑るように降下すると、空中庭園の芝生に爪をたてる。少しの衝撃のあと、空の旅路は終わった。

「着いたよ。降りた降りた」

なごむ達を急かすと、羽根を折り畳む。早々に人型へと姿を戻すと、ジャルグボールグは溜め息混じりに腰を揉んだ。

ラシヤはその年寄り染みた所作に睨みをきかせた。

「しゃんとしないか。ここはお前の自室ではない！」

齢十二の少女にたしなめられ、へいへいと衣を正すジャルグボールグ。次にラシヤの標的となったのは、なごむとカラドホルグだった。

なごむは神兵に捕らえられた際に服が土で汚れてしまっていた。指輪から人型へと姿を変えてなごむの後ろに控えるカラドホルグに到っては、髪はボサボサ、“EAT ME”という滑稽なセンスのTシャツが全く似合っていない、一見浮浪者の装いである。

「これから国王陛下にお会いする。その酷い格好をなんとかしなきゃならないな」

ラシヤの嘆息に、

「なごむが望むなら」

カラドホルグがじつとなごむを見下ろした。

「え……僕、ですか？ えっと、ちゃんとした格好の方が良いですよね」

王様に会うというのは初めてだ。どんな格好をすれば良いのか検討もつかないなごむであったが、素直に頷いた。

「分かった」

カラドホルグがそっと目を閉じると、火種のないはずの地面からシウルシウルと蔦のような炎が燃え上がり、なごむの足にまとわりついた。

「わっ！」

飛び上がって避けようとし、やめた。熱くない。炎とは異なる、異質なものであった。

「大丈夫」

見上げるとカラドホルグがふんわりと口角を上げていた。

どうやら彼の術のらしい。なごむは納得すると、火炎が全身を包むことを許した。眩しさに瞑目する。ほんの僅かな時間だけ燃え、すぐに火は消えたようだった。

恐る恐る開眼し、

「わぁ……」

なごむは意表を突かれた。なんとも不思議な驚き。なごむの服装が変わっている。滑らかな肌触りの純白の布で出来たフード付きの長外套、黒い半ズボン、そして黒皮のブーツ。全てに金糸で細かい刺繍が施されており、一目で最上級の代物だと分かる。

なごむは嬉しくなって顔をカラドホルグに向け、

「ありがとうございます……」

固まった。

そこにいたのは、見知らぬ男性。逞しい浅黒い肉体に軍服に似た

濃紺の服。ジャルグボールグが着ている服とは色違いになるだろうか。

見事な、勇ましい青年の姿である。白銀色の短髪の下の優しそうな瞳。精悍であり、温厚そうな印象もある。

まさか、

「カラドホルグ……さん？」

「……駄目、か？」

馬子にも衣装。いや、今までの姿があまりにも酷かったのだ。

暫く啞然とした後、

「似合いますっ、似合いますっ！」

やや悲しそうな瞳のカラドホルグにぶんぶんとなごむは首を振った。

「ふむ、良いな」

姫君のお眼鏡にもかなったようだ。

ほっと胸を撫で下ろしていると、

「丁度良い。迎えのようだ」

ついとラシャが視線を傾けた。美しく剪定された木々に、彩り鮮やかな無数の花で出来たアーチ。美しい庭園の向こうから幾つかの足音が響いてくる。

スツとした上品な足取りで現れたのは、猫だった。

「……ロシアンブルーの二足歩行だ」

なごむの呟き通り、猫は二足歩行であった。

しかもカラドホルグが着ているものと同じデザインの服を纏っている。腰にはサーベルが一本、繊細な金の装飾がされた鞆に収まっている。身分を表す正装なのだろう。やや異なるのは、右胸に剣を象った刺繍が縫いこまれていることだろうか。

青みがかった灰色の短毛と紫の瞳が実に麗しい。なごむと同じくらしい背丈だろうか。気高さを自然と醸し出す佇まいである。身分

が高いのか、兵と従者を引き連れていた。
響いたのは、味わい深いバリトン。

「久方ぶりですラシヤ様。お迎えに参りました。遅れて申し訳ありません」

「ヨーゼルか。お前が迎えに出るとは、珍しいな」
ラシヤの回答にヨーゼルは微笑すると、

「空中庭園には見張りが一人しかいませんし、迎えの出来るような者ではありません。狼煙をあげてくだされば、音楽隊でも並べて、盛大にお迎えいたしますのに……」

「興味が無いよ」

「でしょうな。冗談はここまでにして……丁度この下で守護三番隊の会議を行っていたのです。先日、首都で甲殻乱走と獣の暴走と、立て続けに騒がしいことがありまして」

「何……？」

表情を曇らせるラシヤにヨーゼルは首を左右に振って、

「ご心配には至りません。どちらも軽傷者のみで被害は少なく抑えました。問題はありません。……それはさておき、この方々は？」

なごむとカラドホルグの姿を捕えて、アメジストの瞳が薄く伸びる。射抜くような眼差し、透視でもされているような感覚になごむはたじろいだ。自分たちは面識のない不審者なのだ。

「お前より先に会わせたい方がいる。陛下は何処に？」

すつとラシヤが前に出る。ヨーゼルは視線を元に戻すと、

「謁見の間にいらっしゃるか。すぐに会えましょう」

「よろしい」

ラシヤの口ぶりに自身がすべきことを悟り、ヨーゼルはくるりと靴先の方向を変え、歩き出した。すたすたと歩き出すその背に、ラシヤが付いていく。

「さあ、行こう行こう」

ジャルグボールグに促され、なごむも空中庭園を後にした。花と緑のアーチを抜け、下界へ続く螺旋階段を下りる。いくつか階を通り過ぎ、踊り場に出ると、脇の扉から先へ行く。重苦しい鉄扉を抜けると、その先は廊下だった。

窓はなく、灯りは左右の壁についた蠟燭だけである。灯りも火のついてないものが多く、石畳の床は薄い闇に半ば沈みかかっている。長く歩いていると陰鬱な気分になりそうだった。

そんな廊下が全く同じ作りでえんえんと続く。加えて、右へ行っただかと思えば左、左へ行っただかと思えば右と、迷路のように複雑であった。

よく使う者でなければ簡単に迷ってしまうところだ。下手をすれば、何時間もさ迷うことになる。意図としては、侵入者が現れた際に迷わせ疲れさせ、攻撃の時間を稼ぐためだろう。

不気味さに怯えながら付いていたなごむであったが、やがて疲労が勝り、それどころではなくなってきた。ふうふうと息が荒くなり、声をかけまえか考えあぐねていると、

「では」

漸く着いたらしくヨーゼルが足を止めた。扉だ。うねる風を題材にしたのだろうか、ゆるやかなウェーブの装飾が細かく施されている。

左右には白銀の鎧を纏った者が、斧を手に使っていた。彼らが扉に手をつくのをヨーゼルが制する。

「私が」

そう言って、ヨーゼルは桃色の肉球で扉を押した。そつと、綿毛にでも触れるような動作であったのに、すんなりと軽やかに開く。

「お入りください」

射し込む光は明るい。ヨーゼルたちに引き続き、なごむは恐る恐る入室した。

途端に辺りが開けた。閉塞した場所を渡ってきた分、まるで草原にでも出たかのように心は拡散する。

なごむは感嘆した。広壮とした内部には、見たことのないものばかりがあつたからだ。

左右には巨大なステンドグラスが並んでいる。モチーフは人で、それも王族のようであつた。王冠を頭に、手には様々な武器あるいは本や杖といった知恵をさす品を持ち、威厳ある瞳でなごむたちを見下ろしている。

上部には城を模したのだろう、美しく絢爛なシャンデリアが流星群のように瞬き垂れ下がっている。天井画もあり、それは緻密な麗筆をもつて描かれている。人や、鳥や、虫や、馬や、山や、緑や、花や、数多くのものが散り散りに描かれているのに、まとまりを感じる。確かな技術をもった美術家の技術なのだろう。

あまりのことに圧倒されて、なごむは自分が置かれている状況を悟るのに一拍遅れた。

「王の剣、赤の者来訪なり!!!」

猛々しい一声と甲高いラッパの音。

なごむは我にかえると、突き刺さるような視線を浴びていることに気付いた。左右に一律ずつ並んだ、濃紺の服の者たち。ヨーゼルと同じ身分なのだろうか。右胸に剣の刺繍がなく、代わりに盾の刺繍が刻まれている。堂々とした彼らは鋭い視線でなごむが何者なのかを見定めようとしているようだった。

ラシャの迷いのない背中についていく。恐縮しながら人々の間を通り過ぎ、今度は開け放たれた扉を前にする。

「それでは私はここで」

ヨーゼルが足を止める。凜と立つ彼を横目に、扉を潜り抜けた。同じように開けた空間――――、中央に玉座があり、一人の男が

坐していた。

滑らかに胸元まで下りる黒髪に、金銀宝石が精緻に組まれた冠。金糸の刺繍が襟を鮮やかにする濃紺の正装。滑らかな光をにじませる深紅の長外套。まるで古い物語から飛び出してきたような鷹揚とした王がそこにいた。

掘りの深い整った顔立ちは美術品のよう。黒い明眸からは気品が溢れ、視線が不思議と吸い寄せられる。口髭が鼻梁の下にあるが、それを剃ってしまえば意外にも若いのではないかと思えた。

「父上……」

ラシャの呟きに、なごむは交互に二人を見た。眉目秀麗な容姿は、なるほど、どことなく似ている。

だが、それ以上になごむには惹かれるものがあつた。何故か懐かしく、胸が熱くなる。

一度この人にあつたことがある気がする——、そう思考を巡らせる。が、これほどの美形の男には会つたことがないはずだ。映画か何かからの記憶だろうか、いや……。

「お父さん、だ」

ふいに口にした言葉が思つたよりも大きくなり、反射的に唇を押さえたが、遅かつた。

王の目がなごむを鷹の爪のように捕える。

「父上、話せば長くなるのですが」

庇うように、そつと前に出るラシャ。雄々しく黒い双眸をやや困惑の色で曇らせながら、ラシャはこれまでのことをゆっくりと語り始めた。

旅先でのこと、ロトのこと、カラドホルグのこと、そしてなごむのことを。

王は表情を変えずに耳を傾けていたが、なごむの説明に入って、徐々に眉をひそめ始めた。

「そうか……、御苦労であったな」

眉間を揉んで暫く間を置いた後、

「なごむ。兄上の……」

そう言って、王は立ち上がった。玉座の積まれた檀を下りて、滑るような動作で進む。そしてなごむの前に聳え、驚いたことに膝を折った。

なごむは息をのんでカラドホルグを一瞥した。カラドホルグは怪訝な顔をしながらも、小さく首を左右に振る。大丈夫というカラドホルグの言葉が聞こえたように思え、なごむは身を任せることにした。

目を丸めるなごむ。その頬を、王の大きく温かい手が包む。

「そう怯えなくても良い」

間近に目にして、なごむはますます王と父とに重なるものを感じた。写真や動画でしか顔に覚えのない父と確かに似ている。胸の熱さがますます高まり、喉元から鼻腔へふいに貫く。

はしなくも。なごむの目が潤み、滴が王の手にとりと落ちた。無意識のことに、何よりも他人に涙をつけてしまったことになごむは動揺した。

「ごめんなさ……」

王の手から後ずさろうとして、しかしそれは叶わなかった。王が後退しようとしたなごむを、ぎゅっと抱きしめたからである。

事態になごむの心臓が跳ね上がる。バクバクと肋骨を叩く。緊張に逆上せ上りそうになっていると、王の力が更に込められた。そして、

「……兄は死んだのだな」

酷く寂しげな囁きだった。

なごむは王の言葉に、自分の涙の理由を知った。

王となごむの父親は血を分けた実の兄弟で、遠い記憶の父に似ている。なごむと王は伯父と甥の関係であり、なごむは王の兄の忘れ形見なのだ。

理屈ではない、肉親の絆を初めて感じて、ふいに出た涙であった。感極まって、なごむの目からボロボロと涙が溢れた。それまで意識していなかった異世界へ来たことの孤独感や寂しさ、裏切られたことや乱暴にされかけたことの恐ろしさ、未知なものばかりの不安が、なごむを激しく襲う。こんな感情が自分の底に隠れていたことに驚き、慌てる。

理沙の顔も浮かんだ。喧嘩をして逃げるように出てきたが、いま理沙はどんな気持ちだろう。なごむと理沙は、ふたりだけの家族なのだ。望郷心も沸き上がり、なごむは感情の発露が抑えられなかった。涙は後から後から溢れて、頬はマグマのように熱くなり、肺と心臓は針で刺すような痛みを震える。

止めようがない――――。

号泣するなごむの背を、王は何も言わずに擦った。なごむも王にしがみついて、その胸に涙を預けた。

第七話「ユグリート城」(後書き)

> i 1 1 1 3 0 | 7 6 6 <

第八話「護る者護られる者」

「第一の姫君、来訪なり!!」

ラッパの音がさめざめと泣くなごむの背中を叩いた。ユグリート王の胸元に埋めていた顔をあげると、一人の少女が扉の向こうからこちらへと歩いてくるところだった。

なごむは兎のように赤く充血した眼を丸くし、辛うじて飲み込んだ。御姫様だ、という呟きを。

小さな宝石が幾つも嵌めこまれた銀のティアラに、緩やかなウェーブを描いて長く伸びる艶やかな赤髪。黒蝶のように可憐な睫毛と瞳に、不幸事の一切を知らないような柔らかな頬。光沢のある明るい橙が見るも鮮やかなドレスを纏う、姫君だ。

姫君の登場に、ラシヤが狭まりがちな額を広げた。

「姉様」

その言葉に改めて姫君へと視線を戻す。なるほど、ラシヤに似ていた。そればかりか、同じような格好をさせれば全く見分けがつかないだろうほど酷似している。双子なのだろうか。とはいえ、表情から受ける印象はラシヤの真反対だ。

実に姫君らしい姫君の足取りは踊るように軽やかである。丈の長いプリンセスラインを孔雀の尾のように滑らかに揺らし、歩み寄る。彼女はユグリート王を眼前にすると、王としゃくりあげるなごむに春を呼ぶ女神のように微笑み、小首を傾げた。

「皆さま、ごきげんよう」

まるでテレビから出てきたみたい、となごむは瞠目する。これほど美しい少女がいたのだろうか。

「お客さまもいらっしゃいますのね。お初にお目にかかります。ユグリートが第一王女、ソアラ・ギブリット・ユグリートにございます。貴方様が、カラドホルグ様？」

漆黒の美しい瞳を投げかけられ、なごむの心臓は一気に沸騰した。赤面しながら目を瞑り、ぶんぶんと首を左右に振る。

そんななごむの鼓膜を、再びラッパの音が叩いた。

「失礼いたします！」

ソアラに引き続き、現れたのは謹厳そうな老女だった。シルバーグレイの髪を纏めて、後頭部の部分で玉にしてある。ワインレッドのスカーフに堇色の服という慎みを具現化したような装いの老女は、恐縮した面持ちでソアラの背後に回ると、膝を折った。

「あら、ルシオラ。勉強部屋で待っていても良かったのに」

おっとりとしたソアラに、ルシオラは眉根を寄せる。

「申し訳ありません、国王陛下」

「ルシオラが謝るなんておかしいわね。お父様、私、ラシャさんが戻られたと聞いて、勉強どころではなくなってしまったの。いてもたってもいられなくなったのよ！」

高らかに歌い上げるように、ソアラは目を潤ませた。興奮ぎみに両手に拳を作り、ふるふると肩を揺らすと、くるりとドレスを翻す。小鹿のような足はラシャへと向く。

「おかえりなさい、ラシャさん」

ステップを踏むように近寄ると、ソアラは飛び立つ蝶のように手を広げた。

「抱擁！」

感極まって飛び付く華奢な腕――を、ラシャは猛牛を避けるエルマタドーレの如くかわした。

標的を失って、赤ん坊のような足取りで数歩進み、止まるソアラ。くるりと振り向いて、彼女は上品に微笑んだ。

「さすがの身のこなしですわね」

ラシャはあえてソアラから距離を置くように片手を突きつけると、

「姉様。カラドホルグはこちらに」

興味を自身からそらすように指差した。

「あら。大柄な方ですね。お初にお目にかかります、ソアラと申します。よしなに」

カラドホルグを背筋を伸ばして仰ぎ、ソアラは小首を傾けた。そして素早く駆け寄り、

「抱擁！」

しかし怯えたような表情で下がったカラドホルグによって、またしても抱きつくことは叶わず、ソアラはたたらを踏んだ。

「ごめんなさい。御嫌でしたか。失礼を」

「姉様……」

呆れたようにラシャが頭を抱える。

困り顔のラシャとお気楽なソアラ。顔はそっくりだというのに、こうも違うものを見せられて、なごむは不思議な気持ちになる。本当に姉妹なのだろうか。

困惑していると、

「ラシャさん、私、カラドホルグ様にお会いできて嬉しいわ。でも、カラドホルグ様の他にも、興味のある方がおりますの」

ちらりと、ソアラと視線が重なった。

「……お父様が私より先に抱擁されているのがなんだかとても気になるお方なのだけでも。ロト伯父様かしらとも思いましたけど、ロト伯父様にしては、とても可愛らしいように思えて」

見詰められると妙にどぎまぎしてしまふ美貌。無意識に逃げ腰となってしまったなごむの代わりにラシャが答えた。

「これは、二子玉なごむ。ロト叔父様の息子で、カラドホルグの守護を受けている」

目をしばたくソアラに、ラシャは今までのことを説明する。話に少しの区切りがつく度に、ソアラの大きな瞳はより開かれ、可憐な唇からは感嘆が零れた。

「ロト叔父様が亡くなられたのは残念だけれど、我々には可愛らしい希望が残されたのね」

意外と肝が据わっているらしい。突拍子もない話のはずなのに、ソアラは一通り驚くと、しっかり納得したように頷いた。加えて、長い睫毛を小枝にとまる鳥の羽のように下ろす。

「まるで神の導きのよう」

頬を熱っぽく朱に染めて、うっとり囁くソアラ。そんな彼女に、
「……神の導きですって？」

それまでの沈黙に波紋をたてるように、疑問を投げた人物がいた。教育係のルシオラである。

「あら、ルシオラ。どうしたの？」

「お言葉ですが姫様、申し上げます。あまりにも樂觀すぎるのではないでしょうか。ラシャ様の言葉が本当であれば、なごむ様はこの国の者でなければ、この世界の者でもありません。そのような方に、国の運命を託すなど……」

「なごむさんはロト叔父様のご子息よ。他人ではありません。協力して下さるというご厚意を、お前は信じられないというの？」

ソアラの口調は穏和であるが、やや棘を含んでいた。しかしルシオラは鷹のような姿勢を崩さない。冷静に彼女は続ける。

「信じる、信じないではなく確証の話です。ロト様は陛下の兄上に当たる方、私もよく存じ上げております。それ以上に……、教育役を賜りましたのも、私でございます。私が知るロト様はアルクトテロスとしてカラドホルグに与えられた力を、王族として使われたことがありませんでした」

鋭く、冷たく、

「王族として国に尽くすことのなかったお方。そればかりか、ロト様はあろうことか国を捨てたお方です。……ご子息のなごむ様から、本当に協力を得ることができますでしょうか」

「口を慎みなさい、ルシオラ」

ついにルシオラの言葉をソアラが諫めた。

ラシャのためであった。ラシャはアルクトテロス探しに国中を駆け巡ったのである。王族の、姉妹の勤めに泥を塗られたのだから叱責は当然のことであった。

ラシャはというと、真一文字の唇で表情を変えていない。だが彼女の心が僅かに陰る反論には違いなかった。

「私の浅考は愚かな非礼でしょうか」

姫君の言葉は予測の範疇であったのだろう、ルシオラは堂々としたまま、問う。彼女は唇を噛むソアラ、無表情のラシャ、気まずそうなジャルグボールグ、眉をひそめるカラドホルグ、そして狼狽するなごむに視線を巡らせ、最後になごむの脇に佇むユグリート王を仰いだ。

「……間違いではない」

ユグリート王は叡知の光る黒曜石の瞳になごむを浮かべながら、静かに訊ねた。

「私も私の耳で確かめたい。なごむよ……、協力してくれるのか？」
威厳のある声に射られて、なごむの心は揺れた。自分は本当に協力をすべきなのか、否か。決断するときには殆ど、人の考えに乗ってきたなごむである。正直なところ何が最善なのか検討もつかない。
が……、俊巡はそれほど長くはなかった。臆しながらも、ゆつくりと縦に振る。決意というには弱い、承諾。心が穏やかな方を選択した結果であった。

そんななごむの心理を見抜いたのか、それとも疑問に感じたのか、「意思があったとして、戦えるとは限らない。なごむは、戦いに耐えるのか？」

王はラシャに、次にカラドホルグへ顔を向けた。暫し無言の二人であったが、

「分かりません」

ラシャが深紅の髪を揺らした。ラシャがそう答えるのは当然のこ

とだった。彼女がカラドホルグの力と接したのは一度だけ。スニフ
オンの町での一件、僅かな時間にあったあの時しかない。甲殻乱走
でも、カラドホルグはなごむの守護に回っていたのだから。知るよ
しもない。

正直なところをユグリート王へ伝えた後、ラシヤは思案げに表情
を曇らせると、唇を開いた。

「もし許しをいただけるなら……、手合わせをさせてくれませんか」
思いもよらぬ提案。ラシヤの真面目な顔がより真剣さを帯びる。

「共に戦うとなれば、私は力を知りたい。カラドホルグとアルクト
テロスの力というものを」



手合わせの場所として宛がわれたのは兵士たちの訓練場のようだ
った。丁度ユグリート城の裏手にあり、地平線上に湖畔が広がって
いる。砂地は整地されており、様々な形の仕掛けがある。練習用の
ものだろうか、鎧を着た案山子が並んでいる他、用途の分からない
池のようなもの等、実に多くのものが設置されている。

中央には、柱を東西南北に置いただけの屋根のない闘技場が置か
れていた。石で出来た円卓を彷彿とさせる。闘技場の上で、対峙し
ながら時を待つ四人がいた。ラシヤ、ジャルグボールグ、カラドホ
ルグ、そしてなごむ。

なごむは顔を日射病患者のように赤く染めていた。激しい動悸に
襲われてマグマのような熱が全身に流れる。その一方で、流れる汗
は氷のようだ。

余裕のない様子のなごむにカラドホルグが、

「なごむ、本当に良いのか？」

「……………うん」

頭は極度の緊張で白くなっており、鼓膜も水か何かが入ってしま
ったかのように音が遠い。辛うじて出た声は蟬のようだ。そんなな

ごむに、カラドホルグが呟く。

「なごむだけは必ず護るから」

落ち着き払った、優しい響きで。

「それでは、始めよう。剣に体を楯に魂を込めよ。剣と楯とに誓い、健闘を」

闘技場の脇で見守る者たち。その最前列に立つユグリート王が、片手をあげた。威儀を正し、悠然と放つ。

「―――始めよ！」

闘の声と共に、ジャルグボールグが紅の球体に変わり、ラシヤを包む。光が四散し、現れたのは雄牛のような角をもつ猛々しい赤い騎士。巨軀に相応しい漆黒の大剣を握りしめた屈強の、ラシヤ。人間の背丈ほどの剣を悠々と持ちあげると、ラシヤは絶叫した。

気合いと同時に繰り出される一振り。あまりの迫力に怯え、目を瞑ることすら出来ないなごむの周囲から猛然と風が吹き荒れた。烈風により、刃が壁に当たったかのように止められる。

「カラドホルグさん！」

風は球体の防壁となつてなごむを包み込む。カラドホルグの姿はない。風そのものとなって、なごむを護っているのだ。ラシヤは次々と刃を繰り出す。まるで舞のようだ。轟音が辺りに爆ぜる。

「頑張つて……」

なごむは薄目になりながら拳を握った。

「下らない、護るだけか!？」

ラシヤが大きく剣を振りかぶり、一気に落とした。

「わぁ！」

防壁に刃が突き刺さる。なごむの眼前で止まる。しかし、ラシヤの猛攻は続く。振り落とした剣に、更に力が込められた。じりじりと、刃がなごむへと近づいていく。

「頑張つてよ……」

呻きながら、なごむは腰を落とした。にじりよる刃から逃れるよ

うに尻を大地に付けて、体を丸める。風の防壁が金切り声をあげて力を増す。しかし、ラシヤもまた抵抗する。二つの力は押しあい、拮抗する。

「うおおおお！」

ラシヤが更に雄たけびをあげた。刃が静かに沈み始めた。なごむに徐々に近づく。距離がどんどん縮まっていき、そして。

なごむの叫び。

烈風が吹きおこり、なごむの体が上空へと攫われる。ほぼ同時に、石畳が剣櫓に突かれて拉げた。破片を撒き散らしながら逃げるなごむを剣が追う。振り上げられた剣はなごむの靴先を掠った。

「空に逃げるか！」

頭上に浮かび上がったなごむに、ラシヤが叫ぶ。

「逃げてても無駄だ。こちらには翼があるのだから！」

赤い騎士の背中、鎧がむくりと隆起する。まるで飴細工のように伸びると、蛹のような形へと変貌し、表皮が破けた。中から現れたのは、双頭の赤竜が持っていたものと同じ翼。

予想されうる攻撃に、なごむは取り乱す。心臓はより激しく肋骨を打ち、体を恐怖が締め上げる。

「飛べるの……！？ 飛ばないで！」

『なごむ！』

恐慌状態に陥りかけているなごむに、

『ジャルグボールグは飛行に特化している。空に移されれば、君を護りきれない。今から言うことを、よく聞いてほしい』

カラドホルグは子供に言い聞かせるように言った。

『今から現れるものを、どうか怖がらないで』

落ち着き払った声。しかし何処か、切ない色が混じっていた。

これから何が起こるというのか。分からなかったが、護るためにするのだろう。なごむは見えないカラドホルグに伝わるよう、しっかりと頷いた。

瞬間、内臓の持ちあがる感覚が貫いた。落下だ。

「うわあああ!!」

落ちる、ぶつかる。

なごむは反射的に目を瞑り、頭を抱えた。……しかし。

痛みはなごむを殴らなかった。衝撃はなく、なごむは背中に冷たい地面を感じた。

———目を開ける。

そこにいたのは、獣だった。

覚えにある獣。空想上の存在のような。夢にまでみた、あの獣。

重力を恐れぬ巨躯。全身を覆い銀色に輝く灰色の長毛。黄金の一角。漆黒のみつつの瞳。豹のような唇に伸びた四本の牙。尾の部分に這う、黒い大蛇。

父が、マジシャン露頭が、螢火の中から出してみせた存在。

「あなたが、炎の獣……」

ずっと憧れていた今世紀最大の手品。その種あかしが眼前にいる。なごむは立ち上がることが出来なかった。驚きに足が動かない。

腰から力が抜けてしまっていた。

『懐かしいねえー、その毛むくじやら』

ラシャの鎧から気楽な口笛が鳴り響いた。ジャलगボールグが陽気に口ずさんだのだ。ジャलगボールグ、とラシャが制す。それから、彼女は剣を掲げると、その切っ先をゆっくりと炎の獣カラドホルグへと向けた。

「お手並み拝見といこうじゃないか」

『……』

カラドホルグはラシャの挑発に口を閉ざすと、身を沈めた。カラドホルグが大地へと腹を近づけていくにつれ、辺りが昼間だというのに暗くなり始める。

「何……?」

まるで闘技場だけ曇りにでもなってしまったかのような景色。異

常な光景に怯えるなごむに、カラドホルグが囁いた。

『大丈夫。必ず君を護る。どんなことをしてでも』

カラドホルグが言い終わるか言い終わらないか、その直後に暗闇が一気に開けた。まるで霧が風に吹き飛ばされたかのように、いや、暗がり収束し、矢のようにラシャへとぶつかったのだった。

「くう！」

突然の攻撃に、剣で守りの構えをすることも出来なかったラシャの体が吹き飛ぶ。

轟音。土ぼこりを撒き散らし、転倒するラシャ。

「おのれ……」

カラドホルグの追撃は続く。再び暗がり染まる周囲、光が弾け、明滅する。闇の矢が次々とラシャに襲いかかる。叫びながらラシャは剣で矢を耐え、あるいは弾く。避けた矢が大地に突き刺さり、瓦礫が爆ぜる。

怒涛の猛攻の中、なごむは風の球体に守られていた。破片がなごむを避けて飛んでいく。それでも、不思議と顔を庇ってしまう。自身の腕によって狭まった視界で、なごむは激戦を窺っていた。

接触の悪い電球のような世界。光と闇が瞬き、輝く。踊る。

「……？」

なごむは目を擦った。視界の端に、妙なものが映ったからだ。砂の粒のような何か。ラメのような粒子。しかし目で追おうとすると、消えてしまう。

「何……？」

粒を明確に掴もうとして、突然視界が暗闇に落された。まるで夜にでもなったかのように。そして夜は瞬時に玉へと姿を変え、ラシャへと跳躍する。

ラシャはカラドホルグの激しい一撃を辛うじて刃に受けた。しかしその勢いは増し、刃へとめり込もうとする。

「ならば——！」

氣勢をあげて耐えていたラシヤが、吠える。咆哮しながら、刃を徐々にずらしていき、跳ねあげた。

矢が方向を変え空を切り裂く。弾かれたカラドホルグの攻撃が敵から主へと標的を変え、貫く。

——額へと！

叫喚、地響き。血のしぶき。巨躯が倒れ、大地が揺れる。

「カラドホルグさん！」

なごむは悲鳴をあげ、地に伏せるカラドホルグへと走った。いつの間にか風の結界は壊れていた。なごむはカラドホルグに抱きつく、血の流れる傷口を見やる。どくどくと、湧水のような流血である。

「なごむ、まだだ！」

顔をあげると、ラシヤがまだ剣を構えていた。戦いはまだ終わっていないのだ。

「やめて、やめて」

涙の痛みが鼻をついた。首を振りながら、ラシヤを睨みつける。怒りが沸く。震えるような激しい憤怒が。そして視界に、血のように赤い粒子が広がっていく。ラシヤが踏み出す、攻撃のための一歩を。

「やめてよ！」

その刹那、ラシヤの顔の傍を炎が爆ぜた。前触れのない衝撃に、ひるむラシヤ。

「……お前ッ」

激昂したラシヤが剣を振り上げる。振り下ろさんと握りを固めた直後、

「それまで！」

ユグリート王が制止した。

誰の目にも明らかな勝敗が決したのだ。王女ラシヤの勝利、しか

しそれは、喜ばしいものではない。

「これでは……」

傷を負ったカラドホルグ、立ち尽くすラシャ、びくびくと慄いているなごむ。ユグリート王は慙愧に堪えないといった表情で、唇を噛んだ。

「これでは、エンリーテの穴にすらいけないだろう」

王の言葉になごむは王を、そして周囲を見渡した。傍観していた者たちの表情は暗い。絶望に沈みこんだような目をしている。

「アルケアとアルクトテロスは高めあう存在。もし契約者の片方の精神力が足りなければ、力が高めあわず、寧ろ弱まっていく。なごむがカラドホルグと契約している以上、カラドホルグは力を出せない。カラドホルグ、君は鎧にはならなかったね。……鎧にならなかったのではなく、鎧になれなかったのじゃないかい？ 鎧となり契約者を護るのには、契約者の力が必要となる。なごむでは、君の力にはなれないんだろう」

カラドホルグが沈黙する。

「君は守護だけで、攻撃が出来ない。違うかい？」

カラドホルグは無言のまま、姿を変えた。人間の姿に変えたカラドホルグの額はぱっくりと割れている。

なごむはカラドホルグの傷に、心臓を抉られた。戦いに応じなければつかなかった傷である。自分を護ろうとしたから出来た傷から、自分の浅はかさによって血が流れている。激しい後悔が浮かび、ユグリート王の言葉が追い打ちをかける。

「ごめんなさい」

カラドホルグの手を握る。

「ごめんなさい、僕のせいだ。僕のせいで……」

「なごむ」

カラドホルグの大きな手が、なごむの頭を撫でた。

「大丈夫だ」

その優しさが、痛い。肺がちぎれそうなほど。苦しい。呼吸が辛

い。

「しかし、これで決まりましたね」

王の背後から、ルシオラが出でる。

「なごむ様に、この国の運命を託すことは出来ない！」

怜悯な教育者は口火を切る。カラドホルグではいけないと、なごむではいけないと、新しいアルケアを探さなければならぬ、計画を練らなければならぬ、訴えかけるように語る。そんなルシオラの言葉を、なごむは他人事のように聞いていた。言葉が頭に入ってこなかった。どうしようもない後悔ばかりが体中を駆け巡って、涙がとまらない。

「……待て」

凜として、響いた。打ちひしがれるなごむにも通る、凜々しさ。ラシヤだった。

「早計だ」

「早計ですと？」

「ああ」

変身を解いて、ラシヤとジャルグボールグが立つ。赤髪を靡かせて、麗しく戦乙女はルシオラに向かった。

「時間をくれないか？」

「時間？」

「ああ。なごむはエン・リーテが見えなかった、つい先ほどまでは」
「なんと！ それではますます……」

ルシオラの口を人差し指で閉ざす、ラシヤ。

「お前は先ほど、なごむがふいについてエン・リーテを使ったのに気がつかなかったのか？」

かっつと、ルシオラの目が見開かれた。

「なんの訓練もせず、なごむはエン・リーテを使ってみせた。本能的に。エン・リーテもまた、それを許した。……教育者のお前なら分かるだろう。この事実がさす意味を」

ラシヤの眉が力強くあがり、舌に熱が込める。

「なごむには可能性がある。奇跡を起こす可能性が」

言い切ると、ラシャはユグリート王へと歩み寄った。そして膝をつくと、

「国王陛下。無理なお願いであるとは分かっています。ですが、私となごむに時間がほしい。強くなる時間が。ひと月、いや十日で良い。どうか時間を！」

ラシャの懇願。頭を垂れ、長髪が地につく。それすらいとわずに頭を更に下げる。

そんな実娘の姿に髭を押さえ、暫し考えぶかけにすると、ユグリート王は静かに首肯した。

「分かった。良いだろう。……最善に、掛けるべきだ。しかし、決断するのは私ではない」

ユグリート王はそう言い放つと、カラドホルグにすがり付くなごむを見下ろした。真剣な眼差しで、唇を開く。

「なごむ。明日の朝、答えを聞かせてくれるね」

決断を促す台詞がなごむの華奢な体にずしりとのし掛かる。命令に近い重みのある言葉に、なごむはカラドホルグの手を握る力を、無意識に強めていた。



カーテンの隙間をぬぐって降り注ぐ月光によって、白い天井に吊られた豪華なシャンデリアが満天の星となる。闇に慣れてきて、覚えるのは違和感ばかりだ。疲れを癒すようにと宛がわれた寝室に寝台、どこまでも覚えのない、記憶の何処にもない場所に何故か横たわっている。

まるで脳味噌だけ宙へ舞っていきそうな不思議な感覚にたゆたしながら、なごむは異世界に来てからのことを振り返っていた。

続いたのは不思議で現実離れした出来事。五感がなければ、確実

に夢といえてしまう空想じみた現実。

突きつけられた親の都合。異世界に来て邪神だと追われ、不思議な理に触れ、従兄弟や叔父と出会い、父親の秘密を知り、力を貸してくれという。

そして、必ず守ると誓う怪獣のような守護者カラドホルグ。

理解しがたいことばかりで、溺れてしまいそうだ。いや、もう溺れてしまっているようだった。重力を僅かに失ってしまったようであり、体をぬるま湯のようなものが覆っているようでもある。酷く鈍麻しているのだ。世界が異なるために、思考が、感覚が、自分が人生で培ってきたものが通じず、解離していくようだった。

自分はどこにいるのだろう。現在地は認識しているはずなのに、迷宮を彷徨っている旅人のような疑念が沸いて払うことが出来ず、胸がしくしくと痛む。心臓に絡みつく柔らかな棘から逃れるように、なごむは寝返りを打った。

寝室の脇ではカラドホルグが椅子に深く背中を預けながら、緑色に淡く発光する石板を抱きかかえていた。

アルケアを癒す石板なのだという。濃縮されたエン・リーテが注入された石板で、一晚抱えていれば疲れが癒えるだろうとラシヤが用意してくれたものだった。確かに効果があるようで、カラドホルグの表情は木漏れ日で昼寝をする赤ん坊のように穏やかだ。

ふいに、忘憂の佇まいのカラドホルグが、

「なごむ。眠れないのか」

漆黒の瞳にぶち当たって、虚を突かれながらも首を垂れる。

「う、うん」

「そうか……。子守唄でも歌おうか？」

「へ？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

「いくつか知っている。なごむの世界の子守唄だ」

どの世界の、という話ではない。そもそも子守唄を歌われる歳ではない。

「だ、大丈夫」

なごむは気恥かしさを感じながら断った。

「そうか」

カラドホルグの瞳に存外にも哀愁の色を漂い、なごむは焦って、誤魔化すように布団をあげた。

「ちよっと、トイレに行ってくるね。気晴らしに。夜の散歩、というか……」

「うむ」

石板を床に置こうとカラドホルグが動く。

「一人で行けるから!」

ついてくる気満々のカラドホルグを声で制して、なごむはベッドから起きあがった。

「大丈夫だから!」

夜着のままドアノブに手を掛けて、念を押す。それからなごむは一人、夜のベールに包まれた城の廊下へと出た。

煌びやかな文様の刻まれた絨毯がえんえんと続く廊下。窓からの月光だけが光源の、コバルトブルーに闇に沈んだ城をなごむは歩き出した。窓の外では兵士たちが庭を徘徊している。侵入者を逃すまいと目を光らせている。庭へ出る道は教わっていたが、出るのは躊躇われた。

透明な棘に囚われないで済むような場所を求める。出来るだけ人目につかないところを。

そうして見当をつけたのは、廊下の果てにある広く張り出した露台だった。人もいなければ何も無い。簡素過ぎて目的の分からないそこが魅力に見えて、なごむは扉を開けた。

「寒……」

外は意外にも冷えている。夜風に触れて、鳥肌がぞわりとたつ。

「昼間はあるに暑かったのにな」

体を擦りながら手すりへと近づく。広がる夜の景色は澄み渡っていた。幾つもの高い塔から覗く二つの月は、女性の爪跡のように細

く頼りなく浮かび上がっている。少ない雲の流れは早い。上空では猛烈な風が吹いているのだろう。

顔を真正面にすれば、遠くには街の明かりがある。それが湖畔に反射して、街がふたつあるように映る。

音楽が聞こえる。眼下に舞踏会場があるのだ。ドレスを着た人々がくるくると踊っている。まるで映画のように。

「まだやっていたんだ」

ラシャを迎えるための夜会が夕方ごろから開かれるといていた。なごむは疲れ切っていたので会場には行っていない。行かなくて正解だった、と思う。あんな華やかな場所で立ち回る術などなごむは持っていない。いや、立ち回るどころか、ただ立っているだけで苦痛だったに違いない。この城にいるだけで、様々な視線が刺さって居心地が悪いのだから。目立つ場所などいれるはずもない。

「父さんが、生まれたところ、なんだよね……」

仏壇の父を思い出す。顔は整っているが何処か純朴そうで、柔らかな印象を人に与える父。それほど思い出もない。普通のサラリーマンだった。元マジシャンの、普通の、生きていれば中年オヤジと間違えなく言われるだろう父。もしかしたら、反抗期なんてもので鬱陶しかったかもしれない父。そんな父が異世界の住人で、王子様だった。

失笑するしかない。

「お母さん知ったら、びっくりするだろうなあ」

母親の理沙が頭の中で目を丸くする。その傍で、克明が狸の置物のようにぽんと出た腹を抱える。

なごむはぶるんと頭を振った。考えたくもないことを、考えてしまふ。

裏切られたようなものだ。二人がどうなったかなど、知りたくない。想像したくない。関わりたくない。なのに、何もしないと彼らはやってくる。困惑していたり、怒り狂っていたり、あるいは心配していたりする。異世界になごむがいるなど、知りもしない彼らは、

或いはなごむを置き去りにして食卓を囲っている。

棘が鋭さを増した。思わずぐっと胸元を掴むと、

「どうしたんだ、こんなところで」

予期せぬ人物の登場に声をかけられ、勢いよく振り向いた。

ソアラだった。薄紅色のドレスを纏うその姿はやはり、女神のよう
に美しい。しかしその表情には鋭いものがあつた。ピンときて、

「もしかして、ラシャさん？」

「ああ。夜風に当たりたくなつてね。少しの間、ソアラに私の真似
をしてもらっている」

なるほど、ドレスアップしたラシャは度肝を抜かれるほどに麗しく、
ソアラにそっくりだ。いつもはサイドに纏めている髪を下ろし、
巻き毛にしている。艶やかな姿なのに愛想は微塵もないあたりがラ
シャらしいが、もし微笑まれでもしたら、ソアラとは全く見分けが
つかないだろう。

「具合が悪いのか」

胸を押さえて俯くなごむに、ラシャが尋ねる。

「や、眠れなくて……。いろんなこと考えちゃうんです」

「いろんなこと？」

「家出したから」

つるりと舌が滑った。言おうとは思っていなかったのに。はつと
して顎をあげると、ラシャは平然としていた。顔色一つ変えずに、
「何か事情はあるとは思っていた」

静かに手すりへと右手の五指をかける。ピアノでも弾くように滑
らかになぞると、

「巻き込んですまない」

「え？」

謝罪の言葉に目をしばたく。ラシャは目を伏せることなく続けた。
「お前とロトは関係がない。ましてや、この世界と関係はない。お
前の父は、異世界で生きると決めたのだから。息子のお前の、知る
ところではないのだ。本当はお前を頼るべきではない。自国のこと

は、自国の力で解決すべきだ。……私の責任だ」

そう言って、頭を下げるラシヤに、なごむは動揺した。

「そんなことないです！ その、ラシヤさんは立派だと思っし……」

「私は、立派な人間ではないよ。お前が断ることを苦手とする人間であることに、私は気付いている」

思わず、言葉を失う。

「卑怯だと思っだろう」

「それは……」

戸惑いながらもなごむは自身が告ぐべき言葉を探した。自分がどうすべきか、どう答えるべきなのか。

「正直なことを話してくれていいんだ。なごむが、どうしたいのか。どうありたいのか」

———どうしたいか、どうありたいか。

ラシヤの声が、心を貫いた。意思を尊重するような物言いをラシヤがするとは思っていなかった。強引に何かが決まってい、そんな流れを作りだした一因である怜悯な少女が、まさか遮るとは。

「僕は……」

なごむは考える。自分はどうすべきなのか。どうありたいのか。振り返り、反芻し、頭を回転させて心を掘り下げるようにあなぐる。どうしたい？ どうすべき？ どうこたえる？

本当の自分の感情とはなんなのか。

「僕は……」

心の中に輪郭を現したのは、

「力になりたいです」

露頭への憧れだった。

くつきりと浮かび上がる。露頭と、死んだ父と、自分とを繋ぐ一本のか細い糸。血の繋がり、或いは記憶の繋がり。自覚して、なごむは頷いた。

憧れと、夢へと、懐かしい温かさへと紡がれていく願い。自分はやはり、この世界で父と繋がっている者たちの手助けをしたいのだ

った。少しでも力になり、感じたいものがある。

露頭という存在を―――。

「分かった」

ラシヤは目を軽く伏せると、ゆっくりと手を伸ばした。

「ラシヤ・ギブリット・ユグリートとして剣と楯とに誓う。ニコタマナゴムを絶対に、強くすると」

気品のある、王族たる、獅子のような威風ある眼差し。ふたつの月を背後に、鮮やかな赤髪が炎のように靡いて揺れる。焼きつくような妍姿の少女は、力強く言った。

「共に闘おう」

第八話「護る者護られる者」(後書き)

>i11128—766<
イラスト・あるぴよ様

第九話「修行の始まり」

日差しの眩しいカラリとした晴天である。ユグリート城にある澄んだ湖畔の傍らに、訓練場があった。城に駐在する兵士達の剣櫓と居合の音が響いている。鍛え上げられた肉体をしなやかに動かし、ウッドソードを用いて互いの技を競い合う兵士たち。その中に、幼くも激しい居合の声があった。

「どうした？ それでも男か！」

赤い長髪を後ろで縛り、甲高い声を張り上げながら木刀を奮うラシャ。対するのは、疲れ切りふらふらになったなごむだった。

まだ日の昇りきらない朝靄漂う早朝よりラシャに案内され、なごむは初めてウッドソードを持たされた。王に告げた答えを、ラシャの前での誓いを、なごむは握りしめている。

「とにかくかかってこい」

といわれ、がむしゃら遮二無二に振るう。柔らかな木を削り作られた練習用の簡素な十字長剣であるが、不馴れななごむが振ると体ごと持っていかれそうになる。

ふらふらとした足取りで櫓を飛ばされながら取り掛かり、どれだけの時が経ったろうか。双子の太陽は既に天高く、鮮烈な太陽光によって生まれる影はくっきりとして小さい。かかり稽古の勢いで立ち向かっていくというよりも、がくがくと震える手足を何とか動かし近寄り、吹き飛ばされるだけになっていた。

「軟弱だぞ！」

するりとラシャに避けられて、なごむはそのまま膝から崩れた。体力の限界がきてしまい、電池が切れたように体が動かなかった。

「起きろ！」

叱咤を浴びても、疲れ切った体を動かすことは出来ない。そればかりか、返事をする力もなく、ひたすらぜいはあと荒い呼吸をするのみだ。ようやく擦れそうな声で繕ったのは、

「もうむり……」という言葉だった。

なごむがもう立てないと理解し、ラシヤは溜め息をついた。その整った顔は涼やかで、汗など殆どかいていない。そんなラシヤの余裕な姿に唾然とする。体力の桁が違うのだ。なごむにはラシヤが化け物のように思えた。

こんなに体を動かしたのは、いつぶりだろう。なごむは運動が苦手で、体育などで全力を出したことが殆どない。罵声を飛ばされ戦々恐々動き続けたが、これほど疲れたのはもしかしたら生まれて初めてかもしれない。

「なごむ」

ふいに視界が暗くなった。カラドホルグが心配そうに覗いていた。

「飲んで」

木彫りのコップに注がれた一杯の水を手渡され、途端に口渴感が喉に貼りついていることに気付く。なごむは焼けつくような喉に水を一気に流し込むと、豪快に咳き込んだ。

「しょっぱい……」

「鍛練時の休憩用だから。でも普通の水よりか飲みやすい」

確かに、染み渡るような味わいがあり、体が喜んでるように感じる。とはいえ、筋肉や骨に澱のように沈み込んだ疲れを溶かすには到らない。

「もう良いか？」

「え……」

ラシヤに声をかけられ、思わず狼狽える。この赤髪の戦乙女が求めている、いや最低限必要とされているものは想像以上に過酷なのだ。それを初めて痛感した体は酷く重かった。まるで泥人形だ。

なごむの困惑に気付いて、ラシヤの顔色が暗く陰る。それに対し、カラドホルグの眼は冷たい。カラドホルグはなごむがこうしてラシヤに従うことを好んでいないのは確かだった。

二人に漂う歪な空気になごむが本格的に窮していると、

「基礎ですな」

いつの間にやら灰色の影がぴよこんとなごむ達を覗いていた。つんと立った耳を可愛らしく揺らし、長い尻尾を踊らせている黒服の猫。ロシアンブルーを彷彿とさせるその姿に深みのあるバリトン。

「ヨーゼルじゃないか、どうした」

「先程まで遠くで見えておりまして、いてもたってもいられなくなりました」

「ほう、三番隊隊長からご助言頂けるのかな」

ラシヤの言葉にヨーゼルは大きなアメジストの瞳を細めると、針金のような髭を軽く引っ張ってみせた。

「無理に剣を振るだけでは負担にしかありません。そればかりか、無駄な筋肉を使ってしまい体を痛めるだけです」

「基礎……」

「ラシヤ様の体には既に刻み込まれています。それに貴女は才がある、器用です。しかしなごむ様は」

「ごほんと咳込むと、

「失礼ながら、些か不器用な方に思える」

ヨーゼルに見詰められ、なごむは生唾を飲み込んだ。値踏みでもされているような気分だ。

「ラシヤ様のかわりに、私が基礎からお教えしましょう」

「……何」

ヨーゼルの提案にラシヤが闇色の瞳をしばたかせる。

「若い兵に技を教えることは少なくともありませんので、慣れております」

サーベルを下げた猫騎士に、ラシヤは考え深げに口を閉ざす。

「……分かった。ただし、私にも教えてくれないか」

「光栄です」

ヨーゼルは右胸の剣を縫った刺繍に右手を置く。

「なごむ様、よろしいでしょうか」

「あ、はい、よろしく願います……」

静かに会釈され、なごむは朦朧とした頭を秋の稲穂のように垂れ

た。

「この国にはいくつかの剣術流派がいますが、最も知られているのはユグリート剣術と呼ばれるものです。初代ユグリート王が完成させたといわれるこのユグリート剣術は、片手剣と盾とを使用します。主な動きは突きとなります」

穏やかな口調で語りながら、ヨーゼルは腰に下ろしていたサーベルとダガーを外すと、無造作に転がっていたウッドソードと盾を手にした。ウッドソードを右手に、盾を左手に握る。

「戦場において、大きく振るのは確実に仕留めるための渾身の攻撃であり、通常の攻撃は突きです。ユグリート剣術には基本動作が十二、ございます。これを形と呼びます」

ビューウ、と一陣の風が吹いた。目にも止まらぬ鮮やかな突きが、虚空に放たれる。なごむの手ではゆらゆらと頼りないウッドソードが、同じ剣とは思えないほどの軽やかな動きをする。まるで鳥のようだ。

ヨーゼルは十二回、剣を動かす。

「大きく振る動作がみつつ、突きに適した動作がむつつ、小さく振る動作がみつつです」

上から振り、横に振り、下から振りあげる。頭にめがけて払うように振る。細かく手首を返して払う。

その動きは、もう一人、ヨーゼルに対する敵がいるようだった。きびきびとした、剣使い。それは十二の振付のようにも見えた。十二の動作を、同じ速さ、同じ位置、同じ角度、同じ距離で放つ。それを何遍も、ヨーゼルは繰り返す。寸分の狂いもない、完璧な運動。「形とは、剣を使うための全ての無駄を排除した動作です。この動きを体に染み込ませ、極めていけば、戦いの動きが速くなっていく相手の隙など、いくらでも作り出せるのです」

機械的な美しさのある剣術に、いつの間にやら観衆が集まっていた。健康的に肌を焼いた剛悍そうな兵士達が、玩具に目を奪われた子供のような表情で立っている。羨望の眼差しの中でも狂うことな

くヨーゼルは剣術を暫くの間繰り返すと、剣の手を止めた。

「基本動作、やってみましょうか？」

ラシャも加わり三人で、形と呼ばれる十二の剣技をひたすら行う。剣の持ち方から、どう腕を入れるのか、どう足を進めるのか、筋肉の動かし方までを学んだ。休憩を挟みつつ何度かこなす内に、よれよれで纏まりのない振りしか出来なかったなごむでも、段々と様になってきたようだった。とはいえ、幼い頃から剣術に打ち込んできたであろうヨーゼルやラシャとは比べようがないが。

日が傾き、強烈だったその瞬きも少し翳り始めた頃、なごむの体力は最後の塵の一粒もなくなった。

足元がふらついて、ついに尻餅をつく。するともう、足腰はたたなくなつた。芯の芯まで、へとへとだ。

なごむの完全な限界を悟って、ヨーゼルはなごむの手から離れたウッドソードを片付けた。

「今日はここまでですね」

ヨーゼルの和やかな微笑みにラシャが頷く。

「ふむ。久しぶりに基礎をするのも良いものだ。気持ちのよい疲れだ」

ラシャの額には、なごむに無計画な指導をしていた時にはなかった汗が浮かんでいる。

「基礎でもしっかりとしたものであれば、全身が疲労するものです。

今日はぐっすりと眠れるはずですよ」

「ありがとう、ヨーゼル」

「いいえ。それよりもなごむ様が。大丈夫でしょうか？」

「無理をさせすぎてしまったようだ」

地に伏せて懸命に呼吸するのに精一杯で、なごむは二人の心配に声も出せず頷いた。疲れのせいだろうか、冷たい大地に背中を預けているのが心地よい。植物にでもなったような気分だ。床に根が下りるという感覚と共に、どっと眠気が押し寄せてきて、なごむは欠伸を噛み締めた。気を抜けばすぐに、睡郷に墜落しそうだ。

うとうとしていると、ふいにふわりと体が浮いた。

驚いて開眼すると、カラドホルグだった。がっしりとしたその腕に包まれて、思わず赤面する。

「熱もある？」

「だっ、大丈夫、歩けるから」

慌てて手足をばたつかせ、下ろしてもらう。その足が地につくも、ふにやりと腰から再び落下してしまった。

「……………うう」

「無理は、するな。なごむは運動が苦手。体育が苦手。運動部には入りたくないと思う。委員会も運動とは関係がないものに入りたい」
小さい頃からの考えそのものズバリを言われて、思わずなごむは窮した。恥ずかしながら、もう無理をしても歩けそうになかった。

「カラドホルグさん、すみません、あの……」

「分かってる」

ひよいと持ち上げられる。なごむは甘えることにした。穏やかな安心感がふわりと浮き上がって、耐えられなくなり、そのまま脱力する。

「おやすみ、なごむ」

無意識の内に、なごむは深い深い眠りの中へとほまりこんだ。

「肉体と共に精神も鍛えられる。精神が鍛えられれば、エン・リーテも見える。エン・リーテは心の深い部分で感じるから……。だから今は、おやすみ」

疲れが呼び寄せた深淵へ。ゆっくりと、ゆっくりと降りていく、その底へと。

なごむは夢も見ずに、朝までひたすら、睡眠を貪った。



開け放たれた窓からは心地よく涼やかな風が吹いていた。切り取られた空は晴れやかで、仰げば心が遠くへ飛んでいってしまいそう

だ。

執務室はユグリート城の高い位置にあった。今日のような良い天気の日には、天空に浮かんでいるような風景が見れる。

しかしながら執務室の中は、外のからりとした雰囲気とは反対に、暗い。卓上に積まれた書類が濃い影を作っている。加えて、書類にまとめられた国内の状況はお世辞にも明るいと言えるようなものはなかった。

ユグリート王は紙に刻まれた情報、各地に起こり始めた災害の被害報告のひとつひとつを丁寧に読み、額に深い皺を作っている。無意識に漏れる溜め息は重かった。

そんな王の様子に、執務室の長椅子で寝そべっていた金髪の青年が、ひよっこりと顔をあげた。

「珍しく深刻じゃん」

ジャルグボールグは焼き菓子を口に放り込み舐めるように咀嚼すると、ニタリと笑った。

「深刻だからな」

眉間を揉みながら、王が呟く。

「日に日に、状況は悪くなっているからね。汚染地帯の広がりが加速している。甲殻乱走が、今年に入って三度も報告されている。このままでは……」

「三年後にはこの国ないかもなあ」

あっけらかんと言われて、王は目を細めた。

「冗談だよ」

「実に笑えない」

普段ならば笑って過ごせる楽観的なジャルグボールグの言葉の数々が、とてもではないが受け止められない。

国を治める立場になってもう二十年近い。いくつも問題はあったが、これほどまでに悩むことはなかった。アルケアの討伐など伝承の中の事柄である。物語の中の悪夢、それが現実を起こってしまったのだった。とてもではないが余裕を生み出すことなど出来な

い。頭が痛かった。

「だが……」

一昨日のこと、ひとつの希望が生まれた。希望は出会った当初どこか迷っているようだった、しかし。その次の日の朝には、少しだけ表情が変わっていた。恐縮しながらも、告げたのだ。力になりた

いと。
ユグリート王は長く座っていた椅子から腰をあげると、凝り固まった筋肉を解しつつ、露台へ足を踏み入れた。露台からは城を見渡すことが出来る。王は視線を落とすと、あるものを探した。それはすぐに目にとまり、不思議と疲れが溶けて頬が緩んだ。

「もうすぐで、笑えるだろうか」

「どうだろうねえ……」

昨日に続き、訓練場には兵士達が溢れている。その中で小さな影がふたつ、剣を重ねあっていた。



「はじめ！ 一、二、三！」

ラシヤは声を張り上げながら剣術の基本動作に基づき、ウッドソードで空を薙ぎっている。

なごむは同調するようにして必死についていく。同じ角度、同じ力、同じ速度で幾度と繰り返し返される、形と呼ばれる剣術の基礎。昨日の疲れが骨にまでこびりついた体は重たかったが、少しずつ剣に慣れてきたようだった。

とはいえ、ラシヤのように剣が体の一部となってしまうような滑らかな動きではない。操っているというには遠いが、少なくとも昨日のように剣に振り回されるようにしてバランスを崩すようなことはなくなっていた。

「うん。そろそろ休憩に入るか」

「ふあいッ」

肩で荒く息をしながら、なごむは頷いた。ウッドソードを杖がわりに木陰へと移り、倒れ込むように樹へと背中を預ける。

「もー……むり……」

丈の低い草の絨毯が火照った体に冷たく心地よい。

緑の爽やかな香りに混ざり、背筋から汗の臭いがした。燃焼する筋肉を冷ますべく体が滝のような汗を出している。衣服と共にべたべたと不快感が張り付くが、それを拭う活力はない。

「なごむ、大丈夫か？」

「うう……」

心配そうに眉をひそめるカラドホルグから、震える手で茶色い皮袋を受けとる。中にはたっぷり水が入っていた。コルク栓を開けた途端にあふれでた水を大きな口を開けて受け止めると、なんともいえない幸福感に包まれた。

「おいしい」

「それは良かった」

カラドホルグはフツと口角を上げると、

「今度はこれを」

手際よくサツと飴を渡され口に含む。塩気と甘味の融合した絶妙な味わいが舌に広がり、これまた至福だった。

「……まるで乳母だな」

ラシャが腰に手を置きながら、溜め息まじりに笑う。ウッドソードを樹にたけかけると、彼女は少し離れた位置に腰を下ろした。

「しかし、水は分かるが何故、飴なのだ」

「なごむの世界ではよくする。疲れを癒して体を作るために、塩と甘味はよい」

ラシャは思案毛に、ふうんと鼻をならした。

「そうか……。この世界でいうと、ビヤクガのようなものか？」

カラドホルグが静かに頷く。

「びゃきゅが？」

聞きなれない言葉に、なごむは飴玉を転がしつつ頭をかしげた。

「……運動をした後に食べると良い」

「美味しいんですか？」

「苦い」

「僕の体にも良いですか？」

カラドホルグの回答に、うつ伏せになっていたなごむは上体を起こした。まさか興味を持たれるとは思っていなかったのだろう。カラドホルグは狐につままれたような顔を見ると、少しばかり虚空に視線を泳がせた。

「なごむの世界と、この世界は不思議と似ている」

普段は寡黙なカラドホルグの口が珍しく大きく開かれた。

「……エン・リーテは存在せず文明も異なる、違う。しかし、物の形や理はよく似ている」

カラドホルグは足元の雑草をつまみあげると、指先でクルクルと回す。

「例えば、草木の形や、知能の発達した動物の形は大体が同じだ。命の巡り方さえも。何もかも違うのに、何もかも同じ。なごむの世界にあるお伽噺には、この世界を綴ったようなものもあった」

雑草は風見鶏のように三百六十度に広がる世界を見渡すと、ふいに吹いた突風に飛ばされた。

「元はひとつの世界だったとしたら、……面白い」

「え？」

「昔、ロトが言っていたから」

ふいにカラドホルグの目が細められた。何かを懐かしむような、或いは悲しむような、陰りのある表情にドキリとして、なごむは地面に視線を落とした。覗いてはいけないものを覗いてしまったような後ろめたさが何故だか胸をかすめた。

「つまり物は試しということだ、少年！」

突然、ぐいと首根っこを持ち上げられて悲鳴をあげる。慌てて首を回すと、お気楽そうな顔が目飛び込んできた。

「ジャルグボールグさん!？」

いつの間にそこにいたのだろう。にやけながら、なごむを立たせるジャルグボールグの右腕には、抱え込まれるようにして大皿があった。大皿に山の如くこんもりと積まれた食べ物は、甘い匂いを放っていた。焼き菓子だろうか、大小様々な形をしている。その一端にちよこんと添えられた白い豆のようなもの。

「これがビャクガだよ、少年。さあ食べて元気になろう！」

異世界に来て数日経ち、異世界のものは幾つか口に入れて抵抗はない。

「……すみません」

なごむは恐る恐る手に取ると、そのまっさらな球体を凝視した。白い豆のようだが、グミのような弾力があり、力を入れたらプチリと潰れてしまいそうな感触だ。

「あのっ」

「うん？ 何を躊躇う、若者よ」

「えっと、その……。苦いんですよね？」

カラドホルグが頷き、ジャルグボールグが目を輝かせている。

「ちよっぴり大人の味だ！ さあ、大人の階段を上ってみようじゃないかあっ」

「……分かりました。いただきます」

そう言いながら、なごむはグニグニとビャクガを指で弄んでみる。苦いのは苦手だった。大丈夫だろうか、そんな迷いに戸惑っている

と、

……ビャクガが動いた。

「!？」

触覚のようなものがビャクガに生え、ワサワサと揺れている。それはまるで、アレのように。

「あれ、生きてる。生焼きだったかなア」

頭を掻くジャルグボールグに、ラシヤが眉間の皺を寄せる。

「また火を通すのを忘れたのだろう。土から掘り起こすだけで満足して」

「生だから苦味が強いかもね。まあ食える、食える。って、どうしたの。顔まっさおだケド」

「む……む……虫いい!!」

なごむは絶叫すると、ビャクガを放り投げた。

第十話「宵闇の語り部」

妙にきらびやかで広い風呂に浸かり、虫のでない食事を済ませて寝室へ戻ると、深い安堵が下りてきた。ベッドに仰臥位になって寝具に身を沈め溜め息をつく。思いのほか深い吐息が零れ、なごむは驚いた。

「こんなに運動したの、生まれて初めてだもんなあ」

馴染みのない豪華な天井に燦る、齢十二の太息。

「なごむ、大丈夫か」

「あ、大丈夫です！」

「そうか。何か飲むか？」

首を横に振ると、カラドホルグは長椅子に腰をかけた。なごむが完全に眠ったのを見計らうと、彼は自身に宛がわれた寝室へ戻る。それにしても。

数日まで顔も知らなかった精悍な青年が寝室にいるというのは、なごむにとってなんとも奇妙な光景だった。その一方、あっても良さそうな居心地の悪さがない。そればかりか、安心感すら感じる。

不思議だ、と思う。

人間ではない、無償でなごむを守護しようとする存在。うち解けやすいタイプではない、そんな自分の心がろくな交流もなく許してしまう存在。

本当に、不思議だ。

披露した筋肉をほぐしながらぼんやりと見つめていると、祈るように口を閉ざしていたカラドホルグが、ふいに顔をあげた。

「やめてもいい」

「え？」

意図が分からず問うと、今度ははつきりとした口調で言う。

「つらければやめてもいい」

手を止めた。連日の激しい運動のために、筋肉が軋んだ悲鳴をあ

げ、皮膚の下で静かに響いている。確かに、体にとっては、痛い。しかし。

「痛いけど、……つらくはないです」

なごむは寝具の上で姿勢を整えると、

「それになんだか楽しいんです。運動部も選ばなかったし、こんな風に体をうごかしたことはないからかもしれないです。疲れるんですけど。……体を動かすのって、きもちいいんですね。僕、知らなかったです」

なごむの発言にカラドホルグは暫し黙っていたが、小さく「そうか」と頷くと、長椅子に背中を預けた。カラドホルグが再び目を閉じようとしたところで、思いついたようになごむは声をあげた。

「あのっ」

「どうした？」

「昼間の話なんですけれど……」

「すまない。なごむが虫を食べないことを忘れていた。イナゴしか食べない、うん。イナゴのつくだに？ ……も、なごむは食べない」

「その件はいいんです。その、そうでなくて……」

赤面しつつ、なごむは首を振った。そして口ごもりながらも、

「おと、……お父さんの事で」

なごむから父親の事を聞かれるとは予想していなかったのだろう、カラドホルグは少しだけ目をしばたいた。

「何を？」

「その、えーと」

考えていなかった。ただ昼間に父の話題がカラドホルグの口からふいに漏れたのが、心に引っかかっていたのだった。声を出してから、具体的に何を尋ねればいいのか考えをめぐらす。

「……どうして異世界に行っちゃったのか、とか」

なごむからの質問に、カラドホルグが暫し考え込むように目を瞑った。不味い質問をしてしまったのだろうか。

「すみません。もし駄目だったら大丈夫です」

「待て、言う」

なごむが頭を下げると、カラドホルグはゆっくりと片手をあげた。
「ある日、本を見付けた」

記憶が埃を被っているのだろうか。カラドホルグは目を細めたり開いたりしながら、続ける。

「古い本だ。王立図書館の門外不出とされる、伝承を纏めた本の管理された部屋だ。開かずの部屋だったそこを、ロトが見るんだと聞かなかった。頼むと言われて、俺が殴ったら、上手く開いた」

そして拳をつくると、ぶんと振り下ろす。

「扉を、こう……」

「それって、良いんですか？」

「良くは、なかったのだろう。司書が頭をかかえていたので」

その場を想像して、苦笑いが浮かぶ。

そういえばラシャと出会ったとき、彼女はこう言っていた。“噂通り”と。乱暴に事を解決しようとしたり、状況が理解できず呆気にとられていたときに出た“噂通り”という言葉だった。挙句、変身を解けといわれた。

「変わってたんですね」

「変わっていた」

即答されて、思わず渴いた笑い声が出る。その反面、なんだか嬉しかった。錆びついた記憶の中で同じ場所に留まっていた父親が、生き生きと歩き出したようだった。

「古い本には幾つかの世界と、その場所に繋がる道、世界に行くための方法が書かれていた。エン・リーテの力を高度に使った、古い技だった。あれは好奇心の塊だったので、今度は行くと言って聞かなかった」

「それも、……反対されませんでしたか？」

「ロトは王位継承権を弟に譲っていた。自身が王に向いていないという判断で、先代も同意していた。それ故に比較的自由ではあったが、やはり問題は多そうだった。だから、失踪することに決めたの

だ」

大それた行動になごむは仰天した。

「失踪!？」

「さすがに反対してみたのだが、ロトは自分が消えた後の処理についても具体的に書類に残すといった。こうも言っていた。これは家出であり、遅い反抗期を楽しむのだと」

絶句する。変り者というより、奇天烈な人物だ。

「迷惑だったんじゃ……」

「うん、迷惑だったろう。……だが、楽しかった。あれといると、面白い。苦痛も不幸も、何でもない無味乾燥なことでさえも、面白くなる」

カラドホルグが口の端を僅かにあげる。楽しい思い出を懐かしむ温かい表情がそこにはあった。

一見にして頑なで、寡黙なカラドホルグの表情をこんな風に和らげる人がいる。そしてそれは遠い日々古びてしまった父であり、その父には予想もしなかった破天荒なエピソードがある。

そのことがじんわりと心に沁みて、なごむの胸は躍り、……コルクを回されるようにキリキリと痛んだ。

「お父さんと異世界にきて、どうしたんですか？」

「俺というエン・リーテの塊を異世界に運び込んだことによって、その分だけのエン・リーテは操ることが出来た。なごむの世界の人間達の心の動きは、エン・リーテと似ていた。心とエン・リーテを少しずつ照らし合わせ、俺達は理と言葉とを知った」

カラドホルグは離れていた両の手を、ゆっくりと組んだ。

「あれは驚いていた。言葉は違くとも、世界はまるで源流を共にしているかのよう似ていた。仲間が笑えば笑い、仲間が悲しめば悲しむ。なごむの世界に慣れるのは、そうむずかしいことではなかった。漂流者のように最初こそどうなるかと思ったが、思いついてやったエン・リーテの技が、恵みとなった」

言葉の意味を考えて、なごむはピンときた。

「……マジック？」

「そうだ。俺達はマジシャン、と呼ばれた」

マジシャン、奇術使いのことだ。

ラシヤはエン・リーテを光の粒であり、世界の血液だと言った。

火を起こし、風を巻き、大地を育むのだと。なごむにはエン・リーテは見えないが、カラドホルグやジャルグボールグがエン・リーテを使って様々な事象を巻き起こすのを見た。それはまるで、お伽噺に出てくる魔法のような。

そこまで考えて、なごむは思った。

“魔法。”

もしもこの世界の人間がエン・リーテを携え、なごむの世界で操ったら、きつと魔法にしか見えない。なごむの時代では科学が発達し、物事に対して様々な理論や仮説や理屈が生まれた。

だからこそ、エン・リーテの奇跡はトリックだと思われ、人々のカテゴライズによって、種のある奇術を扱う天才マジシャン・霧頭と炎の獣のマジックが生まれたのだろう。そして、受け入れられた。もし時代が異なっていたら、きつとこう呼ばれたことだろう。

魔法使い、と。

「いさかいなく世界に溶け込んだ俺達は、マジシャンとして優遇されながら世界を巡った。そしてとある舞台で理沙と出会い、……心を奪われた」

「まさかお母さん、一目惚れされたの？」

「そうだ」

途端に、気まづさが襲ってきた。尻の座りの決まらない居心地の悪さがじわりと内臓からせり上がる。

父の話を聞くということは同時に、母の話を聞くということ。他人の恋仲を耳にするのでえ思春期を前にした成長途上のなごむには気恥ずかしいことであるのに、両親の恋仲である。しかも母親とは、その系統の話で拗れたままになっている。

頭の中で理沙の悲痛な訴えが響いた。ちゃんと話そう、という千

切れそうな叫びに似た声。自分が逃避して退けた懇願が。

サツとなごむの表情が強張ったのを、カラドホルグは見逃さなかった。

「やめるか」

「……あ……」

「なごむの求める方で良い」

突き刺すような鋭い光と相手の全てを受容するような穏やかな色合いをもった瞳を向けられて、なごむの舌は鈍重なった。

「……なんで」

一時の間を置き、縋れながらも舌が動き出す。

「なんで指輪に？」

理沙と克明の制止から逃れたあの日、何故か持ち出してしまった指輪。その正体はマジシャン霧頭の肌身離さずにいた指輪であり、カラドホルグが変貌した姿であり、結婚指輪であった。カラドホルグはどうして、何年も十何年も無機質な金属の環に化けて沈黙を貫いていたのか。

なごむが拒絶した母親。その名残の中で、そればかりは気になった。

カラドホルグは唇の内側で一度だけなごむの問いを反芻すると、淡々と、しかし熱のこもった口調で続けた。

「過去を断ち切り、理沙やなごむのいる世界で生きるために。護るために」

一言一句を漏らさないよう配慮がなされた、決意の滲む明確な回答になごむは、

「……お父さんが死んで、異世界に戻らなかったのはどうして？」
「なごむを守ると約束した」

明確な意思のある言霊。澄んだ鉱石のように硬く美しい誓いが輝いていることに、なごむは衝撃を受けた。強烈な痛みや音に当てられて心臓が肋骨を弾く、そのような衝撃ではなく、実に静かな、魂に直接響くような衝撃だった。

感動、感銘といった語で形容される戦慄に囚われ、なごむは言葉を失いかける。

突風に火を奪われた炭火のように、燻り出た、最後の問い。

「……でも、寂しくは……」

それを絞り出した瞬間、突然に寝具がぐらりと揺らいだ。

これは一体どういうことか。熱を浴びる蠟のように掛けものが、シートが、寝台、部屋が溶けていく。どろりと滑らかな液状となる端から、朱色に染まる。

まるで血を固めた蠟の海に取り残されたように。

カラドホルグも、また。

「カラドホルグさん！」

なごむ以外のありとあらゆる物質と結合し、沈んでいくカラドホルグに手を伸ばす。

「待って！」

表情のない顔に触れる。寸前、その姿が完全に落ちて消えてしまう。ドロドロになくなってしまふ。

すがるように、なごむは絶叫した。

「カラドホルグッ！！」

気付くと痺れるほどに右腕を天井へと突き上げていた。跳ねるように起きあがり、水面から顔を出したように空気を飲み込んだ。

咳き込む。破裂しそうな程に拍動する心臓を喉元に、なごむは信じられない思いで周囲を見渡した。

いつから？ どこまで？

“夢を 見て ”

部屋にカラドホルグの姿はなかった。数分前か、数時間前か、なごむが深い眠りの底へとついたのを確かめ、部屋を後にしたのだらう。

寝台の上で現実と照らし合わせてみれば、夢を見ていたのだとい

うことは推測出来た。

だが、あまりにも現実と夢の境界があやふやすぎて、まるでカランダホルグが忽然と消えてしまったようにしか思えない。冷えた濃い霧のような孤独感が、ふわりと漂った。

なごむは呼吸を整えながら掛けものを剥ぐと、寝台からのろのろと這い降りた。

眠気は見事な程に吹っ飛んでいる。とてもではないが、このまま目蓋を閉じてでも眠つけそうになかった。

喉も強烈に渴いている。その為に体の中の不快感は泥のように濃厚だ。

寂しさも手伝って、なごむは全身にのし掛かる筋肉の痛みを背負いながら部屋を出た。

暗がりに開かれた目は、雲ひとつない二つの月明かりによって、迷うことはなさそうだ。くっきりと廊下の絨毯の模様まで分かる。見回りの兵士たちもそれほど多くはないのか、遠目にはいない。静寂があたりを包んでいる。

ぼんやりと廊下を眺めていると、あの露台へ行ってみたいな、という気持ちが体の内側をふわりとかすめた。

止めるものはいなかった。欲求に従って、なごむは先日の夜も使用した露台へと向かった。

ゆっくりと近づくと、露台には先客がいるようだと分かった。

ランタンに似た、薄明かり。

気配を消すよう呼吸を抑え、窓付きの扉の側にそっと寄って伺う。そこにいるのは覚えのある人物だった。

正四面体の薄い布、蚊帳のようなものだろうか。不思議なことに橙色の落ち着いた光を放っている。

裾をゆったりと広げたその中に、書類と本とかが乱雑に置かれた白い円卓と椅子。

事務作業をしているのか、唇を引き締めてサラサラとペンを走らせている。ペンに羽がついているので、その手元はなんだか愛くるしい生き物のようだ。

すばしっこく駆け回る生き物を操るは、深紅の髪の少女。
ラシャだった。

こんな夜遅くまで、少なくとも遊んでいるわけではなさそうだな。なごむは邪魔をしないように、そっと遠ざかろうとして、

「どうぞ」

呼び止められて心臓が跳ね上がった。

「そこにいるんだろう、なごむ。来ると良い」

いつの間に気づいていたのだろう。

バクバクと動悸がした。

「待っていてくれ、ここを書いたら……」

「よく分かりましたね」

「なごむの歩き方は覚えた。音を聞けば十分だ」

ラシャは視線を書類に落としたまま、

「……よし」

一段落ついたのか、ペンを置いて顔をあげた。

「おや。なんで泣いている」

「え？」

ぱっと目元に触れると、指先が湿り気を帯びた。掌を下ろし広げてみると、濡れていた。

覚えのない涙に首を傾げる。

「目にゴミでも入ったのかな」

「怖い夢でも見たんじゃないか」

ドキリとして、なごむは目を丸くした。

「冗談だよ」

「はは……」

思わず乾いた笑いが出る。誤魔化すように、なごむは口を開いた。

「勉強ですか？」

「仕事場だ、簡易のな。夜風が涼しくて捗るんだ」

「この蚊帳みたいな、光るんですね」

「光幕という。エン・リーテの影響を受けやすい、光を溜める植物で編み込んであるんだ。その植物を乾燥させた香も焚き染めてあって、虫や獣避けにもなる。森に行けば、生えているぞ」

「便利なんですね」

「ああ」

ところで、と、ラシャの眉間に深い皺が寄った。

「眠れないのか」

「いえ。ちよつと、途中で目が覚めたんです」

「……そうか。カラドホルグが心配しているだろう」

「カラドホルグさんは知らないです。僕が起きたこと」

「知っているぞ」

意外なことをきっぱり言われて、

「部屋にはいなかったし……」

「アルケアと護られるということとはそういうことだ」

信じられず口を閉ざしたなごむに、ラシャは穏やかに語った。

「細い糸のようなものでずっと繋がっている。だからカラドホルグはなごむが動いたことを知っているし、今ごろ私と接触したことで心配もしているさ」

「そんな」

「試してみるか？ 私がもし拳を振り上げれば、瞬時にカラドホルグはやってきて、私に噛みつくだろう。そして同時に、ジャルグボールグはカラドホルグを爪で引き裂くだろう」

想像して、ぞくりと皮膚が総毛立った。間違えがあれば、瞬く間にあたりは血だまりになってしまふのだ。

「おい」

ラシャが僅かに声を荒げた。

「安心しろ。私はそこまで馬鹿ではない」

例え話を本気にとられたのを気にしてか、ラシャの元来険しい表情が余計に険しく固くなった。

性格のせいなのか表情のせいなのか、多分その両方で、どうにも冗談なのか本気なのか捉えづらいラシャである。しかし、本人はそのことに気づいていないようだ。

なんだか可笑しく思えて、なごむは小さく笑った。

「なんだ？」

「いいえ。鉄壁のボディガードがいるなら、安心ですね」

「そうだな」

ふいに、なごむの胸はまた兎のように飛び跳ねた。

静かな夜。二つの月が賢い老人のように二人を見下ろしている。目の前で月光に照らされているラシャは、そんな夜に神秘的な美しさを放っていた。

生まれたての溶岩のように煌めく赤い髪がより煌々と輝き、長い睫毛も黒い瞳も整った麗しい鼻梁も、涼やかだ。

少しは慣れたかと思ったが、やはり異常なほどに綺麗な顔立ちの少女である。

澄んだ空の夕陽と出会ったような、ふいに痛感する感動をラシャは自身の外見で人に与えることが出来る。絵画のモチーフや映画の花形となるような、特別な容姿をした人間だ。

そんな少女と二人きり。

いや、それ以前に“オンナノコ”と“夜”に二人きり。

よくよく考えれば、これは少し……。

「そうだ、なごむ」

「はえッ!? はい!」

ラシャが思い付いたように声をあげた。そして、真剣な眼差しで、
「私に勝ったら、なんでもしてやるぞ」

「……………はいい!」

耳を疑い我を失いかけ、素っ頓狂な声が出た。

どういう意味か。いや、待て、待て、いや。思考と焦燥がグルグル回る。混乱がピヨピヨ目の前でダンスする。

「…………こっ、こっ、こっ…………」

「こ?」

「…………困ります!」

「なに、困るのか!」

「当たり前じゃないですか、僕まだ、そのッ、…………困るんです」

耳まで紅潮して黙り込んだなごむに、ラシャは暫く目を閉じると、
「ふむ。すまない、ジャルグボールグがそういえば喜ぶといったのだが。なごむは特に欲しいものはないのだな」

「じゃるぐぼーるぐ…………さん? 欲しい…………もの?」

「しかし良いのか? 甘いものが欲しければ料理人に食べきれないほど用意させるし、御用達の鍛冶屋に観賞用の良い剣を打たせても良いんだぞ? 遠慮するな」

ラシャの言葉には一切の不健全さがなかった。気前の良い、なんとも頼もしい姿に、なごむは恥ずかしくて恥ずかしくて穴を掘りたくなった。

「…………なんで泣いている」

「目にゴミが入って」

「そうか。植物が乾燥し始める季節だからな。もう早く寝ろよ。私もそろそろ眠る」

「はい…………。ラシャさん、おやすみなさい」

「ああ。おやすみ」

なごむはしょんぼりと頭を下げつつ、ロボットのよう固い動きで踵を返した。

「あ、待て」

「はいっ」

呼び止められてビクンと振り返ると、珍しく眉間に皺のない和やかな表情のラシャがいた。

「ラシャで良い。お前と私たちは、敬称をつけるような仲じゃないだろう。それにお前は、私の従兄弟じゃないか」

それは、思いも寄らなかった。親しい関係を作るのが苦手ななごむにとって、あまり耳慣れない言葉だった。まさかこんなところで、こんな風に聞くとはい。

驚きが体を占めたあと、次いでやってきたのは、なんとも言えない嬉しさだった。

「うん！ おやすみなさい、ラシャ」

なごむは弾けるように微笑むと、その場を後にした。

学べよ悟れよ？

城で三度目の夜が過ぎる。

肉体的な疲労は限界値近くまで蓄積されていた。目覚めて起き上がった途端に鈍い痛みが響き、油を差していない機械の気持ちはこんな感じだろうか、となごむは思う。

朝食と身支度を済ませ部屋を出ると、空は高く、晴天だった。

今日も外に出ると思いきや、使用人達は外ではなく別の塔へと案内を始めた。

廊下をしばらく渡り、通されたのは書斎だった。

いや、書斎というにはあまりにも広く、豪奢である。

書物のおいが鼻腔をついた。凄まじい量だった。

山のように本が並べられており、形容するならば本と本棚で出来た塔のようだ。やけに長い梯子が上へと伸びており、なごむの頭を河川敷からよく眺めていた建設途中の高層ビルの光景がよぎった。

夢想するなごむに、

「おはよう、なごむ」

振り向くとそこにいたのは、二人。

「おはようございます」

カラドホルグは座椅子に腰を下ろし、ラシヤはというと昨晚と同じように長机に書類を広げてペンを走らせている。二人とも相変わらず愛想が良いとは御世辞にも言えない表情である。もしも誰かに二人は喧嘩の最中だと言われたら、確実に信じてしまうことだろう。

「遅かったな」

「ごめんなさい。……ラシヤ」

ラシヤは口元だけを緩めてペンを置くと、なごむに椅子へ座るよう片手をあげた。おずおずと従う。

一体、何だというのだろう。何が始まるというのか、まるで突然呼ばれた三者面談だ。

「エン・リーテは見えるようになったか？」

ラシャに尋ねられ、なごむは首を横に振った。ここ数日、言われたとおりに剣を振っているが、エン・リーテの存在は相変わらずわからない。本当に見えるのだろうかと疑問には思っていない。が、気配すら感じない。

「そうか」

ラシャは眉間を揉みながら呟いた。

「カラドホルグとの絆は深まってはいるのだろうか？」

頷いたのはカラドホルグだった。

「以前より、なごむの存在する位置がつかめている。護りやすくなった」

「ふむ。影響は受けやすくなっているはずなんだがな。やはり、森に行く方が良いだろうな」

「森？」

話の意図が汲み取れない。そもそもなぜ、この場所に招かれたかさえさっぱりなのだ。

「森へ行って、どうするんですか？」

ラシャはなごむにしっかりと伝わるよう、ゆっくりとはっきりした口調で答えた。

「人間の手が増えられていない森は、エン・リーテの影響を受けやすいのだ。人間が加工して新しく作り出したものは、新しければ新しいほどエン・リーテの流れが悪い。だから、ユグリート城や都の中ではエン・リーテが見えづらい。だから森へ行った方が良い、ということだ」

なごむは思い出す。エン・リーテは世界の血液のようなものだ。あの説明で、満遍なく世界に存在するものだと考えていたのだが。

「……移植、に近い」

「移植？」

なごむの疑問を感じ取って、カラドホルグが口を開いた。

「エン・リーテが流れやすい道がある。だが断ち切ると、流れは止まる。なごむの世界では、移植という医療技術があったが、それと似ている。体の一部を他に移すと、新しい血管や骨や肉や皮膚が出来て、時と共にそれが再生するだろう。そして時間が経つにつれて、正常に機能していく……」

なごむの世界に合わせた例えに、ピンと合点がいった。それならば、世界の血液という考えにも結び付く。

それにしても。カラドホルグから移植という言葉が出てきたことになごむは驚いた。ましてや、なごむの世界の、ごく一部の問題である。物静かに口を閉じていることが多いから、そういった自身には関係のない事柄には興味がないのだと思ひ込んでいた。

見た目や言動と異なり、知識に対する欲求が強いのもかもしれない。

「カラドホルグさんって、物知りですね」

「てれびが物知りなんだ……」

感心するなごむに、カラドホルグは普段よりほんの数ミリ目を見開くと、恥ずかしそうに視線をそらした。

「森に行くという意味は汲み取ってもらえたみたいだな」

ラシャは、しかし、と人差し指を立てた。

「問題はある。森は危険だ。様々な生物がいる。毒を持った植物も多い。それに、巨大な甲殻虫に遭遇するかもしれない」

頭に数日前のことが浮かぶ。甲殻乱走に襲われた街のことを。

巨大な蟻に似た虫は、分厚い外壁へと次々に突撃し破壊していた。中には火さえ効かないものもいた。

映画のように現実感のない光景で、なごむはただただ驚愕し戦慄する傍観者だった。もし、当事者になったとしたら。

青ざめるなごむにラシャは、

「だから、……備えが必要になる」

「備え？」

「森についての知識をつけるのだ」

「必要ない」

きっぱりと遮られた。

「俺が護る」

カラドホルグだ。

「しかし、二人はまだ完全なアルクトテロスではないのでは。警備できる兵も城とは比べられないと」

「俺一人で十分だ」

静かに睨みあう二人に、なごむはごくりと唾をのんだ。

まさか、部屋に入った際に感じた邪険な空気は正真正銘の本物だったのだろうか。

冷や汗をかいていると、

「なごむは」

「はい！？」

「なごむはどう思う？」

突然ラシャに意見を求められて、なごむは頬の肉をひきつらせた。

「どうって……」

「強くなりたくはないか？」

ラシャの問いが、棘となってちくりと胸に刺さった。

カラドホルグを見上げる。唇を閉ざしなごむを見つめるカラドホルグの目は、穏やかだ。まるで肉親のように。

「カラドホルグさん、備えて、森へ行ってもいいですか？」

「……なごむ」

悲しむでなく落胆するでなく、カラドホルグは名前を呟くと、や

はり首を縦に振った。

カラドホルグはなごむに反対しない。優しく、すべてを受け入れてくれる存在。

「ありがとう、カラドホルグさん」

深々と頭を下げると、なごむは少しだけ眉間の皺が和らいだ様子のラシャに向き直った。

「えっと、今から森へ行くんですよね」

「……今からは行かない。なごむには森へ行く前に森にある危険についてや、危険回避の方法を学んでもらう」

「勉強、ですか」

「そうだ」

なるほど。だからこの場所に呼ばれたのか。

周りを見渡す。どこもかしこも本ばかり。勉強はあまり好きではないが、これならば集中できそうだ。体も筋肉痛で錆び付いたようだし、丁度良いかもしれない。

促されてなごむは椅子に座ると、威勢良く頭を下げた。

「宜しく願いますッ」

「……教えるのは私ではないぞ」

「へ？」

なごむが調子の外れた声をあげると、靴音が廊下から響いてきた。冷たい廊下を神経質なほどに整ったテンポで叩くそれは、書斎の前でぴたりと止まる。

ノックは、五回。これまたロボットのように正確な。

「良いぞ」

ラシャの了解を聞き取ってその人物は、きびきびとした所作で部屋へと足を踏み入れた。

「失礼します！」

毅然とした佇まい。射るような鋭い眼光。なごむに向けられる、氷のような気迫。尋ねてきた人物は、教育係のルシオラだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976/>

アルクトテロス～異世界の守護者

2010年11月6日22時25分発行